

きょうわ ちょう
共和町

リヤムナイ 3 遺跡(1)

— 一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成16年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

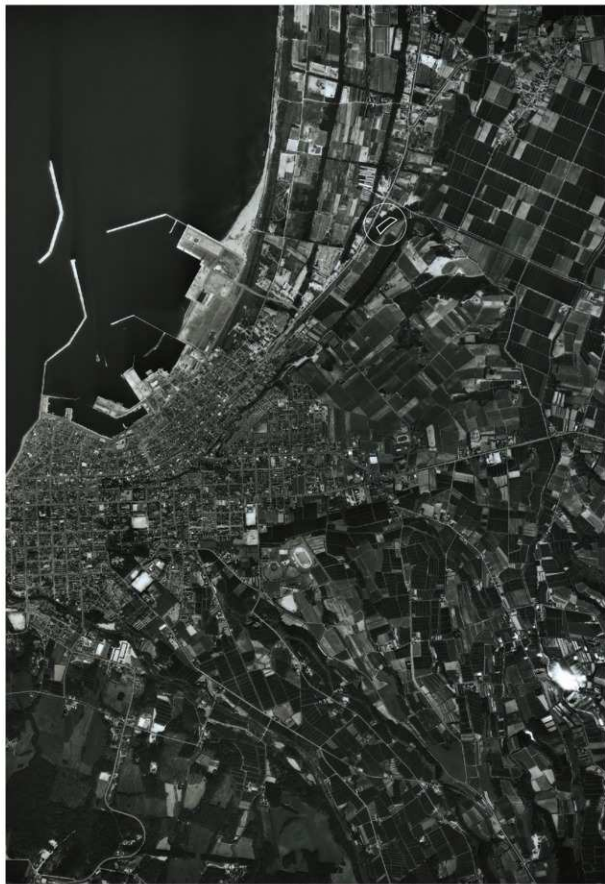
きょうわ ちょう
共和町

リヤムナイ3遺跡(1)

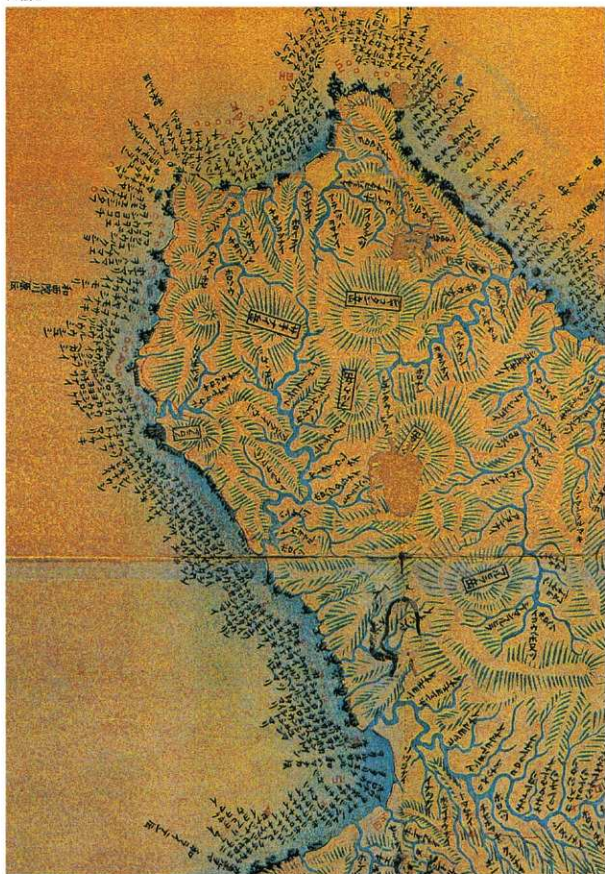
— 一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成16年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺の空中写真（国土地理院発行のものを複製したものである。）97年撮影



東西蝦夷山川地理取調図 松浦武一郎 著



1 調査風景（南から）



2 岩内線西前田駅プラットホーム跡

口絵 4



1 S-1 出土状況 (西から)



2 S-1 出土遺物



基本土層

例 言

- 1 本書は国土交通省北海道開発局小樽開発建設部が行なう一般国道276号岩内共和道路工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成16年度に実施したリヤムナイ 3 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は第2調査部第1調査課が担当した。
- 3 本書の執筆はⅥ章を除いて遠藤香澄、笠原興が分担した。編集は笠原が担当し総括した。文真は文末に記してある。
- 4 遺物の整理は土器を遠藤、石器等を笠原が担当した。
- 5 写真撮影・現像等の写真業務は笠原が行なった。
- 6 各種同定、分析などは下記に依頼した。
放射性炭素年代測定：株式会社 パレオ・ラボ
- 7 調査報告終了後の出土資料および記録類については共和町教育委員会が保管する。
- 8 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご協力、御指導をいただいた。(順不動、敬称略)。
北海道教育委員会、国土交通省北海道開発局小樽開発建設部、三陽建設工業株式会社、共和町教育委員会 澤田正幸・山城美治・見年 昭・小林英樹・浜田 豊・宮崎勝雄、かかし古里館、岩内町教育委員会、泊村教育委員会 大谷武史・田部 淳・村上章久、ほくでん原子力PRセンターとまりん館 大和谷正人・吉田玄一、小樽市立博物館 石川直章、余市水産博物館 乾 芳宏、北海道新聞社岩内支局 武藤理司、岩内町郷土館、岩宇郷土史研究会 岩内町 浅賀輝夫、小樽市 渡辺真吾、小樽市 佐藤美智雄、伊達市教育委員会 青野友哉、千歳サケのふるさと館 高橋 理

記号等の説明

- 1 本文および図表中では、以下に示す記号を使用した。

F：焼土 S：集石 FC：フレイク・チップ集中 SP：鉄道関連施設

- 2 実測図の縮尺は、原則として以下のとおりであり、すべてにスケールをつけている。

遺構 1：40 遺物出土状況図 1：20 復元土器 1：3 土器拓本 1：3

土製品 1：2 剥片石器 1：2 磨製石斧 1：2 礫石器 1：3

- 3 遺構図の出土遺物は下記の記号を使用した。

土器：☆ 頁岩剥片：△ 玄武岩剥片：▼ 黒曜石剥片：□ 骨片：× 炭化材：■

- 4 遺構図中の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高（単位m）である。

- 5 遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（ ）で記し、不明のものは—で示した。

確認面での長軸長×短軸長／底面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深・最大厚（単位m）

- 6 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の覆土についてはアラビア数字で表した。

- 7 土層説明には『新版標準土色帖19版』（小山・竹原1997）と『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編1997）を引用した。

- 8 石器・土製品・石製品の大きさは「最大長×最大幅×最大厚」（単位cm）で示した。剥片石器、礫石器は機能部にこだわらず、長軸を長さ、短軸を幅、厚さは最大値を採用した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。

また、実測図中でたつき痕は「V-V」、すり痕は「|ー|」で範囲を表した。

目 次

口 絵	
例 言	
記号等の説明	
目 次	
挿 図 目 次	
表 目 次	
図 版 目 次	

I 調査の概要	
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	3
II 遺跡の位置と環境	
1 位置と環境	7
2 周辺の遺跡	19
III 調査の方法	
1 発掘調査の方法	25
2 調査区の設定	26
3 基本土層	26
4 整理の方法	27
5 遺物の分類	27
(1) 土器	27
(2) 石器等	28
IV 遺構と遺構出土の遺物	
1 集石	35
2 焼土	41
3 フレイク集中	42
V 包含層出土の遺物	
1 土器・土製品	47
2 石器等	60
VI 自然科学的手法による分析	
1 放射性炭素年代測定結果	73
(株)パレオ・ラボAMS年代測定グループ	
VII 小 括	80
一覧表	81
写真図版	
引用・参考文献	
報告書抄録	

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I-1 遺跡の位置	2
図 I-2 遺跡と周辺の地形	4

II 遺跡の位置と環境

図 II-1 明治29年の地形図	9
図 II-2 大正6年の地形図	10
図 II-3 昭和32年の地形図	11
図 II-4 岩内町大火状況図	13
図 II-5 鉄道関連施設図	14
図 II-6 共和町周辺の地質	17
図 II-7 地質補図	18
図 II-8 周辺の遺跡分布図	23

III 調査の方法

図 III-1 発掘区設定図	25
図 III-2 基本土層	26
図 III-3 III層上面の地形	29
図 III-4 G1・H1南壁土層断面図	30
図 III-5 C5～E5トレンチ南壁 土層断面図	31
図 III-6 G5トレンチ南壁土層断面図(上) G9トレンチ南壁土層断面図(下)	32
図 III-7 C1～F1トレンチ南壁 土層断面図	33

IV 遺構と遺構出土の遺物

図 IV-1 最終面の地形と遺構位置図	36
図 IV-2 S-1と出土の遺物	37
図 IV-3 S-2・3と出土遺物	38
図 IV-4 S-4と出土遺物	39
図 IV-5 S-5・6と出土遺物	40
図 IV-6 F-1～4	41
図 IV-7 FC-1と出土の遺物	43

図 IV-8 FC-2～4	44
図 IV-9 FC-5・6と出土の遺物	45
図 IV-10 FC-7・8と出土の遺物	46

V 包含層出土の遺物

図 V-1 土器の分布	52
図 V-2 II群 a 類土器(1)と出土状況	53
図 V-3 II群 a 類土器(2)と出土状況	54
図 V-4 II群 a 類土器(3)と出土状況	55
図 V-5 II群 a 類土器(4)と出土状況	56
図 V-6 II群 a 類土器(5)	57
図 V-7 II群 a 類土器(6)と出土状況	58
図 V-8 II群 a 類土器の分布	58
図 V-9 II群 b 類土器	59
図 V-10 III群 a 類・b 類土器と出土状況、土製品	59
図 V-11 包含層出土石器分布図(1)	62
図 V-12 包含層出土石器分布図(2)	63
図 V-13 包含層出土石器分布図(3)	64
図 V-14 包含層出土石器分布図(4)	65
図 V-15 包含層出土石器分布図(5)	66
図 V-16 包含層出土の石器(1)	67
図 V-17 包含層出土の石器(2)	68
図 V-18 包含層出土の石器(3)	69
図 V-19 包含層出土の石器(4)	70
図 V-20 包含層出土の石器(5)	71
図 V-21 包含層出土の石器(6)	72

VI 自然科学的手法による分析

図 VI-1 暦年代校正結果(1)	76
図 VI-2 暦年代校正結果(2)	77
図 VI-3 暦年代校正結果(3)	78
図 VI-4 暦年代校正結果(4)	79

表 目 次

I 調査の概要

表 I-1 遺構一覧	6
表 I-2 出土土器一覧	6
表 I-3 出土石器等一覧	6

II 遺跡の位置と環境

表 II-1 共和町の遺跡一覧	21
表 II-2 岩内町の遺跡一覧	22
表 II-3 泊村の遺跡一覧	22

VI 自然科学的手法による分析

表VI-1	測定試料及び処理	74
表VI-2	放射性炭素年代測定及び暦年 代校正の結果	75
表-1	検出遺構一覧	81
表-2	遺構出土遺物一覧	81

表-3	集石出土石器等一覧	81
表-4	層位別出土石器一覧(包含層)	82
表-5	層位別出土石器等一覧(包含層)	83
表-6	遺構出土掲載石器一覧	84
表-7	包含層出土掲載石器・土製品一覧	85
表-8	包含層出土掲載石器等一覧	88

図 版 目 次

口絵1	遺跡周辺の空中写真(国土地理院発行のものを複製したものである。97年撮影)
口絵2	東西蝦夷山川地理取調図 松浦武四郎著
口絵3	1 調査風景(南から) 2 岩内線西前田駅プラットホーム跡
口絵4	1 S-1出土状況(西から) 2 S-1出土遺物
口絵5	基本土層

図版1	1 岩内線西前田駅プラットホーム跡 2 岩内線踏盤土層断面 3 茅沼炭鉱鉄道踏盤土層断面
図版2	1 Cライン杭跡検出(南から) 2 SP-73~64杭跡完掘(北から) 3 SP-11土層断面(南東から) 4 岩内線側溝R完掘(東から) 5 岩内線側溝L完掘(南西から) 6 茅沼線側溝R土層断面(北東から) 7 茅沼線側溝R完掘(北東から) 8 茅沼線側溝L土層断面(北東から) 9 茅沼線側溝L完掘(北東から)

図版3	1 調査前風景(南から) 2 調査風景(南から)
-----	-----------------------------

図版4	1 調査風景(北から) 2 遺物出土状況(南から)
-----	------------------------------

図版5	1 調査風景(北から) 2 調査区完掘(北東から)
-----	------------------------------

図版6	1 G1・H1南壁土層断面(北東から) 2 A1~E1トレンチ完掘(南東から) 3 E1トレンチ南壁土層断面図(北東から)
-----	---

図版7	1 C1・D1トレンチ南壁土層断面(北東から) 2 B1トレンチ南壁土層断面(北東から) 3 G5トレンチ南壁土層断面(北東から)
図版8	1 G5トレンチ完掘(南東から) 2 G9トレンチ完掘(南東から) 3 G9トレンチ南壁土層断面(北東から) 4 C5・D5トレンチ完掘(南東から) 5 C5・D5トレンチ完掘(東から)
図版9	1 D5トレンチ南壁土層断面(北東から) 2 C5トレンチ南壁土層断面(北東から) 3 C5トレンチ南壁土層断面(北東から)

図版10	1 S-1検出(西から) 2 S-2検出(南西から) 3 S-3検出(東から) 4 S-4検出(東から) 5 S-5検出(北から) 6 S-6検出(東から)
------	---

図版11	1 F-1検出(西から) 2 F-1土層断面(南東から) 3 F-2検出(南西から) 4 F-2土層断面(西から) 5 F-3検出(西から) 6 F-3土層断面(南東から) 7 F-4検出(南から) 8 F-4周辺の遺物(西から)
------	--

図版12	1 FC-1検出(西から) 2 FC-4検出(南から) 3 FC-5完掘(北から) 4 FC-6検出(西から) 5 FC-7検出(西から) 6 FC-8検出(北から)
------	--

- 図版13 1 D21～23遺物出土状況（南西から）
 2 D20遺物出土状況（東から）
 3 D21遺物出土状況（西から）
 4 II群a類土器出土状況（西から）
 5 II群a類土器出土状況（東から）
 6 II群a類土器出土状況（北西から）
 7 クルミ堅果類出土状況（北西から）
 8 II群a類土器出土状況（北東から）
- 図版14 1 II群a類土器出土状況（東から）
 2 II群a類土器出土状況（東から）
 3 II群a類土器出土状況（北から）
 4 II群a類土器出土状況（北から）
 5 II群a類土器出土状況（東から）
 6 II群b類土器出土状況（南から）
 7 III群a類土器出土状況（南から）
 8 III群a類土器出土状況（南東から）
- 図版15 1 S-1出土の石器
 2 S-2出土の石器
 3 S-3出土の石器
 4 S-4出土の石器
- 図版16 1 S-5出土の石器
 2 S-6出土の石器
 3 FC-8出土の石器
 4 FC-1出土の石器
- 5 FC-5出土の石器
 6 FC-7出土の石器
 7 FC-6出土の石器
- 図版17 1 包含層出土の土器（図V-2-1a）
 2 包含層出土の土器（図V-3-9）
 3 包含層出土の土器（図V-4-11）
 4 包含層出土の土器（図V-4-12a・12b）
 5 包含層出土の土器（図V-4-12c）
- 図版18 1 包含層出土の土器（図V-3-10）
 2 包含層出土の土器（図V-10-70）
 3 包含層出土の土器（図V-6-48）
 4 包含層出土の土器（図V-6-49）
 5 包含層出土の土器（図V-10-71）
 6 包含層出土の土器（図V-5-18）
 7 包含層出土の土製品
- 図版19 1 包含層出土II群a類土器(1)
- 図版20 1 包含層出土II群a類土器(2)
- 図版21 1 包含層出土II群b類土器
 2 包含層出土III群a類・b類土器
 3 胎土に混入している撚り紐
 （図V-5-47）
- 図版22 1 包含層出土の石器(1)
- 図版23 1 包含層出土の石器(2)
- 図版24 1 包含層出土の石器(3)

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：一般国道276号岩内共和道路工事
 委託者：国土交通省北海道開発局小樽開発建設部
 受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター
 遺跡名：リヤムナイ3遺跡（道教委登載番号：D-12-29）
 所在地：岩内郡共和町字梨野舞納19-2ほか
 調査面積：3,500㎡
 受託期間：平成16年5月20日～平成17年3月31日
 調査期間：平成16年7月8日～平成16年10月29日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重 橋一	第2調査部長 西田 茂
専務理事 宮崎 勝	第1調査課長 遠藤 香澄（発掘担当者）
常務理事 佐藤 俊和	主任 笠原 興（発掘担当者）

3 調査に至る経緯

平成11年7月に、北海道開発局小樽開発建設部長より、「一般国道276号岩内共和道路」事業に伴い北海道教育委員会教育長あてに埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。この事業は一般国道276号の交通量が増加している現状を踏まえ、共和町梨野舞納（りやむない）から同町国富に至る区間に道路を新設して円滑な交通を確保するとともに、現国道が通過する共和・岩内町内の市街地での安全確保と混雑緩和を実現しようとするものである。

同年8月から北海道教育委員会文化課（以下道教委）によって、埋蔵文化財包蔵地の「所在確認調査」が実施された。この結果に基づいて同年11月に、道教委は小樽開発建設部にあて計画工事用地のうち梨野舞納段丘1遺跡ほか計6地点で試掘による「範囲確認調査」が必要である旨を回答した。

この文書回答に先行して同年10月に梨野舞納段丘1遺跡の一部で「範囲確認調査」が実施された結果、縄文時代前期・中期の遺物が多量に出土し、遺構も濃密に存在することが予察された。

このため、この遺跡を現状で保存するために道教委、共和町教育委員会、小樽開発建設部の間で協議が重ねられ、小樽開発建設部で計画道路の路線変更を検討する運びとなった。

平成12年8月に小樽開発建設部は道路基点付近を変更し梨野舞納段丘1遺跡を含む試掘箇所4地点を回避した新路線の計画を添えて、新たに事前協議書を提出した。同年10月に行なった路線変更部分の「所在調査」を実施した結果、海岸の砂丘部分1地点について試掘が必要と判断されたので、年度内の路線承認を目指す小樽開発建設部の要請を受けて、さらに同年11月に道教委によるこの地点の「試掘調査」が実施された。約2haを対象とする調査により約9,600㎡の範囲で新たな埋蔵文化財包蔵地を確認した道教委は、「リヤムナイ3遺跡」(D-12-29)の名称で周知の手続きをとるとともに、同年12月、小樽開発建設部にあててこの遺跡における工事計画の詳細を沿えて再協議するように求めた回答文書を送付した。



図 I - 1 遺跡の位置

平成15年6月、包蔵地該部分付近の設計を終えた小樽開発建設部から再協議文書が提出された。この時点での事業名称は「一般国道276号共和町岩内・共和道路新設工事」である。道教委は工事計画を検討のうえ、リヤムナイ3遺跡において約7,000㎡の発掘調査が必要である旨を同月中に小樽開発建設部に回答した。なお設計の確定に伴いリヤムナイ3遺跡に隣接する「上リヤムナイ遺跡」でも「試掘調査」が必要となり、同年10月の道教委による試掘の結果、同遺跡でも約1,300㎡の発掘調査を必要とするものと判断され、同月道教委がこの内容を小樽開発建設部に文書回答してこの事業にかかるとの埋蔵文化財保護のための事前協議が終了した。

以上の協議結果を受けて、小樽開発建設部は道教委に対して平成16年度からの発掘調査実施を要望し、15年度末にかけて北海道開発局用地官房を介して調整が重ねられた結果、16年度にリヤムナイ3遺跡のうち3,500㎡の発掘調査を（財）北海道埋蔵文化財センターが受託する運びとなった。なお平成16年9月になって小樽開発建設部から道教委にリヤムナイ3遺跡付近の工事計画の詳細が変更される旨通知があり、発掘調査必要面積を追加して合計約9,600㎡とすることで合意がなされている。

（笠原）

4 調査の概要

リヤムナイ3遺跡は共和町の西端、日本海に面した海岸砂丘地帯の標高約7mに立地している。遺跡のある梨野舞納（りやむない）地区は南側を岩内町、北側は泊村とほぼ隣接している。砂丘は3～4列の堤状で認められ、遺跡はこのうちの最も内陸よりの砂丘上にあり、海岸線からは約1kmの地点である。岩内町の市街地からは国道229号線を泊村方面に車で約4kmのところである。調査区の東方200mには標高約25m前後の海岸段丘がある。この段丘上には「石冠街道」として知られる梨野舞納段丘1遺跡や上リヤムナイ遺跡があり、旧石器時代の遺物、縄文時代前期の円筒土器下層式などの遺物が出土している。また、この段丘の延長線上には北海道指定史跡である岩内町の東山遺跡もある。

今年度の調査区は、並走していた旧国鉄岩内線と旧茅沼炭鉱専用鉄道が分岐する地点にあっていた。したがって調査前の表土除去の段階で、2本の「道床」と「路盤土」を検出した。この他に、鉄道関連の施設と考えられるものには、路線に沿って等間隔で並ぶ多くの杭跡や、側溝跡なども検出されている。鉄道関連施設については第二章-1、位置と環境の項で述べてある。この鉄道関連施設の調査終了後に、当遺跡の調査主体となる縄文時代の包含層の調査を開始した。

最初に一辺が5m四方のグリッドを一つおきに掘り下げて、遺跡全体の遺物や遺構の濃度を調べる25%調査を実施した。その結果、出土する遺物のほとんどが調査区中央より北東側に集中し、南西側では出土しない傾向にあることが確認された。この結果は北海道教育委員会による試掘のデータにほぼ対応するものであった。しかし、本来この周辺は細粒の砂層が累重する砂丘地帯で風成砂層なども発達し地形の変化が激しい所である。このため地形が凸凹で一律ではなく、平行ラミナや斜交ラミナが発達し、砂に覆われた遺構や遺物が同一面から検出されないことが予想された。このため、25%調査で遺構や遺物の出土傾向が低いと推察された南西側から順に、土層確認も兼ねたトレンチによる調査を実施した（図Ⅲ-4～7）。トレンチは南側から東側へ順に5列設け、それぞれ標高5m付近まで掘り下げて遺構や遺物の確認に努めた。この結果、最初に掘削したトレンチの南西隅H1bグリッドのV層上面から集石（S-1）が1基検出された（第四章-1）。この遺構は標高約6mのラミナの発達した砂層中で検出され、石斧が5点、スクレイパーが1点重ねられたような状態で出土した。その周囲には土壌を推定できる掘り込みは検出できなかった。また、周囲からは他に遺構や遺物も認められない。残る4列のトレンチからも遺構や遺物は検出されなかった。トレンチ調査と25%調査で

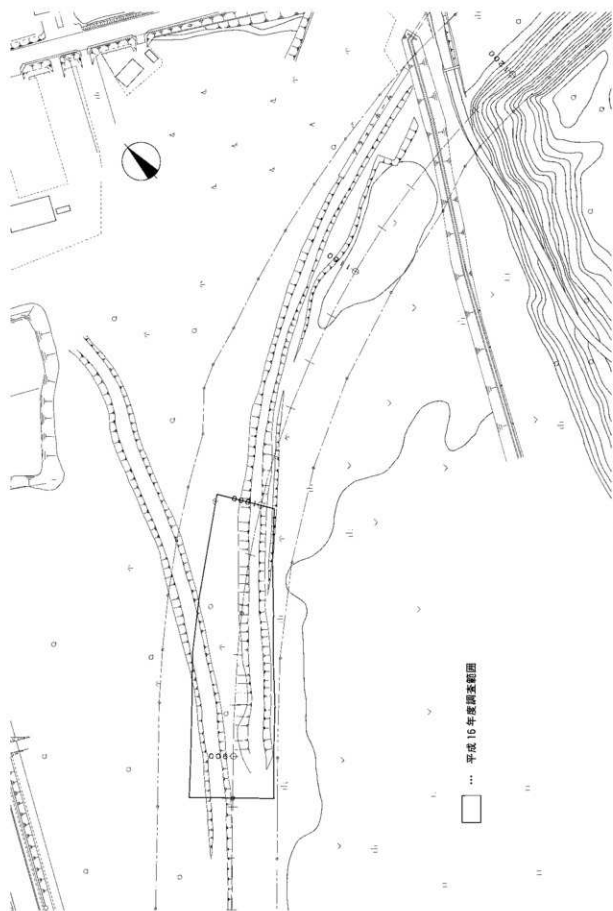


図1-2 遺跡と周辺の地形

... 平成16年度調査範囲

得られた結果を元に、遺物の多い調査区の中央付近から北東側に重点をおき調査することとした。

検出された遺構や遺物の多くがⅢ層からⅣ層にかけて出土している。Ⅲ層は極暗赤褐色の細粒砂層で調査区の東側では特に固く締まる場所がある。これは岩内線の路盤土の直下にあるために鉄道の重みで踏み固められたことと鉄分が沈着したことによる。遺物は縄文時代前期前半期主体の土器群と、この時期に伴う石器群で前期後半のものもある。Ⅳ層も細粒砂層で主体となる出土遺物の時期はⅢ層と同様である。

遺構や遺物については以下の通りである。

遺構は石器制作に関連する剥片（フレイク・チップ）の集中域（FC）が8ヵ所、集石（S）6ヵ所、焼土（F）4ヵ所である。いずれも周辺から出土した土器から判断して縄文時代前期前半のものである。

剥片集中の約8割は頁岩で構成され、残りを黒曜石と玄武岩が占めている。剥片集中の周囲には集石が多く、たたき石や台石等が出土している。剥片の集中域では微細な遺物も採取するために土ごと取り上げを行ないその後水洗選別を行なった。集石はS-5が調査区のほぼ中央付近で検出され、周辺の遺物や検出レベルから判断すると縄文時代中期初頭頃の可能性がある。その他の集石S-2・3・4・6は調査区の北東側で検出されている。これらは縄文時代前期前半の所産と考えられ、主にたたき石や台石で構成され、軽微な敲打痕をもつものが多い。焼土F-1～F-3は調査区中央より西側で検出した。検出された層位などから縄文時代中期頃のものと思われる。調査区東端のⅣ層下位から検出した焼土F-4は、周囲に炭化したクルミ片や微細な獣骨片が検出されている。ここから採取した炭化材については放射性炭素による年代測定を行なった。その結果5,555±30年前という測定値が得られている（第Ⅵ章、試料No.1）。

遺物は土器が2,427点、石器等が30,036点、合計32,457点出土した。土器や石器の多くが調査区中央より北東側から出土している。土器の主体は縄文時代前期前半の道南部に見られる春日町式に相当する土器群で、押し文や刺突文、羽状縄文や縄文の施されるものである。底部は尖底のものと平底のものがある。この他にも縄文時代前期後半の円筒下層式、中期前半期のサイベ沢Ⅶ式の資料も少量出土している。土器はある程度のみをもち出しており出土状況図等の記録をとりながら調査を行なった（第Ⅴ章）。

石器は石器制作の際に伴う剥片（フレイク・チップ）が最も多く、28,484点出土した。

剥片を除いた石器ではたたき石が最も多く、次いでスクレイパー、石核、石鏃、台石の順となっている。たたき石の石材は安山岩で、主に扁平な円礫を素材にし、周縁部に軽微な敲打痕を残すものが多い。スクレイパーは背面からの加工が主体で左側縁部に刃部をもつものが目立つ。また、左側側縁の一部に急角度の刃部をもつ搔器に類似するタイプのものがあり特徴的である。石核は頁岩が主体であるが素材の礫面を残すものは少なく、残核が多い。石鏃は三角形で基部に抉りのあるものが主体で、茎部をもつものは非常に少ない。台石は安山岩を石材にし、比較的小型で使用痕も軽微なものが多い。これらは剥片の集中域から出土しているものが多く、出土状況や形態などから台石に分類したものである。（笠原）

表 I - 1 遺構一覽

種 別	集石 (S)	焼土 (F)	フリイクチップ集中 (FC)	総 計
計	6	4	8	18

表 I - 2 出土土器一覽

分 類	Ⅱ群 a 類	Ⅱ群 b 類	Ⅲ群 a 類・Ⅲ群	Ⅲ群 b 類	不 明	計
遺 構	6					6
包 含 層	2,148	73	91	2	107	2,421
合 計	2,154	73	91	2	107	2,427

表 I - 3 出土土器等一覽

器 種	剥 片 石 器 群												磨 製 石器群	
	石 鏃	つまみ付きナイフ	石槍またはナイフ	スクレイパー	石 錐	両面調整石器	石 核	U フレイク	R フレイク	黒曜石フレイク	頁岩フレイク	玄武岩フレイク	チャートフレイク	石斧・石のみ
遺 構	3	1	3	2	4		5			3,447	10,164	688		6
包 含 層	58	27	9	83	13	6	61	23	5	999	12,802	380	4	6
小 計	61	28	12	85	17	6	66	23	5	4,446	22,966	1,068	4	12

器 種	礫 石 器 群												土製品	その他	合 計
	た た き 石	す り 石	北海道式石冠	石 錘	砥 石	台 石	原 石	軽 石	礫 器	加工痕・刻線のある礫	礫 ・ 片	円盤状土製品・土器片礫	焼成粘土塊		
遺 構	37					3						37		14,400	
包 含 層	199	10	1	12	18	35	9	1	1	2	866	2	4	15,636	
小 計	236	10	1	12	18	38	9	1	1	2	903	2	4	30,036	

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

共和町は後志支庁管内の西北に位置している。東側は倶知安町、北側は仁木町と古平町、南側はニセコ町と蘭越町、西側は泊村と岩内町に隣接し、日本海にも接している。三方を山に囲まれてそのほぼ中央を東から西に堀株川が流れており、その丘陵台地に農耕地が広がっている。

町の面積は304.96km²で、後志では蘭越・島牧・黒松内について4番目の広さをもっている。平成16年現在の人口は7,173人である。平成12年観測の月別平均気温によると2月の平均気温が-4.1℃で最も低く、最も高い8月の平均気温は23.5℃である。年平均気温は8.7℃で、年間降水量は97.2mmであった。昭和30年(1955)に小沢村、前田村、発足村の3村を合併して共和村が誕生し、その後昭和46年(1971)に町制が施行された。肥沃な大地に恵まれている共和町は、古くから米どころとしても知られている。また、岩内平野はスイカやメロン、スイートコーンなどの特産地にもなっており、全国各地に出荷されている。

リヤムナイ3遺跡は岩内町の市街地から北東方向に約4km、現在の海岸線からは直線距離にして1km程内陸にある(図I-1)。海浜地帯には数列の砂堤が発達しており、遺跡はこのうちの最も内陸よりの砂丘上にある。標高は約7mで、東側には標高約25m前後の海岸段丘がある。この段丘上には、昭和31年に北海道大学の犬場利夫らによって調査、報告された「上リヤムナイ遺跡」や「梨野舞納段丘1遺跡」があり、円筒土器下層式のほか旧石器時代の遺物も出土している。遺跡の南東約3kmには北海道指定史跡である岩内町東山遺跡もある。

共和町の成り立ちやアイヌ語による地名の由来などについては『共和町史』と山田秀三『北海道の地名』を参考にして概略を以下に記した。

共和町の開拓の発祥は安政4年(1857)までさかのぼる。この年、箱館奉行は蝦夷地が幕府領になってまもなく前田幌似、発足常見(はったりつねむ)に御手作場(おてさくば)を設けた事から始まる。御手作場とは徳川幕府の出先機関ともいえる箱館奉行が設けた農作物の試作地である。前田幌似の御手作場は、現在の国道276号線の旭橋の岩内よりに地名として残っている。発足御手作場は発足川と十棒川の間の丘陵地または平地あたりを字常見と呼び、この付近であることが知られている。

共和町周辺の地名については以下のとおりである。

地名「幌似(ほろに)」について松浦武四郎は『西蝦夷日誌』の中で幌似をホロイチャンと呼んでいる。「イチャン」は鮭や鱒が産卵のために川底に掘る穴のことで、この場合「大きな鮭や鱒の産卵場」という解釈が妥当であると思われる。「発足」はアイヌ語「ハツタラ」で鮭等が湖に集まる所という意味がある。アイヌ語で「カムイ・ハツタラ」は「神の湖」と直訳され、その意味は「昔、鮭がこの湖に群集し、熊が来てこれを食べたため」ということとなる。また、遺跡のある「リヤムナイ」は「越年する川」の意味で、「堀株川では秋から来春まで年越して鮭を漁ることができたため」という由来がある。川名「堀株(ホリカブ)」は「後戻りする・川」の意味で海から山へ川が行く途中で、方向を変えて海の方へ向かっていることを表し、アイヌの人々の間では、「川は海から発して山へ入り込んでいく生き物である」というように考えられていた。松浦武四郎はこの川の名前を「シリブカ(川幅40間、舟あり)本名シルンカ」と記載している。シリブカは和名で、シルンカはアイヌ語であると考えられる。堀株の旧川尻について松浦武四郎は「越えてホリカブ前に島あり、弁天社あり、橋をかけて風景よろし」とあり、出稼ぎの人々がこの番屋に集まっており、舟も川尻深く入って良港であったところから、尻深の名が出たものと思われる。その後になって河口の地名を

とって堀株川となったと考えられる。

「前田村」は明治17年に金沢藩が起業社を起こして士族授産のために79戸を移住開墾させたのが、村の始まりと見てよい。そこで旧藩主前田侯の名前をとって村名とした。

「小沢村」は本来、アイヌ語で「サックルベシベ」と呼ばれていた所で、「夏越える道」という意味があった。しかし安政3年に村垣淡路守が「小沢」と名付けたものである。

「老古美（おいこみ）は以前、「追込」とかかかれていた。岩内の馬主が馬を追い込んで放牧したことに由来し、これに老古美の字をあてたものである。

「ソコナイ」は『西蝦夷日誌』にソッコナイ（小川）と記載されている。

「谷地」は『西蝦夷日誌』に「ホントマムナイまたはホロトマムナイ（谷地）」とある。ポンは小、ホロは大、トは沼をあらわす。小谷地、大谷地はその当時アイヌ語で語られ、これから名付けられた。

「岩崎」は、秋田県の岩崎から移住した村の有力者によってこの名が付けられた。

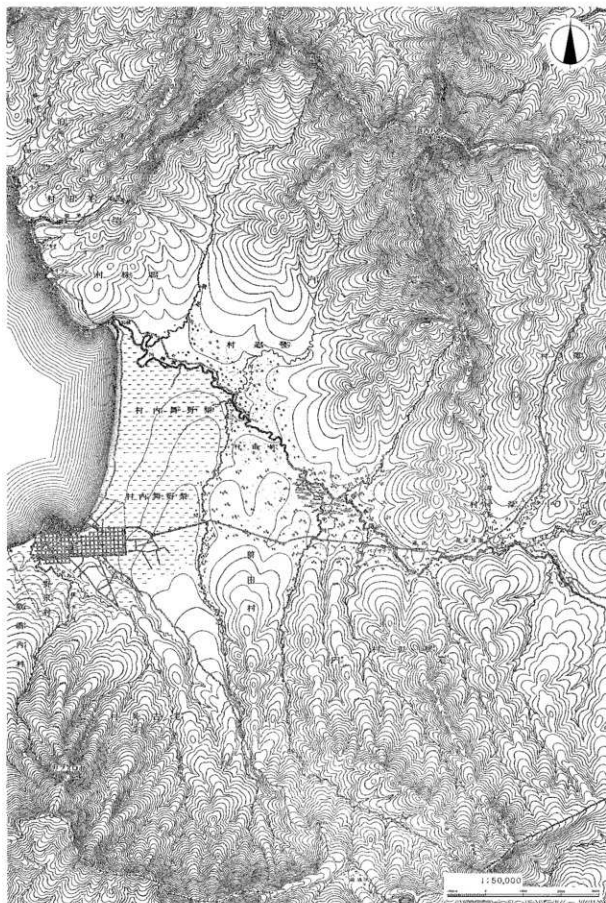
「学田」は学校建設等に伴い土地を町や村に払い下げたもので、これが地名となっている。

「稲穂峠」はこのあたりでも難所といわれた所で、アイヌの人々はイナウ（御幣または木幣）をもって山の神に祈りながら峠を通った事からこの字をあてたものと言われている。

「岩内」は隣接する現在の岩内町である。アイヌ語のイワウナイからきていると思われ、硫黄川という意味が考えられる。この他にイヤウナイ（熊肉を乾かす沢）やイエオナイ（軽石多き川）等がある。『岩内町史』によれば、「イワウ」（硫黄）の語源については、和語、蝦夷語同一語である可能性を指摘し、定説を見いだせないとしたうえで次のような解釈がされている。「岩内平野を流れる川はいずれも岩内の東方にそびえているイワオヌプリを水源とするように見え、また、岩内平野を迂回曲折して流れているために、時季によっては著しく混濁して、あたかも硫黄が混入したかのように見えのかもしれない」としている。

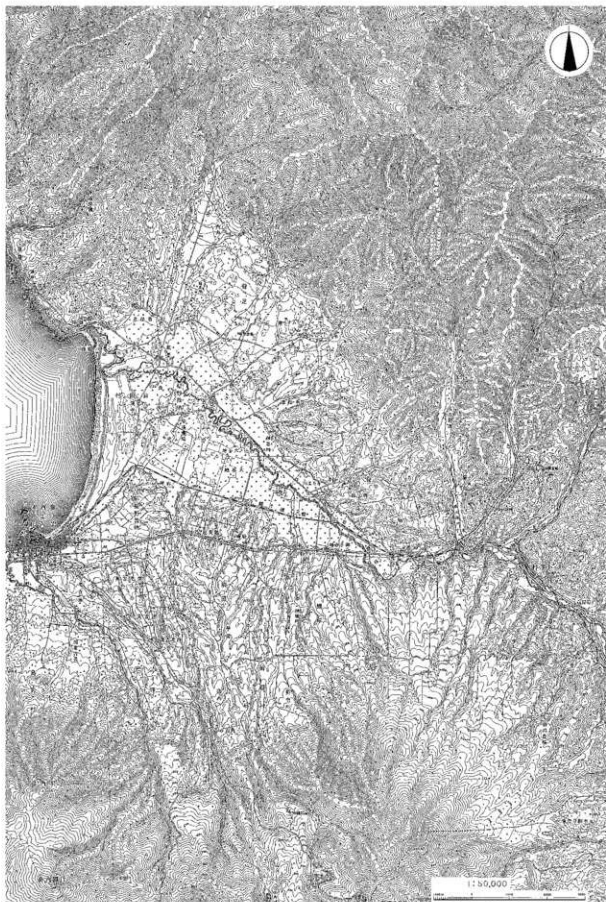
以下、岩内町の事柄について『岩内町史』をもとに概略を記した。

岩内町は共和町の西側に隣接し、後志地方のほぼ中央に位置している。西は日本海に面して海岸線がはしり、断崖絶壁が続く雷電海岸はニセコ積丹小樽海岸国定公園に指定されている。岩内町はかつてニシンの千石場所として栄えた港町である。現在でも漁業の盛んな地域としてクラヤイカ、ホッケ等の水産加工品が盛んである。面積は70.64km²で、平成14年現在の人口は17,075人である。一年の平均気温は10℃前後で、北海道の中では比較的温暖な地域であり、冬期の降雪量もさほど多くはない。岩内町の和人往来の歴史は古く、宝暦元年（1751）頃とされている。その後は天保6～8年（1835～1837）に内地でおきた天保の大飢饉がきっかけで和人の移住が進んだ。内地が凶作でこのために移住者が激増し、ニシン漁の盛んな岩内に避難民の流入が始まった。安政3年（1856）の調べによると「永住者三百四十戸、男女千八百六人。西蝦夷地一等の繁栄地となった」との記載がある。飢饉前はわずか二十数戸しかなかった村が二十数年の間に都市型の形態をとるに至ったのは、生活に困った漁民を中心とした人々がニシンを追って北上してきたことに起因する。その後、明治30年頃にニシン漁の全盛期を迎え岩内の町は栄え、数々の悲惨な大火も経験し今日に至っている。（笠原）



図II-1 明治29年の地形図

(この図は陸地測量部発行の「八内岳」「岩内」を複写したものである。)



図II-2 大正6年の地形図

(この図は大日本帝国陸地測量部発行の「茅沼」「岩内」を複写したものである。)



図II-3 昭和32年の地形図

(この図は国土地理院発行の「茅渚」「岩内」を複写したものである。)

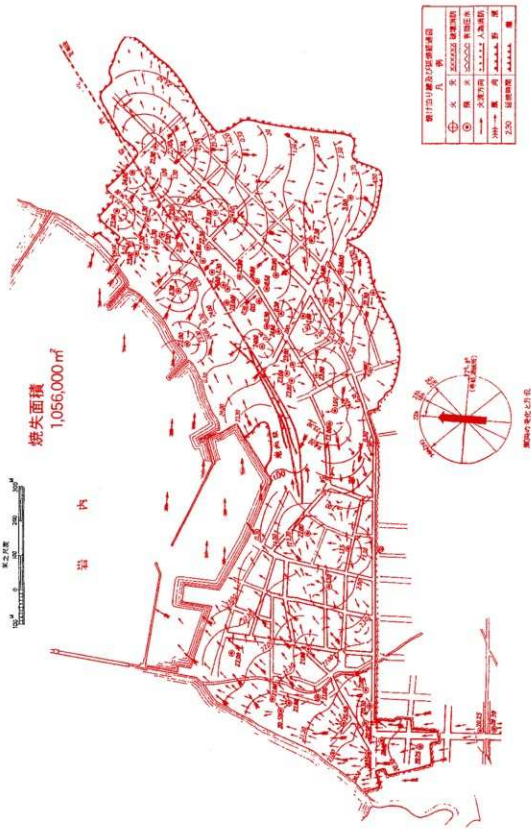
岩内町の大火

岩内町は火災の多い所である。『岩内町史』と『岩内大火の記録』によれば最初の大火は安政6年(1859)に起きている。この年の5月に南東の強い風に煽られて、当時230戸あったうちの80戸余が焼失している。明治3年6月には380戸のうち58戸を焼失し、明治22年の5月には20戸を焼き、8月にも50戸を焼失している。更に翌年の9月には、当時の戸数1400戸のうち半数近い600戸余りを焼失するという大火を経験している。その後、明治42年10月には360戸余を焼失する大火を出し、大正3年2月にも49戸を焼失している。それから40年余りたった昭和29年の9月26日に発生した大火は、岩内町の歴史の中で、最大の惨事となった。この災害の要因となった台風15号の来襲は全道各地に甚大な被害を残し、特に1,500余名の人命を奪った青函連絡船洞爺丸の沈没事故は余りにも痛ましい悲劇であった。大火の概要は次のようである。9月28日付の北海道新聞によれば、26日の午後8時15分頃、市街の南西に位置する字相生の木造アパートから出火した。出火直前にこのアパートの屋根が強風に煽られて吹き飛ばされ、住人全員が避難した時、2階に住んでいた一人が火鉢の残り火をそのままにして退避したのが大火に至ったものと報道されている。当時37.6mの南からの強風に煽られて、約70m離れた住宅に飛び火し消火に努めたが、烈風が益々猛威を振るい、更に100m程風下の住宅にも飛び火した。火の勢いは付近一帯に広がり大混乱を呈し、手の施しようのない事態に陥った。その後風向が南西に変わったため、東に延焼する要因となった。防火線を張ったものの風は間もなく南西から真西に変わり風は勢いを増して東方への延焼効果を更にする事となった。海岸通りでは立ち並ぶ漁業関係の建物をもなめ尽くした火は、漁船用の重油にも着火して爆発し、火焰に煽られて四方に飛び火し、港内に繋留されていた漁船にも引火した。折から真西の烈風を受けて火の付いたままの漁船は大浜の砂浜に打ち上げられ、これが大浜方面への飛び火になった。風速は53mを記録し、火勢は猛り狂い一面火の海と化し、全町の約8割を灰燼に帰し、翌27日の午前6時頃自然鎮火した。焼失区域は32万坪に及び、焼失家屋3,298戸、死者35名、行方不明者2名、負傷者は250名であった。尚、「岩字郷土史研究会」が大火50年の節目として発行した『水が燃えた』から火災当時の風向きの変化を示したものを「図Ⅱ-4 岩内町大火状況図」として引用したので参照されたい。

岩内線と茅沼炭鉱専用鉄道

今年度の調査区には2つの鉄道跡が残されていた。一つは国鉄岩内線、もう一つは茅沼炭鉱専用鉄道の跡である。2つの路線は岩内から北東方向に向かって並行して走り、共和町山崎付近(本道跡所在地)が分岐する地点になっていた。明治37年(1904)に函館本線が開通すると、翌年には岩内と小沢を結ぶ岩内馬車鉄道が開通した。明治時代の岩内はニシン漁で繁栄を極め、海岸部と内陸を結ぶ路線として開業当時の乗客は200人を数え、臨時便を出すほどの盛況ぶりであったという。その後、明治43年には軽便鉄道法が公布され、このため大正元年(1912)に国鉄が買収し、函館本線に接続する岩内軽便鉄道を敷いたのが岩内線の始まりである。大正11年(1922)には「軽便」の文字をとり、黒松内までの海岸連絡線の建設も目指した。しかし果たせないうちに昭和60年(1985)6月に岩内線は廃止された。岩内線は小沢から国富、幌似、前田、西前田を経て、岩内までの14.9kmを結び、函館本線との連絡線として農水産物の輸送と国富銅山の銅鉱石等の輸送に貢献してきた。大正元年の開業当時、岩内-小沢間は1日4往復で、所用時間は約30分であった。昭和に入り順調に営業を続け、一時は準急列車が走ることもあった。しかし、水産業の衰退や銅山の閉山などによって人口が流出し、旅客や貨物の取扱量の減退が進み廃止に至った経緯がある。現在、共和町内には国富駅、前田駅、西前田駅等の跡が残っており、中でも「幌似鉄道記念公園」は木造の駅舎やホームが保存され、駅舎内には料金表や時刻表が当時の姿を残している。

北海道岩内町大火状況図



(この図は岩手郷土史研究会が平成16年9月に発行した『水が燃えた日・26焦土そして復興』に掲載された図に加筆、複製したものである)



図II-4 若内町大火状況図

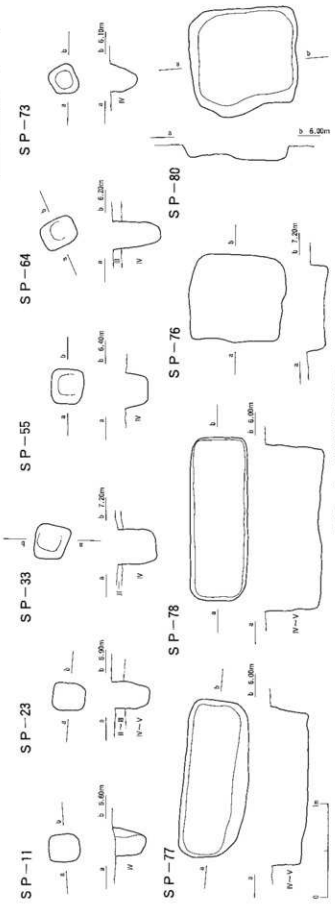
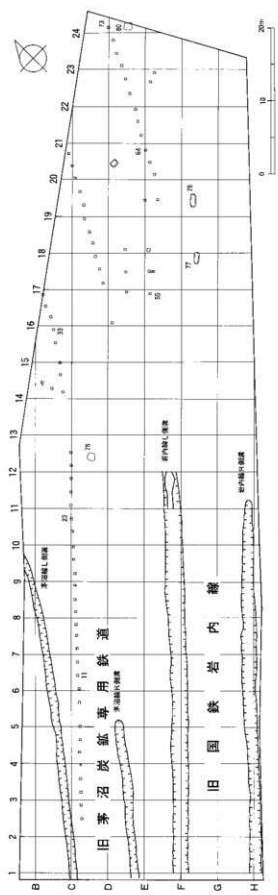


図 II-5 鉄道関連施設図

調査区横の道路建設用地内には、昭和38年に無人駅として開業した西前田駅のプラットホームが残されており、雑草に埋もれそうになりながらも当時の面影を残している（図版1-1）。

茅沼炭鉱と茅沼炭鉱専用鉄道の歴史については『開礦百年史』茅沼炭化礦業株式会社編と『北海道開拓記念館研究報告第4号』、『泊村ふるさと再発見事業中間報告書・茅沼炭鉱について』から主に引用した。

茅沼炭鉱は現在の泊村の海岸線から4km程内陸に入った所にある石炭山である。この炭鉱は安政3年（1856）に茅沼村の武井忠兵衛の雇い人であった鯉釣船頭の忠蔵という人物が、漁具伐採のために山にはいり、帰路炭の塊を拾ったことに始まる。村に持ち帰った忠蔵が雇われ漁夫等とともに評議したところ、「これが噂に聞く唐船で焚く石炭というものであろう」と言うことになって、火の中に投じたところこれが勢いよく燃えたという。そこで、これをもって臼別村の番屋にこの事を報告し、やがて函館奉行に上申されたのであった。この当時、先達諸外国は商業の市場として東洋に食指をのばしており、安政元年（1854）の3月には日米和親条約が結ばれ、アメリカ、イギリス、ロシア等に物資を供給するために下田と箱館の2港が開港されている。更に4月には米国の軍艦が箱館に來航し、港内の測量等を行なっている。

入港する汽船への燃料供給が義務づけられ、新しい市場の拡大に対応して、各地の石炭山開発の必要性が急速に高まってきた。このような時代背景から解るように、茅沼炭山の発見は当時としては相当に重要な役目を持っていた。北海道内における石炭の存在は各地に残されているが、特に沿岸部の漁場開発が進んでいた江戸時代の釧路地方において知られていた。18世紀の後半、白糠、釧路、厚岸場所の近くで、「タキイシ」の存在があった。北海道における石炭山の開発は箱館開港直後に箱館奉行の手で進められていた。安政元年（1854）に設置された箱館奉行は南部、仙台、秋田、津軽藩に命じて蝦夷地の警備に当たらせるとともに、石炭山の調査にも着手した。調査は沿岸部に限られたが、東蝦夷地では釧路、白糠、西蝦夷地では久遠、島牧、留萌地方で行なわれた。この調査によって注目されたのは白糠シリエト（石炭岬）の石炭であった。安政4年（1857）に石炭山の調査を命じられた奉行所手付栗原善八は、江戸からつれてきた採炭夫と人夫に採掘をさせた。工法は二坑を設け、天井の崩壊を防ぐ為に留木を用いた狸掘りであった。採掘された石炭は箱館に送られ、外国船の燃料に使用された。採掘高は安政4年6月から翌年の4月までの間に5,998石8斗（865.6トン）であった。その後数年を経た文久元年（1861）には、窃盗罪などで捕らえられた罪人が採掘人夫として送り込まれている。

こうして採掘された白糠の石炭であったが、この石炭は品質が劣る上、箱館までの海上輸送中に粉炭ができて、これを選別するのに時間もかかって損失をきたすことから決して条件の良いものでは無かった。

そこで注目されたのが白糠より少し遅れて見つかった西蝦夷地の茅沼炭山であった。安政3年（1856）に見つかった石炭山であったが、翌年には当時の箱館奉行村垣淡路守がこの茅沼炭山を検分に訪れ、早速その開発に着手している。鯉釣船頭忠蔵によって発見された茅沼石炭山は炭質も良好で、箱館までの輸送距離が近いなど、当初より有望視されていた。万延元年（1860）には白糠炭山の開発にあたった栗原善八が再び命じられ、調査が行なわれている。しかしこのとき石炭を試掘したが坑道为天弩が崩壊し採掘は困難であることからまもなく中止されている。

その後の採掘再開の見通しは、箱館奉行に招かれた二人のアメリカ人鉱山技師によって得られた。この2名は文久2年（1862）に來道し、主に渡島半島の地質や金銅山、砂鉄などを調査した。この時茅沼も訪れて調査しており、炭質良好で開発の将来性があることを報告している。元治元年（1864）の2月には茅沼炭山の採掘の見通しが得られたことから、茅沼炭鉱の再開発に伴い、白糠での採炭を中止して再開発が始まった。この時白糠で採掘にあっていた採炭人夫や囚人はすべて茅沼に移さ

れた。しかし、採掘費用の問題が発生し、長崎と比較して約5割も高価であったため、1年数ヶ月で再び中止された。

慶応2年(1866)には幕府が招いたイギリスの鉱山技師によって翌年の6月にまた採掘が開始される。

この時「洋式採炭法」が導入され、炭鉱から海岸までの約4kmに輪車路を設け、馬力によって石炭車を引かせるなど、当時としては注目される計画をたてている。幕府はこのように再三にわたって茅沼炭山の検分や試掘を繰り返して行ってきた。1868年の明治維新後は、明治政府直下の箱館裁判所生産係に属す事になった。明治2年の8月には、アメリカ・イギリス両国の技師らによって以前までの事業が継続され、海岸まで輪車道が敷設された。これら輪車道の機材はアメリカ・イギリスの両国から購入されたものであった。これは鉄道とまでは呼ばれないものの、我が国において最初の鉄軌道と言うべきものであった。これは石炭車が下り勾配を利用して乗り下げ、登りの空車は牛で牽いたものであった。

幕末から明治初期にかけての茅沼炭鉱は日本で最初の鉄軌道が敷設され、また、火薬による岩石破砕法(発破採炭)等の洋式技術の導入が図られるなど、茅沼炭鉱が最初であった。しかし明治12年と14年に相次いで火薬庫爆発等の事故が発生し、明治15年には小樽と手宮幌内間に鉄道が開通、幌内炭山が輸送の面でも優位に立ったため、明治16年に茅沼炭鉱の廃止命令が出された。幕藩体制より続いた官営事業に終止符がうたれる事になった。当時のこの地方はニシン漁が盛んな時で、特に漁業主たちにとって石炭は必要なものであり、炭鉱の廃止は痛手であった。そこで漁業主等が立ち上がり「茅沼炭山採炭組合」を組織し、明治17年にこれが認可され民間の手によって再開されることになった。

大正時代に入るとニシン漁が不漁になり、茅沼炭鉱への依存が再び高まった。昭和2年(1927)には小型蒸気機関車が購入され、輸送能力が強化されてこれまでの軌道を利用した炭車による輸送法は終わった。昭和6年(1931)には茅沼～岩内間に架空索道が完成し、岩内港への輸送が可能になった。この索道は茅沼炭鉱専用鉄道の前身と呼ばれるもので、昭和21年(1946)年に共和町発足から岩内に至る鉄道が敷設されるまでの16年間使用された。しかし経営難であった事から昭和39年4月に茅沼炭鉱の長い歴史は幕を閉じ専用鉄道も廃線となった。

本遺跡の調査区内で見つかった鉄道関連施設と考えられる近代の遺構については図Ⅱ-5に示し、以下に詳細を記す。遺構は側溝跡が4本(岩内線R・L側溝)(茅沼線R・L側溝)、杭跡が76基、方形を呈する土坑が5基である。今年度の調査区は南西から北東方向に細長く面積は3,500㎡ある。岩内線の跡(路盤土)は調査区とほぼ並行にGラインに沿って南西(岩内)から北東(小沢)方向に延びている。路盤土は道床の下にあって施行基面となるものである。(Ⅲ章-3参照)。Gラインの両側には幅約1m、深さ約40cmのU字状を呈する側溝が2本、12ライン付近まで延びている。この側溝は路盤土が水を含んだ場合に排水が必要であり、この排水が不良であると列車荷重によって「噴泥」(ふんでい)という現象を起こす等、路盤の機能保持(排水)のために掘られたものと考えられる。この側溝は茅沼炭鉱専用鉄道跡の両側でも確認され、規模等はほぼ同様である。岩内線と並走していた茅沼線は調査区付近でDラインを中心に通過し、10～14ラインに向かって緩やかにカーブして北方向(発足方面)に延びている。調査区と国道226号線の間には今も路盤土が続いている。岩内線・茅沼線共に側溝が途中で切れるが、その理由については不明である。杭跡はFラインより北側と調査区西側のCライン沿いで集中して見つかった。76基検出し、いずれも形状は方形で口径は30～40cm、深さは40～50cmを計り直立する。杭跡はおおむね直線上に配置され、柱間距離はほぼ2mである。これらの杭跡は、大雨や地震等で路盤土が軟弱になった場合、この盛土を強化するために使用済みの枕木を打ち込み、内側に厚手の板材を渡して土留めした際のものであると思われる。ただし、岩内線・茅

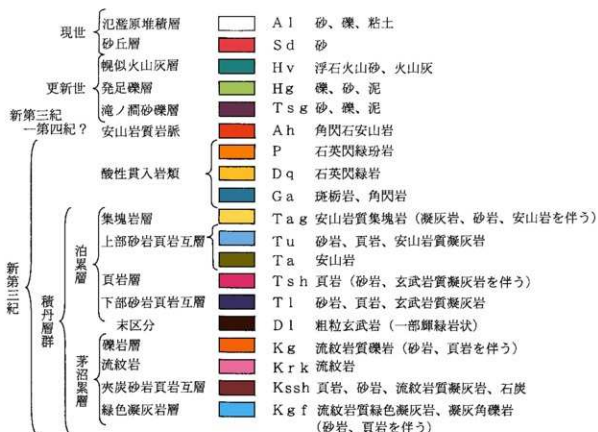


図 II-7 地質補図

沼線共に残っている路盤とこの杭列が並行関係にはないことから、今後再検証する必要がある。S P-55を取り巻く柱穴は6本柱の構造が考えられ、保線の為の小屋等が想定される。この他に方形を呈する土坑が5基検出された。S P-77・78は長方形で深さはS P-77が約40cm、S P-78は約60cmである。いずれも覆土中に枕木状の板材と錆びた金属片が投棄してあった。岩内線の路盤土直下から検出されていることから、岩内線着工間際に廃棄されたものである。S P-76・80・81はいずれも一辺が約1mのほぼ正方形である。実際の深さは40~50cmあったと考えられる。使用目的は不明であるが茅沼線に関連する施設のものと考えられる。(笠原)

周辺の地質

リヤムナイ3遺跡周辺の地質について工業技術院研究所発行の20万分の1地質図「岩内」[茅沼]をもとに作成し、図II-6・7に示し概要を以下に記した。なお()内の記号は図II-7を参照された。

遺跡の所在する岩内平野は南側に雷電山をはじめニセコ火山群が控え、北側には積丹火山群、西側は日本海に接している。日本海に突き出た積丹半島周辺の海岸線は新第三紀のハイアロクロスタイト(水中破砕流溶岩)や第四紀の中段段丘面堆積物から形成され、急峻な断崖斜面となっており風化や波触による岩礁、奇岩の多い地形が続いている。そこから南側に広がる岩内平野の中央部には、西にむかう主流堀株川が流れており、その成立過程は主にこの川によるところが大きい。

遺跡は堀株川の左岸に発達している海岸砂丘列上にあつて、砂丘(S d)は現在の海岸線より約1km~1.5km内陸に入っている。この砂丘は黄褐色を呈する細粒砂層でラミナが発達している事などから風成砂

と考えられる。その周囲を囲むように砂、礫、粘土で構成される氾濫原堆積層（A1）が梨野舞納（りやむない）をへて前田地区付近までの段丘面と、北部の堀株から発足に至る丘陵地まで広がっている。

発足から宮丘までの丘陵地一体は更新世の発足礫層（Hg）が北部山岳地帯まで広がり、ここから沖積平野に流れるヤチナイ川の流域には扇状地が発達している。堀株から茶津、更に北部の海岸域には新第三紀積丹層群の泊累層群と呼ばれる安山岩質集塊岩（Tag）が広がっている。この集塊岩の下には上部と下部に分けられる砂岩と頁岩の互層からなる層（Tu・Ti・Tsh）があり、泊村周辺一帯に分布している。泊累層群の下部には茅沼累層がある。茅沼累層は泊村と茶津の間を流れる玉川周辺で特に発達し、護岸整備が行なわれる以前には海岸線から内陸部に進むに従って路頭も見られた。茅沼累層は主に頁岩と砂岩の互層（Kss）や緑色凝灰岩層（グリーンタフ：Kgf）などから形成され、石炭（茅沼炭）も含まれている。今回の調査で見つかった石器の主体は頁岩で他に黒曜石と玄武岩、安山岩がある。（笠原）

2 周辺の遺跡

リヤムナイ3遺跡周辺の遺跡分布図を図II-6に埋蔵文化財蔵地一覧表を（表II-1～3）に示してある。共和町の遺跡は、北海道教育委員会による埋蔵文化財分布調査によると、現在29ヶ所登録されている。隣接する岩内町では12ヶ所、泊村には33ヶ所の遺跡が登録されている。

泊村から共和町、そして岩内町にかけての日本海に面した沿岸部には、古くから多くの遺跡の存在が知られている。またこの付近の海岸砂丘地帯やその後背に迫る海岸段丘上にも多くの遺跡が発見されている。これらの遺跡の各時期や特色等、内容が比較的明らかなものについて共和町・岩内町・泊村の順で記載する。なお、（ ）内の数字は遺跡登録番号の個別番号である（表II-1～3）。

共和町の遺跡（表II-1）

リヤムナイ3遺跡のある梨野舞納地区は古くから研究者の注目を引いていた所である。遺跡の背後に控える段丘上の畑地では、開墾が進むに従って土中からおびただしい数の土器や石器が出土し、耕作の邪魔になるほどで、出土した遺物を馬車で畑から運び出し、雪解けて傷んだ道路の補修のために敷き詰めたとする。これは上リヤムナイ遺跡（2）から梨野舞納段丘1遺跡（4）付近にかけての当時の状況を伝えたものである。現在でもこのあたりには、“石冠街道”と呼ばれる道が残っており、傍らには石器等が無数に散在している。

上リヤムナイ遺跡（2）は梨野舞納段丘北端の標高約25mに位置している。縄文時代前期の円筒下層式土器のほか、縄文時代後期にかけての遺物や、最下層中からは旧石器時代の遺物も出土している。梨野舞納段丘1遺跡（4）は上リヤムナイ遺跡から南に約1kmの地点にあり、縄文時代前期から中期が主体である。

下リヤムナイ遺跡（3）は標高約10mの堀株川の左岸の海成砂丘列上にある。昭和33年に大場利夫、桐井力蔵らによって調査が行なわれている。縄文時代中期から晩期、続縄文時代、擦文時代にわたる遺構と遺物が見つかる。擦文時代の罌穴1基が調査され、口頸部に刻線文のある擦文式土器や漆器、石斧や石包丁形石器、さらに装身具（ガラス玉）などの貴重な資料が見つかる。

小沢遺跡（5）はJR小沢駅の北西約2km、標高約45mのセトセ川左岸段丘上にある。旧石器時代の遺物出土している。発足岩陰遺跡（6）は共和町宮丘の海岸後背地の海蝕崖に立地し、縄文時代晩期・続縄文時代・擦文時代の土器や石器、骨角器等が出土している。宮丘1遺跡（7）は旧堀株川の右岸の標高約3～5mに立地している。泊原子力発電所建設に伴う発掘調査によって明らかにされた遺跡である。調査面積は837㎡と狭い範囲ながらも豊富な資料が得られている。縄文時代前期から擦文時代に至る各時

期のものが出土しており、中でも縄文時代中期の円筒土器上層式の他、この時期に属した魚骨回転文の施された土器等貴重な資料が見つかった。戸隠神社遺跡(8)は標高約20mの発足川右岸段丘に立地し、縄文時代中期から後期の遺物が出土している。また、堅穴状の凹みが4ヵ所ある。宮丘2遺跡(11)は宮丘1遺跡と同様、泊原発関連工事に伴う所在確認調査によって見つかった遺跡である。旧堀株川右岸の標高約15~20mの段丘上にあり、宮丘1遺跡にはほぼ隣接する。縄文時代中期の土器片や石器等が採取されている。宮丘3遺跡(12)、宮丘4遺跡(13)、宮丘5遺跡(14)はいずれも発足川右岸段丘の標高約20m付近にある。一般分布調査によって見つかった遺跡であるが、詳細は不明である。発足川2遺跡(15)、発足川3遺跡(16)は標高約20mの発足川左岸段丘上に立地している。縄文時代の遺物が採取されているか時期等の詳細は不明である。発足神社遺跡(18)は発足地区を流れるヤチナイ川の右岸標高約35mの段丘上に位置する。「ヤチ」は谷地あるいは湿地を指すと思われる。「ナイ」は川であることから「湿潤な地を流れる川」の意味がある(山田1972)。縄文時代の遺物が見つかった時期等の詳細は不明である。リヤムナイ左岸1遺跡(19)リヤムナイ左岸2遺跡(20)は、リヤムナイ川の左岸段丘の標高約15mに立地している。詳細は不明ながら、いずれも旧石器時代の遺跡である可能性がある。梨野舞納砂丘遺跡(21)はリヤムナイ3遺跡と同様、標高約10mの海成砂丘列上に位置している。一般分布調査によって確認された遺跡で、縄文時代中期の遺物が出土している。

梨野舞納段丘2遺跡(22)梨野舞納段丘3遺跡(23)は梨野舞納段丘1遺跡に隣接している。梨野舞納段丘3遺跡からは縄文時代の遺物の他、縄文時代の資料も見ついている。リヤムナイ1遺跡(27)、リヤムナイ2遺跡(28)はともに海岸砂丘地帯に立地し、平成11年のリヤムナイ2遺跡の調査では、剥片の集中域が1ヵ所見つかった。

岩内町の遺跡(表Ⅱ-2)

岩内町には12の遺跡が登録されている。内訳は集落跡が1ヵ所(東山1遺跡)と遺物包蔵地が11ヵ所である。岩内町の遺跡は市街地周辺の海岸段丘面や河岸段丘部に多く、砂丘地帯には少ない。

東山1遺跡(1)は岩内町の東端に位置し、共和町梨野舞納と隣接した標高約30mの海岸段丘上にある。この地方を代表する縄文時代前期から中期にかけての円筒式土器文化期を代表する大遺跡で、昭和43年に北海道指定史跡に指定されている。昭和28年の予備調査にはじまり、昭和31年9月からは岩内町教育委員会のもとで本格的な調査が開始されている。昭和58年に一般分布調査が、平成7年には範囲確認調査が行われた。その後、平成13年から3ヵ年にわたって町道改良工事のための発掘調査が行われた。その結果、堅穴住居跡24軒、土坑102基、焼土24ヵ所や10万点を越える遺物が出土している。

栄1遺跡(6)は東山1遺跡から南側に約600mの距離にあり、標高30m程の丘陵地にある。昭和32年に岩内町教育委員会のもとで調査が行われ、縄文時代中期の円筒土器上層式を主体とする遺物が出土している。

泊村の遺跡(表Ⅱ-3)

泊村は積丹半島の西側の根元に位置し、現在33ヵ所の遺跡が登録されている。積丹半島には23ヵ所に上る洞窟・岩陰遺跡が存在し、泊村には15の洞窟・岩陰遺跡が含まれている。これらの遺跡は縄文時代後期末から晩期、縄文時代から縄文初期頭頃に主体をもつものである。

茶津1号洞窟遺跡(1)、茶津2号洞窟遺跡(2)は標高5mの海蝕崖に立地している。茶津2号洞窟からは成人人骨二体、幼児人骨一体が出土した他、骨角器を含む約2,000点の遺物が出土している。

茶津4号洞窟遺跡(4)は標高11mの海蝕崖に位置し、縄文時代の遺物が出土している。昭和42年の小樽市博物館の調査では成人人骨二体が出土している。

照岸洞窟遺跡(7)は標高4mの海蝕崖に立地し、縄文後期から擦文期にかけての各時期の遺物や人骨二体も見つかっている。堀株1遺跡(8)は標高5~10mの旧堀株川右岸に位置している。昭和57・58年に行われた調査では、堅穴住居跡5軒、ビット116基、焼土291ヶ所、土壌4基などの他、縄文時代中期から晩期、続縄文期、擦文期に渡る多くの遺物が出土している。平成13年度の調査では、狭い範囲ながらも37基の土壌が検出され、縄文時代晩期から中・近世にかけての貴重な資料が見つかっている。

ヘロカルス遺跡(13)は日本海を臨む標高40~85mの海岸段丘上に立地している。「ヘロカルス」とはアイヌ語で「ニシンを捕る・いつもする処」の意味がある(山田1972)。昭和56年の泊原発建設に伴う所在確認調査によって明らかになった遺跡である。その後も度々調査が行なわれ、堅穴住居跡や土壌の他、縄文時代中期から晩期、擦文期に至る多くの遺物が出土している。

この他にも、平成10年に調査された汐見橋遺跡(22)では縄文時代早期の東剣路Ⅲ式や、主体となる縄文前期の円筒土器下層式が出土している。泊村の遺跡は縄文時代中期までは海岸段丘上に立地し、それ以降、縄文後期から中・近世に至るまでが海岸部に集中する傾向が見られる。(笠原)

表Ⅱ-1 共和町の遺跡一覧

記載番号	遺跡名	種別	所在地	立地(標高)	時期	備考
D-12-1	発見柏木	遺物包含地	宮丘129-1~3ほか	堀株川右岸高位段丘上(20~40m)	前期・中期(円筒式)	泊村D-14-16と同じ
D-12-2	上リヤムナイ	遺物包含地	梨野舞納70-1ほか	梨野舞納段丘の北端(35m)	先土器、前期~後期	
D-12-3	下リヤムナイ	貝塚	梨野舞納68-1ほか	堀株川左岸海成砂丘列上(10m)	中期~晩期、続縄文(恵山式)、擦文	
D-12-4	梨野舞納段丘1	集落跡	梨野舞納103-1~5ほか	梨野舞納段丘(30m)	前期・中期	
D-12-5	小沢	遺物包含地	国富305-2	セトセ川左岸段丘の最高地(45m)	先土器	図なし
D-12-6	発見岩陰	岩陰	宮丘63-7・8	海蝕崖(基盤5m)	晩期、続縄文(恵山・後北・北大式)、擦文	
D-12-7	宮丘1	遺物包含地	宮丘20-6・7, 51-2	旧堀株川右岸高位段丘(?) (5m)	中期末~後期初、続縄文	
D-12-8	戸隠神社	集落跡	宮丘168-1ほか	発見川右岸段丘(20m)	中期・後期	
D-12-9	十権川1	遺物包含地	宮丘26-1~4ほか	十権川右岸段丘(15m)	縄文	
D-12-10	発見川1	遺物包含地	宮丘5-7・27	発見川左岸段丘(10~15m)	縄文(繊維土器)	
D-12-11	宮丘2	遺物包含地	宮丘42-1~6ほか	旧堀株川右岸段丘上(15~20m)	中期	
D-12-12	宮丘3	遺物包含地	宮丘34-1・4	発見川右岸段丘(25~30m)	縄文	
D-12-13	宮丘4	遺物包含地	宮丘45-13~15ほか	発見川右岸段丘(20~25m)	縄文	
D-12-14	宮丘5	遺物包含地	宮丘329	発見川右岸段丘(17m)	縄文	
D-12-15	発見川2	遺物包含地	宮丘5-5・6	発見川左岸段丘(20m)	縄文	
D-12-16	発見川3	遺物包含地	宮丘5-11ほか	発見川左岸段丘(20m)	縄文	
D-12-17	十権川2	遺物包含地	宮丘425-1・4・6・7	十権川右岸段丘(20m)	縄文	
D-12-18	発見神社	遺物包含地	発見3-4ほか	リヤムナイ川右岸段丘(35m)	縄文	
D-12-19	リヤムナイ川左岸1	遺物包含地	発見393-1	リヤムナイ川左岸段丘(15m)	先土器?	
D-12-20	リヤムナイ川左岸2	遺物包含地	発見252-1~6, 393-5	リヤムナイ川左岸段丘(15~20m)	先土器?、縄文	
D-12-21	梨野舞納砂丘	遺物包含地	梨野舞納251-8ほか	海成砂丘列上(10m)	中期	
D-12-22	梨野舞納段丘2	遺物包含地	梨野舞納259-1~3ほか	梨野舞納段丘(30m)	縄文	
D-12-23	梨野舞納段丘3	遺物包含地	梨野舞納94ほか	梨野舞納段丘(30m)	縄文、擦文	
D-12-24	梨野舞納段丘4	遺物包含地	梨野舞納37ほか	梨野舞納段丘南向き緩斜面(30m)	縄文	
D-12-25	発見砂丘	遺物包含地	梨野舞納84ほか	旧発見川と現発見川とに挟まれた海成砂丘(10m)	後期?	
D-12-26	東山4	遺物包含地	老古美41-1・2・6・8	ボン岩内川右岸砂丘(30m)	縄文	岩内町D-13-4と同じ
D-12-27	リヤムナイ1	遺物包含地	古野舞納76, 220-1	海岸砂丘(10m)	擦文	
D-12-28	リヤムナイ2	遺物包含地	梨野舞納373-1	海岸砂丘(5m)	縄文	
D-12-29	リヤムナイ3	遺物包含地	梨野舞納19-2, 151-11	海岸砂丘後背部、D-12-21(中期)と同一砂丘列(7~10m)	縄文前期・中期	本書

表Ⅱ-2 岩内町の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	所在地	立地(標高)	時期	備考
D-13-1	東山1	集落跡	東山2-1ほか	海岸段丘を開拓する小浜右岸が主体部(25~30m)	前期・中期(円筒下層・土樋式)	
D-13-2	東山2	遺物包含地	東山11-1~10	海岸段丘	縄文	
D-13-3	東山3	遺物包含地	東山178-1・2,179	河岸段丘	縄文	
D-13-4	東山4	遺物包含地	東山150-1~2ほか	河岸段丘(20m)	縄文	共和町D-12-26と同じ
D-13-5	全修寺	遺物包含地	高台12-5・6	海岸段丘	縄文	
D-13-6	栄1	遺物包含地	栄133-1~5ほか	丘陵の頂部に近いところ	中期(円筒上層)、後期(余市式)	
D-13-7	栄2	遺物包含地	栄213-1~6ほか	河岸段丘(傾斜地)	中期	
D-13-8	栄3	遺物包含地	栄227-1~5	河岸段丘	縄文	
D-13-9	高台1	遺物包含地	高台194	河岸段丘(傾斜地)	縄文	
D-13-10	高台2	遺物包含地	高台229-1・5,334-1	河岸段丘	縄文	
D-13-11	大浜1	遺物包含地	大浜57	砂丘	縄文	
D-13-12	島野1	遺物包含地	野東16.36	河岸段丘(野東川に注ぐ小沢の左岸)	縄文	

表Ⅱ-3 泊村の遺跡一覧

登録番号	遺跡名	種別	所在地	立地(標高)	時期	備考
D-14-1	茶津1号洞穴	洞穴	瀬株村字茶津内99-10ほか	海蝕崖(5m)	晩期、縄文	
D-14-2	茶津2号洞穴	洞穴	瀬株村字茶津内99-10ほか	海蝕崖(5m)	晩期	
D-14-3	茶津3号洞穴	洞穴	瀬株村字茶津内202	海蝕崖(5m)	続縄文	
D-14-4	茶津4号洞穴	洞穴	瀬株村字茶津内101-1	海蝕崖(11m)	続縄文(恵山・後北・北大式)	
D-14-5	茶津貝塚	貝塚	瀬株村字ヘロカルウス26-1ほか	海岸段丘(45~50m)	中期(天神山式)	
D-14-6	茶津チャシ跡	チャシ跡	瀬株村字ヘロカルウス山ノ上132ほか	(25~30m)	アイヌ文化期	
D-14-7	照岸洞穴	洞穴	泊村字照岸100-3	海岸に面した崖(4m)	縄文、続縄文(恵山・後北式)、縄文	
D-14-8	瀬株1	集落跡	瀬株村8-1ほか	旧瀬株川右岸(5~10m)	中期~晩期、続縄文(恵山・後北式)、縄文	
D-14-9	洗井	遺物包含地	瀬株村字洗井127-3~6ほか	海岸砂丘(5m)	晩期、続縄文(恵山式・後北式)、縄文	
D-14-10	瀬株2	遺物包含地	瀬株村5-7ほか	旧瀬株川右岸(7~10m)	中期~晩期	
D-14-11	茶津	遺物包含地	瀬株村字茶津内99-3・4	茶津川右岸(6~9m)	前期~後期、続縄文	
D-14-12	茶津5号洞穴	洞穴	瀬株村字ヘロカルウス(国産)	海蝕崖(25m)	縄文	
D-14-13	ヘロカルウス	遺物包含地	瀬株村字ヘロカルウス山ノ上541-1	海岸段丘上、小沢段縁部から段丘縁(40~85m)	中期~晩期、縄文	
D-14-14	龍神沢洞穴	洞穴	瀬株村河川敷地	龍神の沢川左岸(16m)	縄文?	
D-14-15	瀬株3	遺物包含地	瀬株村237ほか	旧瀬株川右岸(5~6m)	晩期	
D-14-16	瀬株4	遺物包含地	瀬株村28-1~8ほか	旧瀬株川右岸段丘上(20~40m)	前期・中期(円筒式)	共和町D-12-1から分類
D-14-17	茂岩貝塚	貝塚	瀬内村字モイワ230-1・2	海岸砂丘(4m)	アイヌ文化期	
D-14-18	壺1	遺物包含地	壺村160-1ほか	海岸砂丘(8m)	晩期	
D-14-19	壺2	遺物包含地	壺村127ほか	海岸段丘(10~20m)	縄文	
D-14-20	兜洞穴	洞穴	泊村字照岸105-1 国産	海岸に面した崖(2m)		
D-14-21	糸泊洞穴	洞穴	泊村字糸泊98国産	海岸に突出する舌状部南側の崖面(5m)		
D-14-22	汐見橋	遺物包含地	泊村字糸泊315-1~4	海岸段丘(30m)	早期~中期	
D-14-23	泊戸	遺物包含地	泊村59ほか	海岸段丘(30m)	縄文	
D-14-24	戸別洞穴	洞穴	泊村1-甲 国産	海岸へ突出する舌状部(20m)		
D-14-25	臼別洞穴	洞穴	茅沼村195国産	海岸へ突出する舌状部先端(20m)		
D-14-26	臼別高台	遺物包含地	茅沼村字坪岡山ノ上82-3ほか	海岸段丘(60m)	後期	
D-14-27	洗井貝塚	貝塚	瀬株村字洗井北山ノ上5-3ほか	海岸段丘(25m)	後期・晩期	
D-14-28	モヘル洞穴	洞穴	泊村30-1 国産	海岸へ突出する崖の南面		
D-14-29	茅沼洞穴	洞穴	茅沼村字北坂ノ上187地先国産	海蝕崖(2m)		
D-14-30	茅沼	遺物包含地	茅沼村119-1ほか	玉川右岸の砂丘(5m)	晩期、続縄文(恵山・後北式)、弥生、縄文、アイヌ文化期	
D-14-31	稲荷神社下洞穴	洞穴	泊村山の上記地先産	海蝕崖(3m)		
D-14-32	瀬株神社	貝塚	瀬株村81-1~4ほか	海岸砂丘から段丘裾部分(5m)	晩期、続縄文(恵山・後北式)、弥生、縄文、アイヌ文化期	
D-14-33	滝ノ瀧	集落跡	瀬株村字滝ノ瀧19-1ほか	海岸段丘上で舌状に開拓された南側傾斜面(30~40m)	中期~後期	



図11-8 周辺の遺跡分布図

(この図は国土地理院発行5万分の1地形図「岩内」「赤松」「岩内町」「岩内町」を複製し作成したものである。)

III 調査の方法

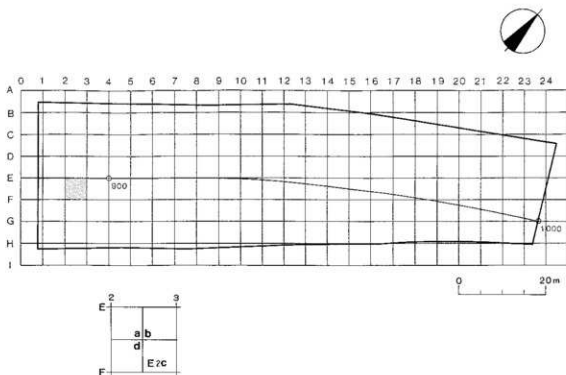
1 発掘調査の方法

調査区は、岩内町の市街地から国道276号線を泊村に向かって約4km北上した防風林の中に所在している。発掘調査に先行して進入路の一部造成工事と調査区の伐木、抜根作業を小樽開発建設部に依頼した。その後、業者に委託し重機による表土除去を開始した。

今年度の調査区には、岩内方向から並走していた、旧国鉄岩内線と茅沼炭鉱専用鉄道の路線上に位置していたために、両鉄道の跡が調査区を縦断するように残されていた。そのためこの鉄道跡の盛土（道床・路盤土）を除去することから表土剥ぎを行なった。表土除去には1週間を要し、6月末に終了した。

遺跡は標高約7mの平坦な海岸砂丘地帯に立地している。このためラミナの発達予想され、土層の堆積状態等を確認するためトレンチ調査を行なうことを検討した。また遺構や遺物の全体的な濃淡を把握するために5m四方の発掘区を一つ置きに調査する方法（25%調査）を用いた。これをもとに遺構や遺物の分布状況を推定し、全体の調査に着手した。

トレンチ調査の結果、調査区内は砂層が厚く堆積した風成砂で形成されていることが判明した。細粒の砂層は上位では斜行ラミナが発達し、下部では比較的平行なラミナが観察された。特に上位では起伏が不規則で境界が不明瞭である。（笠原）



図III-1 発掘区設定図

2 調査区の設定

発掘区の設定にあたっては小樽開発建設部岩内道路事務所の一般国道276号岩内共和道路工事の用地平面図（縮尺1：1000）を使用した。基軸線は工事予定中央線のSTA880とSTA900を結び、基準のEラインとした。縦方向の基軸線はSTA900のEラインと90度直交する線を4ラインとした。

発掘区は5m×5m方眼とし、西端交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称している（例：E-2、E-3等）。また、調査の必要に応じて5m方眼の発掘区を2.5m方眼に4分割し（小発掘区）遺物の取り上げを行なった。小発掘区は杭のある側（西端）から時計回りにa、b、c、dを付し「E2a、E2b」のように呼称した（図Ⅲ-1）。Eラインの真北はN-44°-Eである。

この方眼の平面直角座標は第X i系で以下のとおりである。（世界測地形による）。

STA. 880 （調査区杭番号E-0） X=-111201.085 Y=23617.544

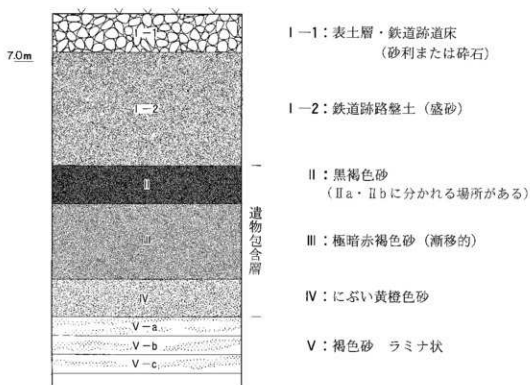
STA. 900 （調査区杭番号E-4） X=-111186.630 Y=23631.366 （笠原）

3 基本土層

リヤムナイ3遺跡の土層断面図を図Ⅲ-2に示した。遺跡はほぼ平坦な海岸砂丘地帯にあり、岩内方向から並行して走っていた2本の鉄道跡が分岐する地点にあたる。このため、調査区内には縦断するように2列の道床と路盤土が残されていた（レールと枕木が無い状態）。道床は、列車が通過する際にかかる荷重や振動を均等に吸収するための砂利または碎石の層である。砂利や碎石を使うことで、枕木を安定させ軌道の排水性を高める役割も兼ねている。また碎石は角が鋭っているため、摩擦が大きく、積み上げた時にも崩れにくいという利点を持っている。

路盤土は道床の下に位置し、道床に伝わる列車の荷重を最終的に支えるものである。その材料は土が一般的で路盤土といわれる（都市型鉄道や新幹線などは除く）。

遺物包含層であるⅡ層の一部を削平して路盤土が盛られているために、Ⅱ層の残存状態は悪い。Ⅱ



図Ⅲ-2 基本土層

層は黒褐色を呈する細粒の砂層で調査区の南側ではⅡa層とⅡb層に分かれる所がある。Ⅲ層は極暗赤褐色砂層で上位には褐鉄鉱の沈着が見られた。特に調査区東側の岩内線の直下では固く締まる所がある。全体的には漸移的な堆積を呈している。Ⅳ層はにぶい黄橙色の細粒砂層で場所によってラミナの発達が見られる。Ⅴ層は褐色を呈した細粒砂層で、この層から下位は特にラミナの発達が顕著である。

土層の記載は『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペトロロジー学会編2000）を参考にし、土色、土性、粘性、堅密度、含有物等について記載した。土色については『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を用いた。土壌の色名については、乾燥状態では灰白色を呈する砂層が主体であったため、表面を薄く削った状態のものを採用している。（笠原）

4 整理の方法

出土した遺物は取り上げ後、水洗して、大まかな分類を行ない遺物台帳・遺物カードを作成した。遺物の中で層位毎に取り上げたものについては掘り下げ回数を台帳・カードに書き入れた。

台帳整理が終了したものから随時注記作業を行なった。土器片・石器・遺構出土遺物については遺跡名の略号「リヤム3」、発掘区または遺構名、遺物番号、出土層位を記した。

現地調査終了後の室内整理作業では、遺物台帳、カードの点検、台帳の補正等を行なった。土器については個体識別、接合、復元、拓本、実測および作図、集計、記録類の整理等を行なった。特に復元作業にあたっては同一個体の破片を把握する事に努め、発掘区毎に口縁部の破片を抽出して個体数を推定した。

石器についても分類の見直しを行ない、遺構、包含層、器種別に収納し、必要な計測、属性観察を行なった。分類された器種の中で、定形的で器体の残存状態の良好なものを選択して実測を行い、報告書掲載石器に限り機能部にはこだわらず最大長・最大幅・最大厚・重量について計測した。

整理作業終了後の収納は、報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行なった。報告書掲載のものは図版に対応するように小分けして収納し、それ以外のものは分類毎に遺構別あるいは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。（笠原）

5 遺物の分類

(1) 土器

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。統縄文時代のはⅥ群、擦文時代のはⅦ群である。平成16年度の調査ではⅡ群とⅢ群土器が出土している。Ⅱ群、Ⅲ群は以下の様に細分した。前半期のものをa類、後半期のものをb類としている。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文の施された尖底、丸底が主体となる土器群

今年度の調査では押し引き文、沈線文、刺突文、羽状縄文を特徴とする道南の春日町式に関連付けられる土器が出土している。これに伴う斜行縄文の施された土器群があり、尖底のものほか平底のものがある。

b類 円筒土器下層式に相当するもの

今年度の調査では円筒下層c式が出土している。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒上層a式、円筒上層b式、サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの

今年度の調査ではサイベ沢Ⅶ式に相当するものが出土している。

b類 天神山式、柏木川式、ノダツⅡ式、煉瓦台式に相当するもの

(2) 石器

石器は器種別の大分類にとどめ、記号等による細分類は行っていない。石器は遺跡内で出土したものに對してその器種の名称と定義を述べることとし、以下に記した。

石礮

剥片を素材にし、押圧剥離によって両面調整された尖頭形を呈する5cm未満のもの。

石槍またはナイフ

剥片を素材にし、押圧剥離によって両面調整された尖頭形を呈する5cm以上のもの。

石錐

剥片を素材にし、端部に錐状の突出部を有するもの。

つまみ付ナイフ

剥片を素材にし、素材の長軸端部につまみ部がつくり出されたもの。

スクレイパー

剥片を素材にし、側縁に調整剥離面が連続して加えられたもの。

両面調整石器

剥片を素材にし、剥離が素材の両面に施されるもので尖頭形ではないもの。

Rフレイク

剥片を素材にし、加工痕のみられる不定形なもの。

Uフレイク

剥片を素材にし、使用痕のみられる不定形なもの。

剥片（フレイク）

石核あるいは石器から剥離されたもので、二次的な剥離を受けていないもの。

石核

石器の素材になりえる大きさで、形状の剥片を剥離した痕跡が複数あるもの。

石斧

剥片あるいは礫を素材にし、敲打、打ち欠き、研磨により整形され、斧状の刃部があるもの。

たたき石

礫を素材にし、敲打痕があるものの中で、能動的と考えられるもの。

すり石

礫を素材にし、すり跡があるものの中で、能動的と考えられるもの。

北海道式石冠

厚い礫を素材にし、打ち欠き、敲打により石冠状に整形されたもので、下面に幅広い擦痕を有するもの。

石錘

扁平な円礫の長軸または短軸の両端に打ち欠きによる抉りが入られるもの。

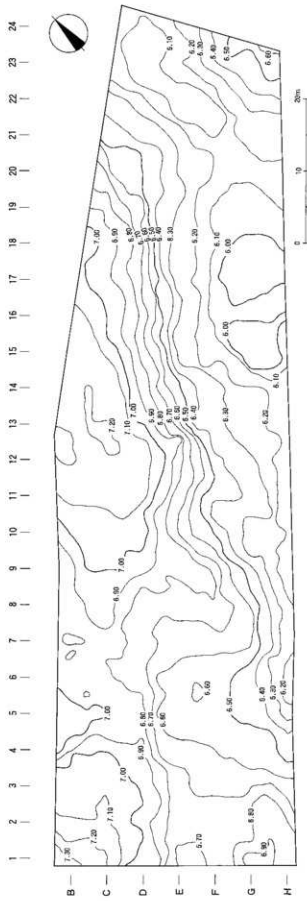
砥石

素材に研磨面をもつもので、砥面が平滑かあるいは溝状の凹みがあるもの。

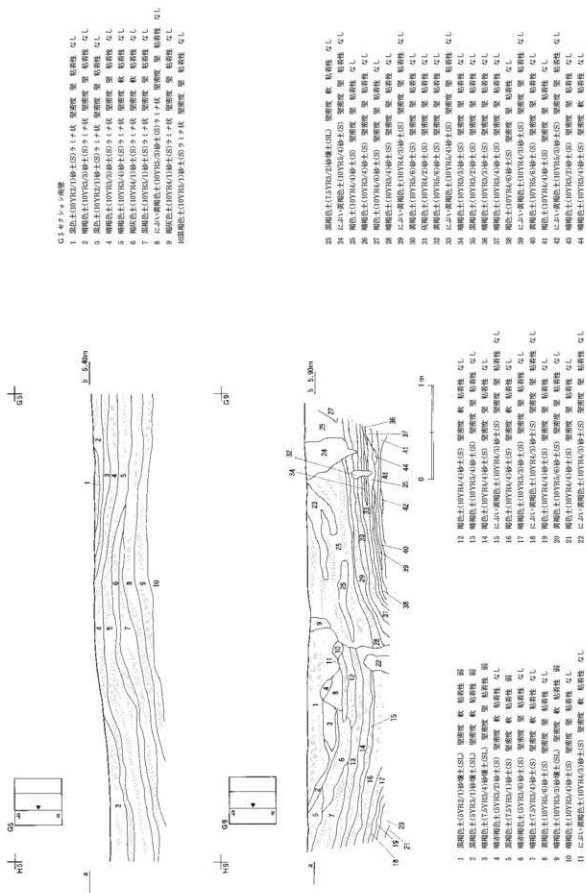
台石・石皿

擦り痕もしくは敲打痕があるものの中で、受動的と考えられるもの。

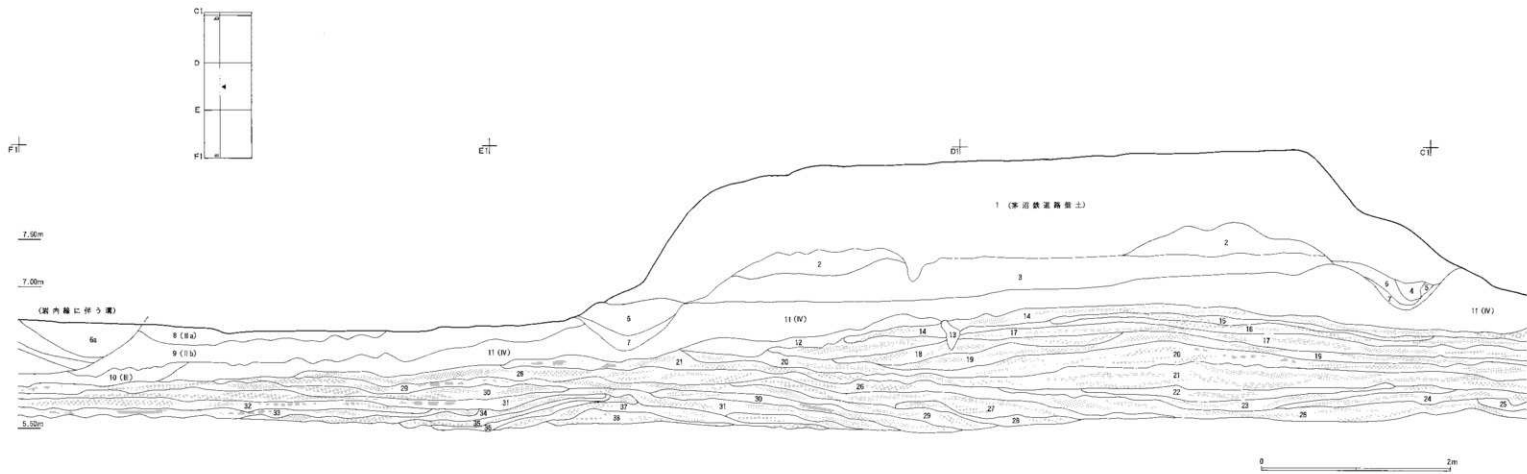
(笠原)



図III-3 III層上面の地形

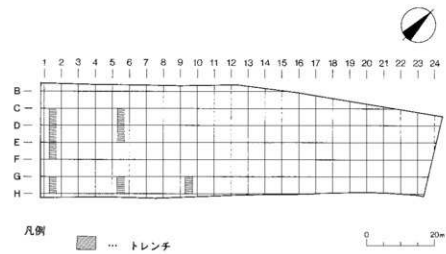


図III-6 G5トレンチ南壁土層断面図(上)・G9トレンチ南壁土層断面図(下)



- 1 表土。季節成壤高層土。
- 2 におい黄褐色土(HV76/2)砂土(S) 堅密度 堅 粘着性 なし。
粒径<2mmの非固砂礫土が混じる。季節成壤土。泥ケラ上段に属する。
- 3 黒褐色土(SV74/2)砂礫土(SL) 堅密度 軟 粘着性 弱
赤褐色の砂礫土が混じり混ざる層がある。
- 4 黒褐色土(SV72/2)砂礫土(SL) 堅密度 軟 粘着性 弱
粒径10mmの非固砂礫土がトップ層に混じる。季節成壤土。
- 5 暗褐色土(SV70/2)砂礫土(SL) 堅密度 軟 粘着性 弱
季節成壤土に伴う層土。
- 6 褐色土(SV68/2)砂礫土(SL) 堅密度 軟 粘着性 弱
6aは岩層に伴う層土。
- 7 におい褐色土(SV70/2)砂土(S) 堅密度 堅 粘着性 なし。
- 8 黒色土(SV72/2)砂礫土(SL) 堅密度 (シ) 粘着性 なし。
- 9 黒褐色土(SV70/2)砂礫土(SL) 崩層 堅密度 軟 粘着性 弱
- 10 黒褐色土(SV70/2)砂礫土(SL) 崩層 堅密度 軟 粘着性 弱
- 11 暗赤褐色土(SV70/2)砂土(S) 崩層 堅密度 堅 粘着性 なし。
- 12 褐色土(SV74/2)砂土(S) 崩層 堅密度 堅 粘着性 なし。
- 13 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) 崩層 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 14 におい黄褐色土(HV76/2)砂礫土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 15 におい黄褐色土(HV72/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 16 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 17 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 18 暗褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。

- 19 におい黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 20 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 21 におい黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 なし。
- 22 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 23 褐色土(SV74/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 24 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 25 におい黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 26 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 27 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 28 灰黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 29 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 30 灰黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 31 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 32 におい黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 33 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 34 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 35 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 36 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 37 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 38 灰黄褐色土(HV76/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱
- 39 暗褐色土(SV70/2)砂土(S) トラナ状 堅密度 軟 粘着性 弱



図III-7 C1~F1トレンチ南壁土層断面図

IV 遺構と遺構出土の遺物

1 集石

S-1 (図IV-2、図版10-1・15-1、表1~3・6)

位置 H1b 規模 0.36×0.12

確認調査 調査区南端のトレンチ調査中にV層上面で石斧の集中を確認した。重ねられる様な状態で出土した5点の石斧とその下から頁岩製のスクレイパーが1点出土した。標高は約6mで、ラミナの発達する砂層中である。土壌を推定できるようなラミナを切る掘り込みは無く、周辺からも遺物は出土していない。

遺物 1の石材は片岩で基部が欠損している。2・4・5は石材に緑色泥岩を使用し、ほぼ全面に研磨が施される。2は基部が欠損し、5の左側縁部は打ち欠きによる整形痕が残る。3の石材は片岩である。6はスクレイパーで石材は頁岩である。やや背面側に湾曲した剥片を素材にし、両側縁に刃部を有する。右側縁の剥離は器体のほぼ中央付近から急角度で施される。素材には有孔虫化石が含まれている。

時期 検出層位や当遺跡の主体が縄文時代前期前半頃であることからこの時期の可能性が高い。

S-2 (図IV-3、図版10-2・15-2、表1~3・6)

位置 D20b 規模 1.20×0.85

確認調査 III層1回目の調査中に礎の一部を確認し、III層2回目掘り下げ後に全体を検出した。拳大の円礎が8点検出され、そのうちたたき石が6点、台石が1点である。被熱したものが3点含まれる。

遺物 1はたたき石で両端部に敲打痕があり被熱する。2は台石で片面に擦痕がある。

時期 周辺の遺物から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

S-3 (図IV-3、図版10-3・15-3、表1~3・6)

位置 G21b・c 規模 2.00×0.85

確認調査 IV層1回目の調査中に礎のましまりを確認した。たたき石が5点、石錘が1点である。

遺物 1・2は周縁部の敲打痕が顕著なたたき石で、1の器体中央部には擦痕がある。3は石錘とした。

時期 周辺の遺物から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

S-4 (図IV-4、図版10-4・15-4、表1~3・6)

位置 C20c・D20b 規模 3.20×0.90

確認調査 S-2の調査後、IV層1回目の調査中にたたき石のましまりを確認した。周囲には頁岩と玄武岩の剥片が散在している。

遺物 1は顕著な被熱痕が残る。2の敲打痕は軽微なもの。3は周縁部に敲打痕が巡る。

時期 周辺の遺物から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

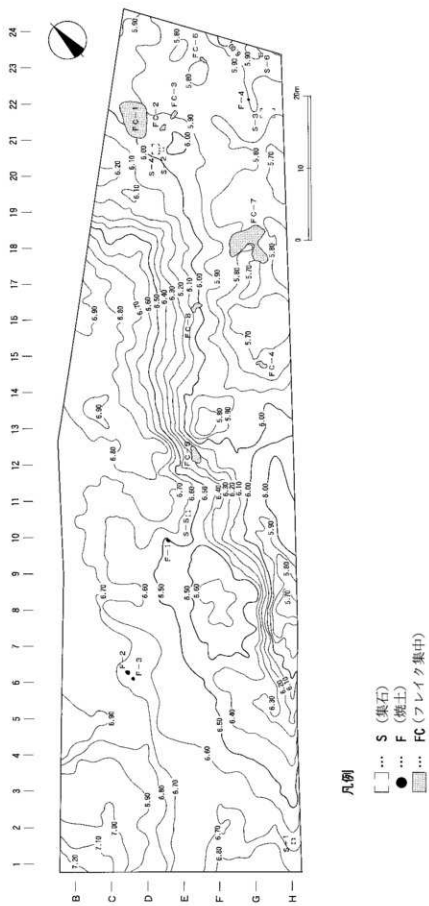
S-5 (図IV-5、図版10-5・16-1、表1~3・6)

位置 E10b 規模 0.48×0.30

確認調査 調査区のはほぼ中央、IV層1回目の調査中に確認した。たたき石が5点、礎が1点である。

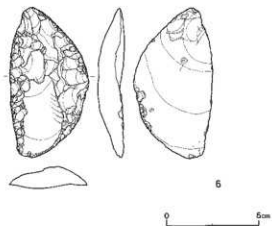
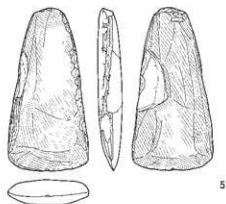
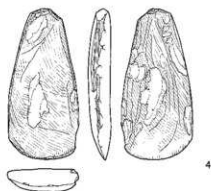
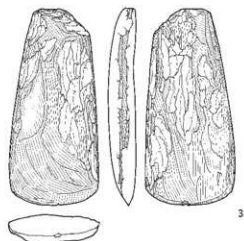
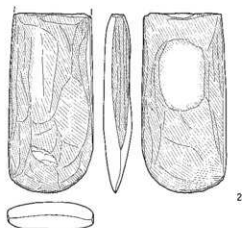
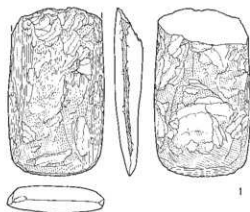
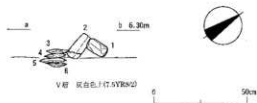
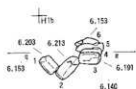
遺物 1は両端部に敲打痕がある。2の敲打痕は軽微なものである。

時期 周辺の遺物や出土レベルから判断して縄文時代中期前半頃の可能性がある。



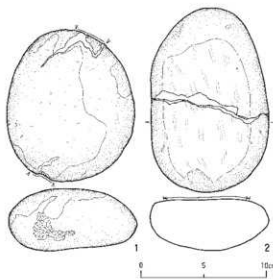
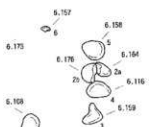
図IV-1 最終面の地形と遺構位置図

S-1



図IV-2 S-1と出土の遺物

S-2

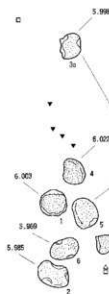


S-3



☆ 6.027

c



6.960



6.815

6.940



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



6.815



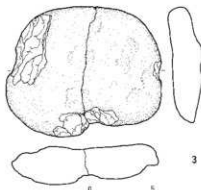
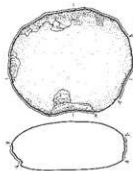
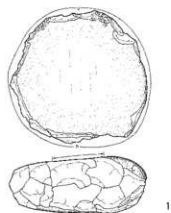
6.815



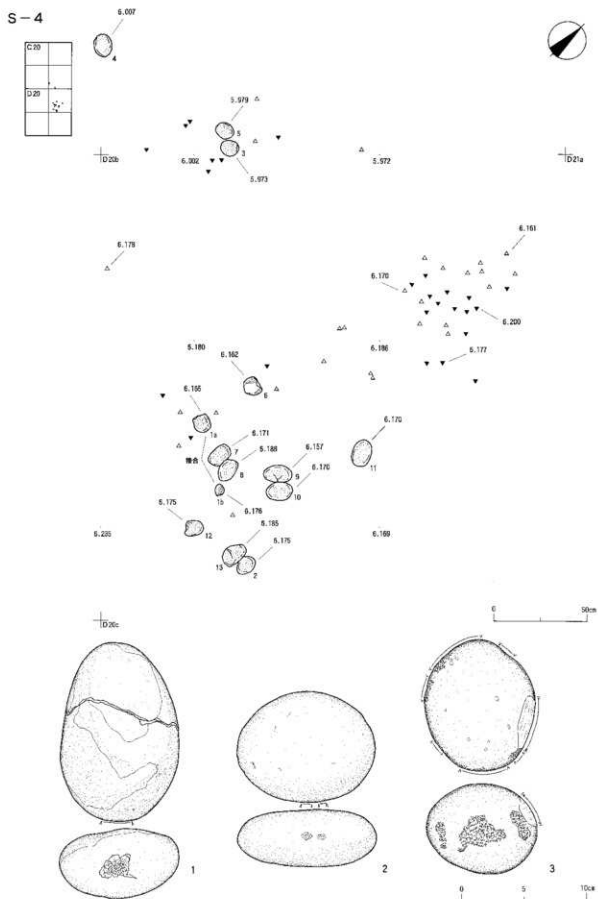
6.815



6.815

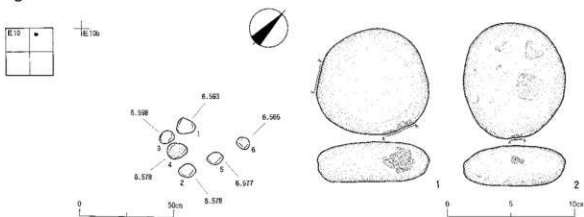


図IV-3 S-2・3と出土遺物

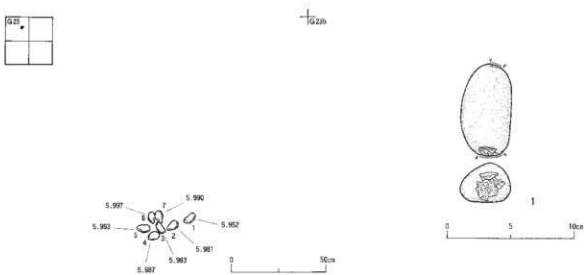


図IV-4 S-4と出土遺物

S-5



S-6



図IV-5 S-5・6と出土遺物

S-6 (図IV-5、図版10-6・16-2、表1~3・6)

位置 G23a 規模 0.32×0.15

確認調査 調査区南端のIV層3回目の調査中に礫のまとまりを確認した。他の集石と比較して小型で100g前後のもので構成されている。7点出土したうち、1点のみ顕著な敲打痕が認められた。

遺物 1は小型の円礫で、両端部に敲打痕がある。

時期 周辺の遺物から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

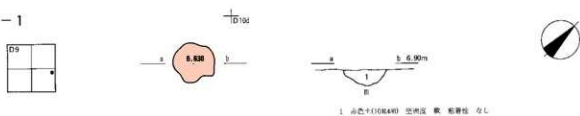
(笠原)

2 焼土 (図IV-6、図版11-1~8、表1・2)

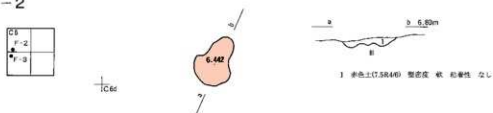
焼土は4基検出した。F-1~F-3は調査区中央よりやや西側の標高7m付近で検出され、F-4は調査区東端、IV層下位の標高5.8mから検出された。F-1はD9cグリッドのⅢ層上面で検出され、木根攪乱と考えられるしまりの弱い部分に炭化物が含まれる。検出した層位と周辺の遺物等から縄文時代中期頃と考えられる。F-2はC6aグリッドのⅢ層上面で検出した。遺物等は無く、隣接してF-3がある。検出層位等から縄文中期頃と思われる。F-3はC6dグリッドのⅢ層上面で検出した。F-2とはほぼ同レベルであるが、規模は小さく遺物等も出土していない。F-2と同時期と考えられる。

F22dグリッドのIV層2回目を調査中、土器片や軽石の他数点の小礫や黒曜石の剥片、更に微細な骨片や炭化物等を検出した。土器片はⅡ群a類で、軽石には溝状の削痕があった。これらの遺物を調査した後、更に掘り下げを行なったところ小規模な暗赤褐色の焼土F-4を確認した。ほぼ同レベルから出土した炭化材についてAMS法による放射性炭素年代測定を行なった。その結果5555±30年前という測定値を得ている。(VI章-1参照・試料1)。(笠原)

F-1



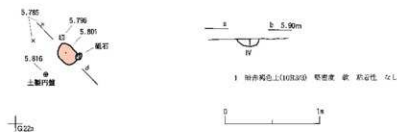
F-2



F-3



F-4



図IV-6 F-1~4

3 フレイク集中

FC-1 (図IV-7、図版12-1・16-4、表1~3・6)

位置 C21a~d、D21a・b 規模 4.85×3.25

確認調査 調査区北端のⅢ層下位からⅣ層上面にかけて出土した頁岩主体の剥片集中である。FC-7について遺物の出土量が多い。遺物の多いブロックは土ごと取り上げ、水洗を行ない微細な遺物の検出に努めた。出土点数は2,525点で、このうち頁岩の剥片が2,046点、玄武岩の剥片が455点を占める。

遺物 1は石錐で薄手の縦長剥片を素材にし、先端部に突出部が作出される。先端部から左側縁にかけて両面から調整が施され刃部も作られている。2は石核としたが筐状石器等の未製品の可能性がある。3・4はたたき石で4の敲打痕は軽微なものである。5は台石で片面に帯状の被熱痕がある。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-2 (図IV-8、表1・2)

位置 D21a~d 規模 2.95×1.15

確認調査 FC-1の東側のⅣ層上面で玄武岩の剥片集中を確認した。出土点数は83点でこのうち玄武岩の剥片が71点である。FC-1と関連する可能性が高い。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-3 (図IV-8、表1・2)

位置 D21c 規模 1.00×0.25

確認調査 FC-2の東側のⅣ層上面で頁岩の剥片集中を確認した。出土点数は462点である。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-4 (図IV-8、図版12-2、表1・2)

位置 G14b 規模 1.75×0.70

確認調査 Ⅲ層中から検出した黒曜石の剥片集中で出土点数は3,310点である。頁岩の剥片が65点混じる。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-5 (図IV-9、図版12-3・16-5、表IV1・2・6)

位置 E12a・d 規模 2.30×1.20

確認調査 調査区のはぼ中央、Ⅲ層2回目の調査中に浅い落ち込みを確認し、覆土中から頁岩の剥片集中を確認した。出土点数は724点である。落ち込みの北側には台石が1点出土した。

遺物 1・2は頁岩を素材にした石錐で、2は先端部を欠損する。3は石錐で、剥片素材の右側縁部を主体に二次加工を施して尖頭部を作出する。4は台石である。

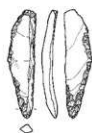
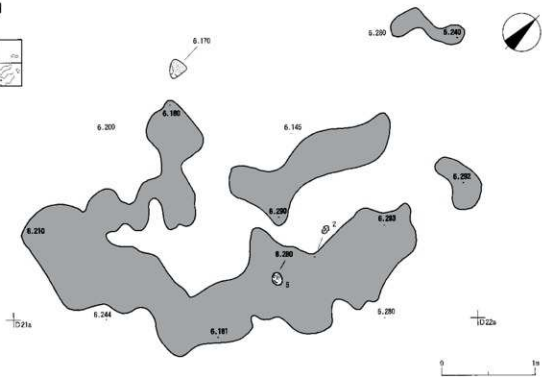
時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-6 (図IV-9、図版12-4・16-7、表1・2)

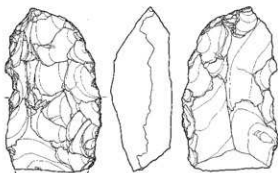
位置 E23b 規模 1.03×0.25

確認調査 調査区北東端のⅢ層調査中に頁岩の剥片集中を確認した。確認面においては小規模な集中であったが1,550点を数える剥片が出土している。

FC-1



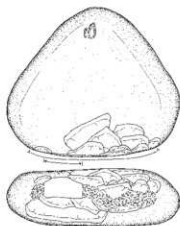
1



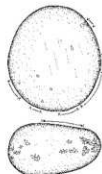
2



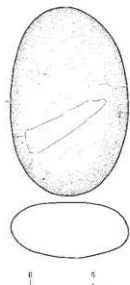
0 5cm



3



4



5

0 5 10cm

図IV-7 FC-1と出土の遺物

遺物 1は台石で両面に比較的幅の広い擦り面がある。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-7 (図IV-10、図版12-5・16-6、表1・2・6)

位置 E17c、F17b・c、E18d、F18a～d 規模 5.50×4.65

確認調査 調査区東側のⅢ層からⅣ層にかけて広範囲に渡る頁岩主体の剥片集を検出した。大きくは4つのブロックに分かれる。遺物の出土量が多いため、土ごと取り上げて水洗を行ない微細な遺物の採取に努めた。内訳は頁岩の剥片が4,408点、玄武岩160点、黒曜石が133点である。

遺物 1はたたき石で両端部に敲打痕があり、すり面もある。2・3は石錘で長軸短軸の両端4カ所に打ち欠きがある。

時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

FC-8 (図IV-10、図版12-6・16-3、表1・2・6)

位置 E16a・d 規模 1.55×0.50

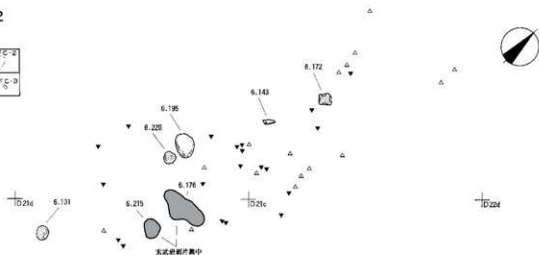
確認調査 Ⅳ層上面で頁岩の剥片集を確認した。出土点数は899点ですべて頁岩である。

遺物 1はたたき石で敲打痕は軽微なものである。

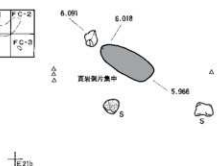
時期 周辺の遺物等から判断して縄文時代前期前半頃と思われる。

(笠原)

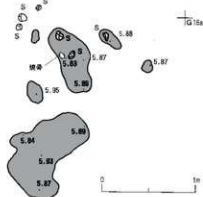
FC-2



FC-3

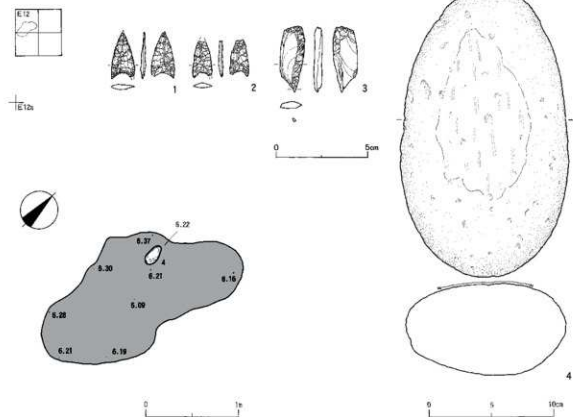


FC-4

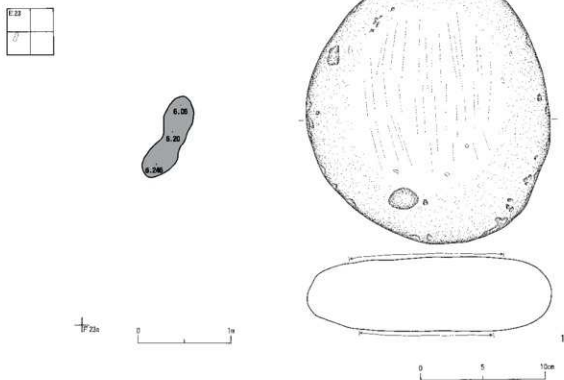


図IV-8 FC-2～4

FC-5

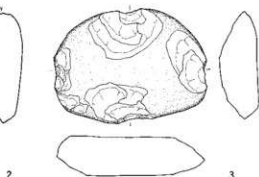
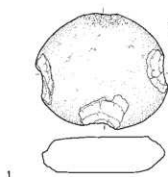
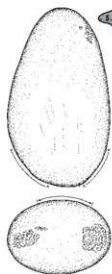
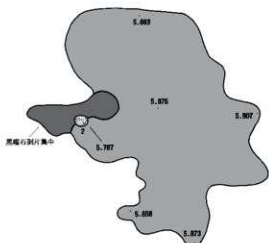
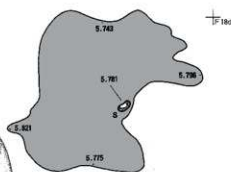
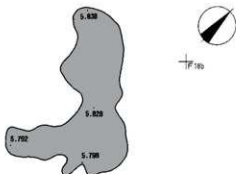
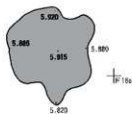


FC-6

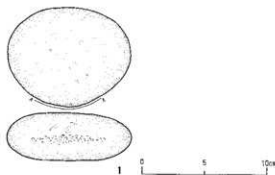
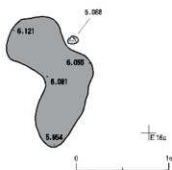


図IV-9 FC-5・6と出土の遺物

FC-7



FC-8



図IV-10 FC-7・8と出土の遺物

V 包含層出土の遺物

包含層から土器2,421点、土製品2点と石器581点、フレイク14,185点、礫・礫片868点合わせて18,057点が出土した。

1. 土器・土製品 (図V-1～10、図版13、14、17～21、表4・7)

土器はすべて縄文時代前期と中期のもので、その9割近い2,148点が前期前半のⅡ群a類土器である。ほかに前期後半のⅡ群b類土器が73点、中期前半のⅢ群a類土器が91点ある。中期後半期のⅢ群b類は2点である。これらは時期ごとに分布域を異にする傾向が認められた。ここでは土製品2点も合わせて報告することとする。

縄文時代前期の土器

Ⅱ群a類 (図V-1～8-1～56)

概要

2,148点出土した。Ⅱ層から71点、Ⅲ層から1,182点、Ⅳ層から867点、攪乱・表採28点である。また、ごく小さな破片で文様が判別できず「不明」と判断した107点についても、分布が重なることからⅡ群a類土器の可能性が高いと判断できる。主となる包含層はⅢ層下位～Ⅳ層である。分布は18ラインよりも東側には限られ、特にF・G-19～23区に集中する。石器等の分布域、また集石(S)、フレイク集中(FC)等遺構の分布域と重なる。Ⅲ層2回目から出土量が増え始め、Ⅳ層2回目までほぼ途切れることなく出土する。

Ⅱ群a類土器は①分布域が限られることに加え、②調査区は西側から東側に緩やかに傾斜し、地形の変化が著しく不規則な起伏があること、③Ⅲ層出土のものとⅣ層出土のものが接合する例が多いことなどから、これらはあまり時間的な幅があることは考えられず、ほぼ同じ時期の一群の土器と捉えることが可能である。

出土状況について

倒立した状態で出土した土器(図V-4-11)の検出状況についてここで簡単に記載しておく。

11は調査区東端、G-22-d区から検出されたものである。Ⅲ層2回目の調査で胴部に相当する部位が円く現われた。胴部下半部が土圧でつぶれた状態で、口縁部の接している位置はⅣ層上位でほぼ全周が残存しているが、底部の破片は無い(図版13-5・6)。トレンチを設け断面を観察したがこの段階では掘り込み、壁の立ち上がり等は確認できていない。土器を取り上げ後、口縁部が接していた位置から7～8cmほど掘り下げた段階で、炭化クルミを含む層(1層)と褐色の粘土粒を含む層(2層)が検出された(図V-4、土層断面a-b。土器の位置は図上で復元)。周辺部を精査したところ炭化クルミを含む層(2層)は比較的広範囲に認められ、調査区外まで及んでいることが分かった(土層断面c-d、図版13-7)。さらに下部からは骨片をふくむ焼土の可能性が高い層(5層)も認められた。5層の広がるレベルは土器の口縁部の位置よりは18cmほど下がる。土器の傍らからは台石、すり石、たたき石、フレイク、石核、石錘など居住あるいは作業の空間を予想させる石器が検出されている。倒立した出土状態がどのような意味を持つかは不明であるが、何らかの遺構に伴う可能性があり、検討の余地が残される。

なお、この土器内に詰まっていた土壌(Ⅳ層主体：にぶい黄褐色砂土)を水洗したところ乾燥重量にして1.5gの炭化クルミ殻が得られた。このクルミ殻1件(試料6)と土器下位の堆積土(1層と2層)から採取したクルミ殻2件を用いて放射性炭素年測定(AMS法)を行った。補正14C年代で

以下の結果が得られている。試料7は土層断面図のNo.1の地点、試料8はNo.2の地点から採取したものである(第VI章参照)。試料7、8はほぼ同じ値、試料6が後二者よりも70年ほど古い値を示している。

試料No.6 : 5415±30 (yrBP±1σ)

試料No.7 : 5345±30 (yrBP±1σ)

試料No.8 : 5340±30 (yrBP±1σ)

II群a類は文様要素から1～3類に分けられる。以下、順に記載することとする。

1類 沈線文、押引文、刺突文が施されるもの(1～8)

いずれも口縁部、胴部の破片であるため、全体の文様構成がわかるものは無い。少なくとも8個体が確認できた。押引文や縄文で特徴づけられるものである。沈線文は押し引きの手法によるものである。焼成が良く、内面はよく磨かれている。

1a～cは同一個体。F-22-a・d区のIV層調査中でややまとまって出土したほか、5、6mほど離れたF-20-c区、D-21-c区から出土した破片も接合している(図版14-3)。大きく2つに接合できたものを、器形を想定して復元した。胴部半ばから下半に近い部位で口縁部、底部はない。胴部でわずかに膨らみを持つ器形で尖底になる可能性がある。胴部上半から半ばまであらかじめRL原体による斜行縄文が施されていたようである。その後胴部下半にはLRL原体による斜行縄文が施されている。胴部上半の縄文を一部磨り消し無文部とし、左から右方向へ押し引いた沈線文を5、6条めぐらせている。間隔が不揃いで、重ねて施文したり途切れたりする部分がある。1dは裏面の破片の一部を実測したものであるが、磨り消されず一部羽状を構成する文様となっている。最上位の沈線間には上方から下方へ押し引く文様がやや間隔をあけてつけられている。器面を全周するのである。一部横方向の文様もある(1b)。平行沈線文は竹管工具の、押引文の原体は竹管を裂いたものを2本並列に束ねたような施文具の、いずれも背面を使用しているとみられる。文様を施文後、ほぼ全面をナデ調整しており縄文が消えている部分がある。検出された資料の中で最も入念に調整されているものである。焼成は良好で硬質である。

2～5は縄文地に、6～8は無文部に施文がある。2は左傾する縄文があると見られ、角形の口唇上と口縁部に沿って棒状工具での刺突文が加えられている。3は緩やかな波状口縁になるかとみられる。内面から口唇上にかけてはナデ調整されている。LR原体による斜行縄文が施され口縁部には押し引きによる沈線文が複数めぐり、竹管状工具による円形刺突文を重ねている。胎土に砂粒が多い。4は胎土に径1、2mmの小砂利が多く混じる。0段多条の縄文が施され、断面が半円形の工具による刺突文がある。5～8は押し引きによる沈線文があるもの。5、7、8の原体はへら状工具である。6は胴部下半に近い部位とみられ、先端がササラ状になったやや厚みのある原体を使用している。

2類 羽状縄文が施されるもの(9、13)

9は調査区北端のC-22-b区のIV層からまとまって出土した(図版14-1・2)。やや離れた地点のIII層から出土した破片も接合している。全体の4分の3程が残存する。底面は打ち欠かれたように円く欠損しているが、わずかに上げ底となる可能性があり、かすかに縄文が観察される。平縁で、底部付近でくびれ、胴部でほんのわずかに膨らみを持って立ち上がる器形である。内面から口唇上にかけてはナデ調整後、磨かれ光沢がある。口唇の作り出しが明瞭で、平滑になっている部分や、粘土がつまみ出され口唇外側に張り出す部分もある。RLRの原体による斜行縄文を器面全体に施しているが、口縁部から胴上半部では縄文を磨り消し結束羽状縄文を施している。その下位には結束部と右傾の縄文だけ施文されるところがある。複節の縄文は重複施文されるところも見られ、また部分的に

ナデ調整が加えられ、磨り消されているものも多い。内面も底部までナデ調整されているが凹凸がある。13は口唇断面が尖り気味で内面から口唇直下までを丁寧に調整している。LRL原体を複方向に施し羽状縄文の効果をみせている。胎土に砂粒が多い。

3類 縄文が施されるもの (10~12、14~56)

出土した破片の多くが、本類で胴部の破片である。全体の様相を知りえる資料は多くない。器形のわかるものでは2類と共通し、底部からバケツ状に直線的に立ち上がるもので、口径に比べ径が比較的小さい平底のものと尖底のものがある。平底のものにはわずかに上げ底となるものがあり、底面に縄文が施文されるものがみられる。口縁は平縁のものとして4か所に緩やかな波頂部をもつものがある。口縁部は内面から口唇上、さらに表面まで丁寧にナデ調整する特徴があり、口縁部がわずかに外反する傾向がある。口縁部、底部は出土した全ての資料を掲載している。

縄文には単節と複節がある。斜行縄文のもので重複施文されているものもある。破片資料について観察したところ、複節のものが70点ほどあった。復元土器の破片は点数に含めていないが、個体数を推測すると、複節の占める割合は比較的高いようである。また概観ではあるが単節ではLR、複節はLRLが多い。縄文施文後、器面をナデ調整する傾向が見られ、文様が磨り消されているものが多い。1類、2類同様、胎土に繊維が混入する。いわゆる「スサ状」のものが混入し抜け落ちた痕跡のあるものも多い。ほかに小砂利の混入するものもある。繊維の混入の割合が特に高いものでは表裏に剥がれているものがある。また撚り紐が混入する例もある。

復元土器、口縁部破片、器形のわかる胴部片、胴部、底部の順に記載する。

10はD-22-d区Ⅲ層2回目の調査で出土した(図版13-8)。周辺部からはたき石、玄武岩・頁岩のフレイクが比較的多く出土している。胴半ばから底部までの破片は5つの部分に接合された。このうち部位の推定できる2つの大きな破片を、器形を想定して復元したものである。口縁部は無い。底面はごく一部が残っているが、やや上げ底で縄文が施されている。器厚は12mm前後と厚みがあり、器面には太いRL原体による斜行縄文が施されているが、部分的にナデ調整されている。

11は細かく割れた破片が相当量あったが、復元できたのは口縁部から胴半ばにかけての部位の2分の1程である。大きさは12と比べひとまわり程小さい。口縁部はほぼ全周し、4か所に緩やかな波頂部を持つものである。底部は無い。太いRLRの原体による斜行縄文が、全面に施されているのであろう。器面の剥落が著しい。

12a~12cは11に近接したG-22-b区から出土したもので、風倒木の攪乱に伴っていた。口縁部の破片(12a・b)と胴部~底部(12c)の破片は接合しない。口径を割り出したところ図V-3-9とほぼ同程度と推測されることから、図上で器高、器形を復元した。胴下半~底部付近は14mm~16mmと厚手で口縁部に向かってやや薄くなる。平縁ではあるが、不規則に波打つ部分がある。口唇部の調整が顕著で、わずかに上げ底になり底面にも施文がある。LRL原体による縄文がほぼ全面に施文されているが底部付近ではほとんど磨り消されている。縄文原体が異なることを除けば図V-4-11と焼成、色調等は共通する。

14~17は口縁部の破片。14a・bは平縁のもの。RLRの原体による縄文である。11や12に類する器形になるのであろう。15は小型のもので口唇断面が尖り気味である。17は口唇断面が角形で内面にも施文がある。

18~23は破片の湾曲の度合いから胴部下半~底部にかけての部位と推測され、器形を復元したものである。18~21は単節、22、23a~cは複節の縄文が施されている。18は比較的太い原体による縄文の施されたもので、尖底になる可能性がある。19~21は小型のもので、細い原体による単節の縄文が

施されており焼成、砂粒を含む胎土が共通する。19は小さな平底のもの。20、21も類する器形であろう。22はL R L原体による複節のもの。23 a～cはG-19-c区のIV層2回目の調査でまとも出土した。破片は多数あったが大半のものは表面が剥落しており、辛うじて胴部の器形を復元することができた。比較的薄手のもので、L R L原体による縄文が施されている。胎土に混入する繊維の量が著しい。内面は指頭で調整しているため凹凸が著しい。

24～47、56 a～cは胴部の破片。器厚は10mmを超える厚手のもの比較的薄手となるものがある。24～32、56はL R 原体、33～36はR L 原体による斜行縄文が施されている。24～29・33は比較的厚手である。30、31は器形の復元できた23 a・bの破片に混在していた。32は黒褐色を呈し、器面がよく磨かれている。36は0段多条の原体である。

56 a～56 cはD・E-21区周辺のⅢ層1回目出土した(図版13-4)。厚さが15mm～18mm前後ある胴部の破片。湾曲の度合いから大型の土器で尖底あるいは丸底に近い器形となる可能性がある。胎土には繊維とともに径4、5mmほどの小砂利が混じる。器面にはL R 原体による縄文を施した後、ナデ調整しているため条がほとんど磨り消されている。色調は赤褐色を呈し、内面の調整も良い。

37～46は複節の縄文のもの。37～42・46はL R L 原体、43～44はR L R 原体である。37はほかの資料と比較して繊維の混入が少ない。41は0段多条の原体である。43は1類:図V-1-1に施文、焼成、器面の調整がよく似る。45は単節の縄文を重ねているようにみえる。46は細い原体による綾絡文が複数重ねられている。綾絡文のある唯一の資料である。47は表面がほとんど剥落し文様は定かたは無いが、胎土に撚り紐(L 原体)が多量に混入されているのが観察できる(図版21-3)。

48～55は底部および底部付近の破片。48、50は尖底、47、51が尖底の可能性ある。48は施文後部分的に磨り消している。49、54、55は平底のもの。49はわずかに底面に丸みがあり縄文が疎らに施文されている。54の底部形態は図V-3-9に類する。

1類、2類は沈線文、押し文、刺突文、羽状縄文を特徴とする道南の春日町式に相当する資料とみなされるものである。同様に3類:縄文の施されたものは口縁部の特徴的な作り出し、施文後の器面調整、内面調整、胎土は1類、2類に共通することから、関連する一群の土器群と考えられる。

Ⅱ群b類(図V-9-57～69)

Ⅱ層から15点とⅢ層から58点のあわせて73点出土した。出土地点はE-12・13区周辺とB-10区で比較的まともになっているが、Ⅱ群a類の分布域とはほとんど重ならない。口縁部、底部の破片はすべて掲載した。全体の器形、文様構成の明らかなものは無いが、少なくとも12個体が確認できた。いずれも胎土に繊維が混入し内面が平滑に調整されている。

57～65は口縁部および、口縁部文様帯が認められるもの。57は口唇の断面は尖り気味で口縁が外反する器形のもの。比較的薄手で小型である。口縁部文様帯の上下には撚りの異なる2条一組の縄線が押捺されている。文様帯には結束羽状縄文が施されるが原体を逆にすることで菱形を構成する文様となっている。58～64は口縁部の狭い無文帯に縄線による文様がある。58～63は2条一組の縄による縄線文が複数めぐるもので、60、62、63の原体は2段の縄である。58、59は撚りの異なる2条一組の縄線文が4条押捺されている。胴部との境には結束羽状縄文が重ねられ、竹管状工具による刺突文が加えられている。60 a・bはE-12区Ⅲ層3回目の調査で出土したもので、破片は比較的多くあったが器形の復元はできなかった(図版14-6)。平縁でやや上げ底気味、器高20～25cm前後のものと推定される。胴部は自縄自巻的な縄文で、文様帯の境に羽状縄文が、口唇直下のごく狭い範囲にも施文がある。61は波状口縁のもので、波頂部では縦位の施文がある。62の胴部は撚りの異なる縄を並列に軸に巻いた捻糸文で、文様帯との境には0段と1段の縄の結束部の回転文がつけられている。63はやや

外反する器形と見られる。64、65は口縁部文様帯に斜位の文様がある。64は比較的厚手のもの。文様帯の境をわずかに肥厚させ、この部分に縄線文が2条つけられている。胴部には多軸絡条体の回転文が施されている。

66～69は胴部の破片。66～68には燃糸文が施されている。66は結束部の回転文を重ねている。68の絡条体の原体は撚りの異なる縄を並列に巻いたものである。69は自縄自巻の縄文が施されている。

これらは円筒下層c式の新しい段階に相当するものとみなされる。

縄文時代中期の土器

Ⅲ群a類 (図V-10-70～75)

Ⅱ層から32点、Ⅲ層から56点、攪乱層3点あわせて91点が出土した。掲載した以外の破片は小片で、胎土、焼成、縄文の様相等から本類と判断したものである。分布は14ラインよりも北西側に比較的多く、スポット的に検出される。10個体ほどが確認できた。Ⅱ群a類土器の分布域とはほとんど重ならない。

70、71は近接するG-6-b区、G-7-b区のⅢ層1回目の調査で出土した(図版14-7・8)。1は倒立した状態で検出されたものである。遺構の存在を予想し半截して断面を観察したが明瞭な掘り込みは認められなかった。わずかに欠損部はあるがほぼ完全な形に復元できた。上げ底で、胴部下半でやや膨らみ、頸部がくびれる器形である。円筒上層式の器形としては異質な感がするものである。口縁部は幅広く粘土を折り返して厚みを持たせている。口唇は丸みを帯びた角形に調整され、平縁ではあるが不規則に波打つ部分もある。0段多条のLR原体による斜行縄文が全面に施されているが底部付近では磨り消されている。施文後は指頭で調整しているため器面に凹凸がある。内面は底面まで丁寧にケズリ、ナデ調整がなされている。71は斜行縄文に結節の回転を加えている。これらは焼成が良好で胎土に小砂利が混入する。器面の調整は非常に丁寧に、明褐色の色調および大きさが共通する。72は破片が比較的広範囲から出土している。口径は約20cm、器高は1と較べ幾分大きいものであろう。口唇断面は切り出し形で、口縁部が外反する器形である。4か所に棒状の突起部を有するものであろう。突起上は指頭で押されくぼみがつけられている。突起部や口唇上にも施文があり、器面では施文後ナデ調整されている。73はごく浅く斜行縄文が施され、口唇上は棒状工具による刻みが認められる。74、75は地の縄文を施文後、素文の細い貼付帯がつけられている。75は複節の縄文である。

これらはいずれもサイベ沢Ⅶ式である。

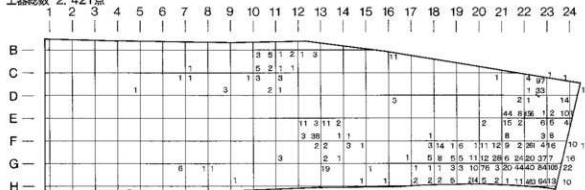
Ⅲ群b類 (図V-10-76)

Ⅱ層から2点出土した。焼成や胎土がⅡ群土器とは異なり、繊維は混入せず、砂粒が多い。いずれも貼り付け部分と見られるものであるが、1点是小片のため掲載していない。76は貼り付けの上下に沈線を添わせている。天神山式頃の貼付帯であろうか。

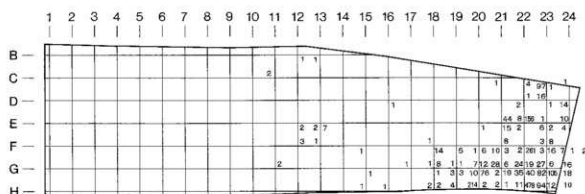
土製品 (図V-10-77・78)

77は自縄自巻の縄文が施されているⅡ群b類土器の破片を素材にした円盤状土製品である。周縁を打ち欠きにより成形している。78は斜行縄文が施されたⅡ群a類の胴部破片を素材にした土器片錘。長軸の一端に打ち欠きによる抉り部分がある。(遠藤香澄)

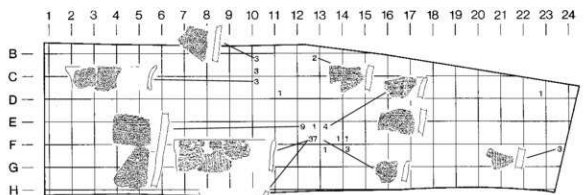
土器総数 2,421点



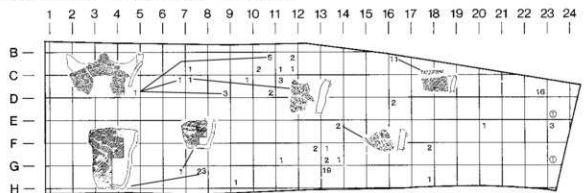
Ⅱ群a類土器 2,148点



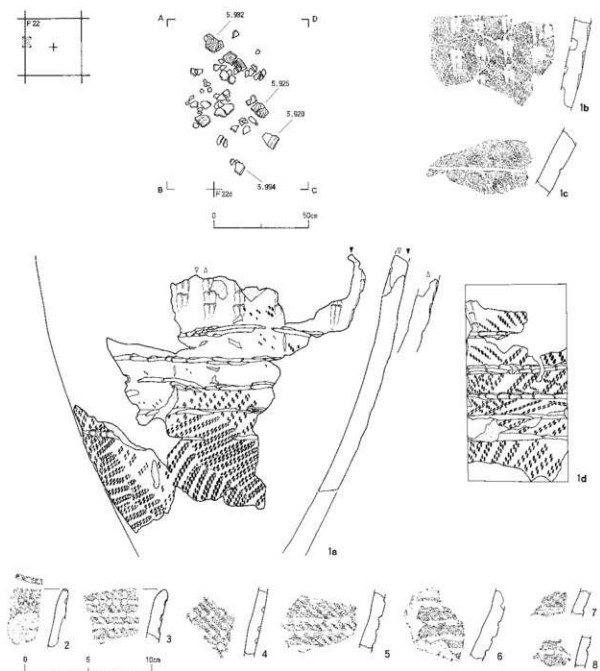
Ⅱ群b類土器 73点



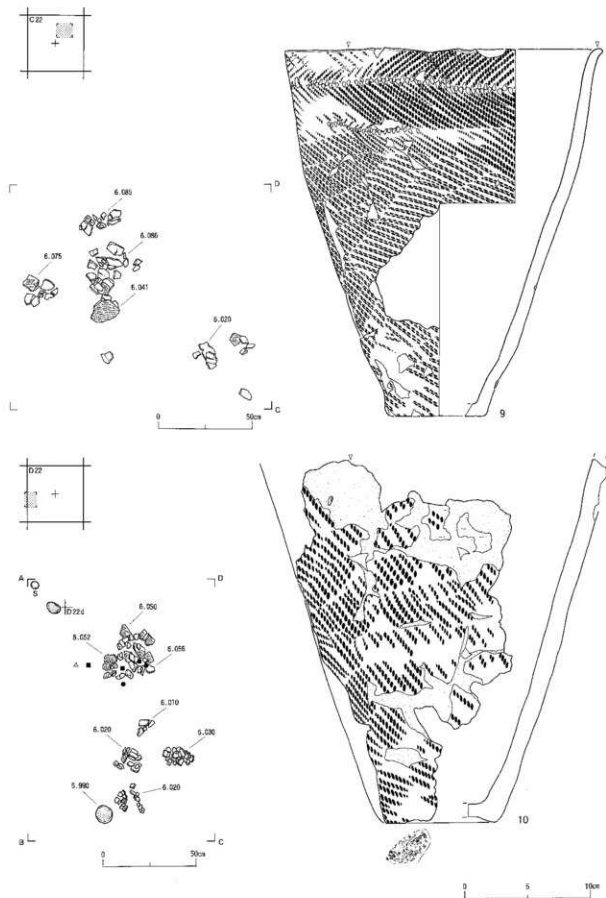
Ⅲ群a類土器 91点・Ⅲ群b類土器 2点 ○印:Ⅲ群b類



図V-1 土器の分布



図V-2 II群a類土器(1)と出土状況



図V-3 II群a類土器(2)と出土状況

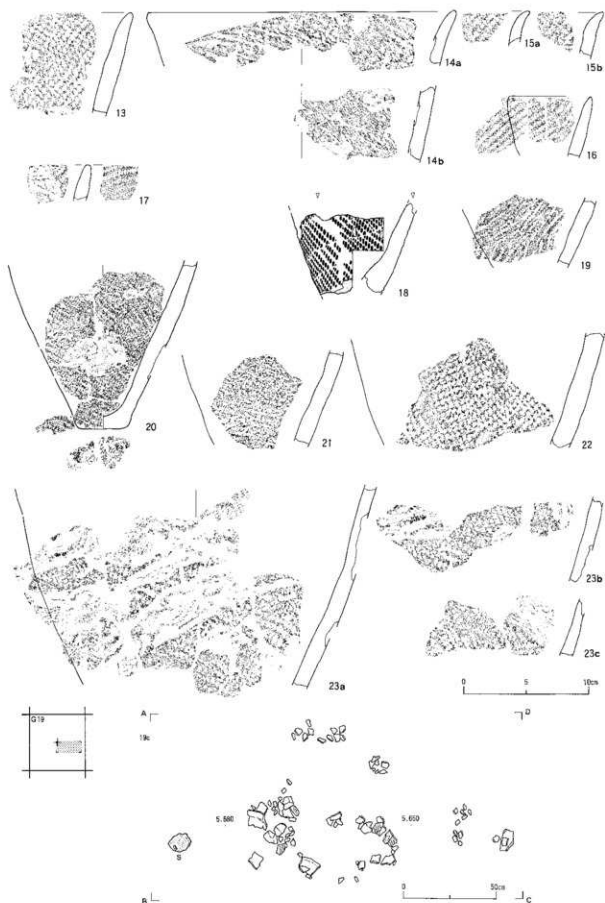
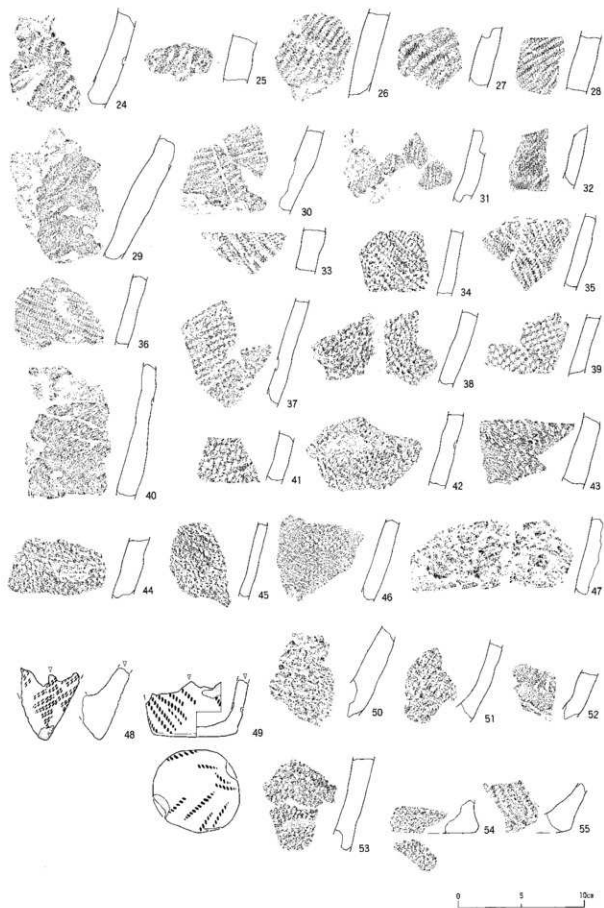
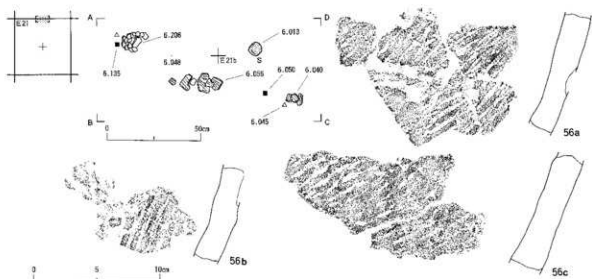


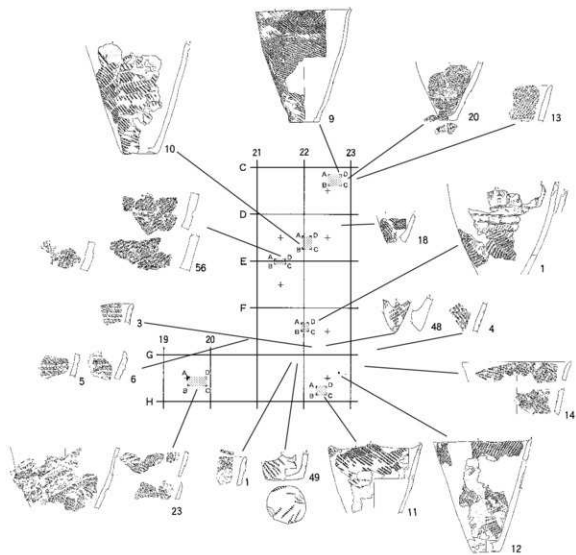
図 V-5 II群 a 類土器(4)と出土状況



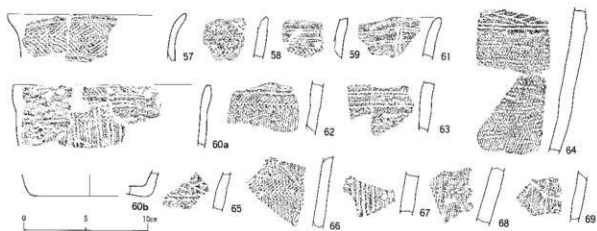
図V-6 II群a類土器(5)



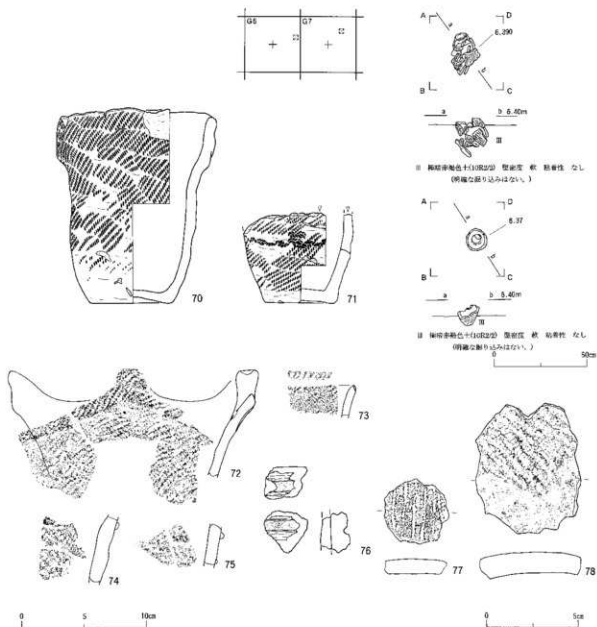
図V-7 II群a類土器(6)と出土状況



図V-8 II群a類土器の分布



図V-9 II群b類土器



図V-10 III群a類・b類土器と出土状況、土製品

2 石器等

包含層から出土した石器等の総数は15,634点である。これらの中には表面採集資料等も含まれている。最も多いものは石器製作に関連する剥片（フレイク・チップ）である。出土した剥片の内訳は頁岩の剥片が12,802点で82%を占め、次いで黒曜石の剥片が999点（6%）、玄武岩の剥片380点（2%）となっている。剥片を除いた器種別の構成ではたつき石が最も多く199点出土し、次にスクレイパーが83点、石核61点、石鏃58点、台石35点であった。剥片の集中域にはたつき石や台石が伴う。たつき石の多くは敲打痕の軽微なものが多く、台石も1kgに満たないものから4kg前後のものがあり、比較的小型の円礫を使用している。また、石鏃、つまみ付ナイフ、石槍、スクレイパー、石錐などのいわゆる剥片を素材にした定形石器の出土は遺構出土のものを含めても1%を数えるに過ぎない。これらのことからこの場所が石器製作等に利用されていたことは明らかで、ここで製作された石器の多くが持ち出され、他の場所で使用されていた事が想定される。

出土した石器のほとんどが調査区中央から北東側に集中し、剥片集中（FC）や集石（S）の周囲のⅢ層からⅣ層にかけて出土している。石器に使用されている主な石材は、頁岩、黒曜石、玄武岩、安山岩等がある。このうち黒曜石について肉眼による観察では、“赤井川産”である可能性が高い。本遺跡のある共和町の東北部には、北海道の黒曜石四大産地の一つとして古くから知られている赤井川村がある。赤井川産の黒曜石には、径0.5～1.5mmの流紋岩の球類や燐灰石の結晶や気孔が多く観察される。これらは入り交じってほぼ平行に配列する流理構造を有する点に特徴がある。今回の調査で出土した黒曜石はほぼこれらの特徴をもち合わせていることから、赤井川産であることが推測される。黒曜石以外の石器の産地については不明ではあるが、第2章の図Ⅱ-6・7に共和町の周辺の地質を示し、地質の概略を記したので参照されたい。

石鏃（図Ⅴ-16-1～14、図版22、表8）

14点掲載した。1～11は三角形を呈する石鏃である。1はほぼ正三角形を呈し、基部にV字に近い深い抉りが入る。先端部はわずかに欠損している。2～7も基部の抉りが深いもので、2～4の抉りは特に深くいずれも基部の一部が欠損する。8～11は基部の抉りが浅く内湾するもの。このうち9～11は幅広でやや大型である。12・13は有茎の石鏃で、12は茎部が欠損する。13の先端部は突出し、先端部がやや内湾する。14は基部に丸みがあるもので、先端部はやや内湾ぎみに尖る。1～4・12・13が黒曜石製で他はすべて頁岩である。いずれも全体に入念な調整が施されたものが多い。

石錐（図Ⅴ-16-15～22、図版22、表8）

8点掲載した。いずれも頁岩を素材にしている。15～20は棒状でつまみ部をもたないものである。このタイプのものは丁寧に作られているものが多い。これらはいずれもⅢ層の低位あるいはⅣ層の最下層に近いところから出土している。18は機能部の先端がわずかに欠損している。19・20は特に入念な作り込みがされており、20の先端部から側縁部にかけては回転による摩擦が認められる。21・22は素材となる剥片を大きく変形することなく刺突部を作り出したもの。21は剥片の先端部にわずかな調整を加えることで刺突部作出している。22は縦長剥片を素材にし、つまみ部分にも周縁加工を施して刃部を作出し、石錐とスクレイパーの2つの機能を併せ持つ。

つまみ付ナイフ（図Ⅴ-16-23～28、図版22、表8）

6点掲載した。いずれも頁岩を素材にし、背面からの加工が顕著な作りのものである。23は背面の二次加工が全体に施され、右側縁部がほぼ直線状の刃部をもつのにに対し、左側縁部は弧状に刃部が作出されている。24は小型で素材の先端部が厚く、これを利用し高角度で刃部が作られる。25は背面右側縁部に連続する剥離を加え直線的な刃部が作られるのにに対し、左側縁部の調整は比較的軽微なもの

である。26は背面左側縁部が大きく外湾し、右側縁は急角度で刃部が作出される。27は細身で弓形を呈し、背面からの調整は入念に施される。28は二次加工が周縁部に施されるもので、つまみ部は欠損する。

スクレイパー (図V-17-29~43・18-44・45、図版22、表V-4)

15点掲載した。石材はすべて頁岩。剥片を素材にして側縁に連続した調整剥離面が加えられたものをスクレイパーとして扱った。29~32は石籠と呼ばれる可能性があるもの。30~32は頭部が狭く尖りぎみで、刃部にかけて幅がある。33は弧状で、右側縁が外湾し、左側縁部は急角度の調整が加えられる。34は縦長の剥片を素材にし、背面周縁には連続する二次加工が施される。35~41は背面からの加工が主体で左側側縁部に高角度で刃部が作出される特徴的な形態を示すもの。右側縁と腹面からの調整はほぼ皆無である。42・43はエンドスクレイパーで、ともに剥片素材の形状を生かし先端部に急角度で調整された刃部を持つ。44・45はラウンドスクレイパーである。

石核 (図V-18-46~48、図版22、表8)

3点掲載した。46・47は頁岩で原石面を残さない。48は粗粒な玄武岩の石核で、原石面を残す。

石斧 (図V-18-49~51、図版22、表8)

3点掲載した。49の石材は片岩で基部を残し刃部側が欠損する。50は全体に入念な研磨が施された石のみで、基部が欠損し刃部もわずかに欠けている。石材は緑色泥岩。51も緑色泥岩を素材にし全体に入念な研磨が施されている。基部が欠損し、刃部は両刃である。

たたき石 (図V-19-52~60、図版23、表8)

9点掲載した。本遺跡で最も出土量の多い石器で扁平な円礫を素材にしたものが多く、棒状のタイプは少ない。敲打痕は軽微なものが多いがここでは使用痕の顕著なものを掲載している。石材はすべて安山岩である。52は扁平な円礫を素材にし、右側縁に敲打痕が集中している。背面の平坦面にはU字状の擦痕が1ヵ所認められる。53は周縁に敲打痕が集中し、ほぼ全周している。平坦部と側縁の境にはU字状の擦痕が数か所認められる。54は側縁の一部に敲打痕が集中する。55は大型で先端部に軽微な敲打痕が認められる。56は幅の広い方の端部に敲打痕が集中する。57も扁平な円礫の周縁に敲打痕が巡って全周し、擦り面もある。58は小型の円礫が素材で、周縁部に顕著な敲打痕が認められる。59は棒状に近い円礫を素材にし、両先端部と両側面に敲打痕がある。60は棒状で、長軸の上位に軽微な敲打痕が1ヵ所認められる。

すり石 (図V-19-61~63、図版23、表8)

3点掲載した。石材は安山岩である。たたき石と比較して出土点数は少ない。61・62・63は断面形がほぼ三角形を呈する。61・62は小型であるが擦痕は顕著である。63の擦面も顕著で擦り面の幅は広い。

北海道式石冠 (図V-19-64、図版23、表8)

今回の調査では1点しか出土していない。石質は安山岩である。64の擦り面は擦痕が顕著で表面は滑らかである。

石錘 (図V-20-65~68、図版23、表8)

4点掲載した。石材はすべて安山岩で、65~68は長軸と短軸の両端にそれぞれ打ち欠きがある。

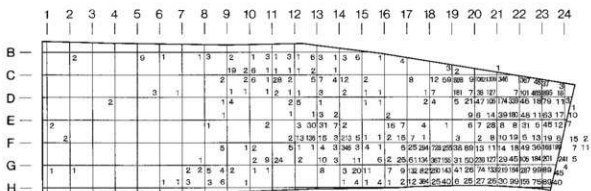
砥石 (図V-20-69~71、図版24、表8)

3点掲載した。69の石材は安山岩である。研磨面は平滑で使い込まれた擦面を有する。表面と側面がほぼ直角に使用されていることと、出土層位がⅡ層であること等から縄文時代以降の金属製品に使われた可能性も考えられる。70・71は軽石を素材にし、複数の溝状あるいはU字状の擦痕が認められる。

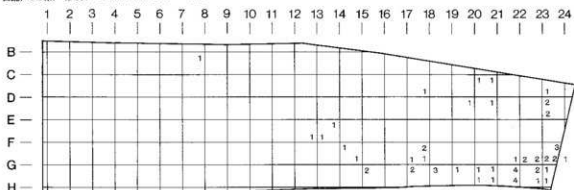
台石 (図V-20-72・73、21-74~77、図版24、表8)

6点掲載した。台石に分類されたものの中には明らかな使用痕が認められないものもあるが、形態や出土状況から台石としたものがある。73・76・77は平滑な面があり、本遺跡では大型のものである。(笠原)

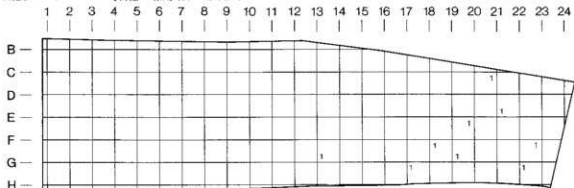
石器総数 15,634点



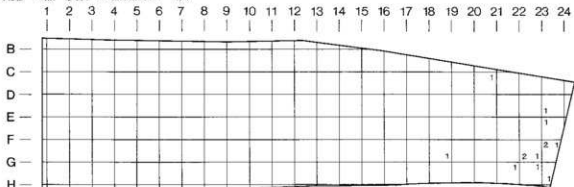
石鏃 58点 (頁岩 36点、黒曜石 22点)



石槍またはナイフ 9点 (石槍 5点、頁岩 4点、黒曜石 1点)、ナイフ 4点(頁岩)

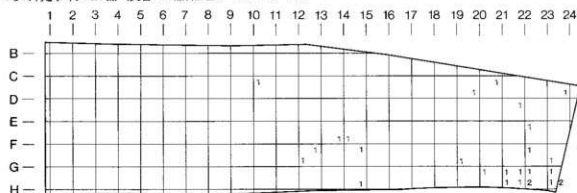


石鏃 13点 (頁岩 12点、黒曜石 1点)



図V-11 包含層出土石器分布図(1)

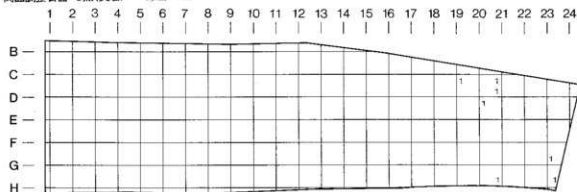
つまみ付きナイフ 27点 (頁岩 25点、黒曜石 1点、不明 1点)



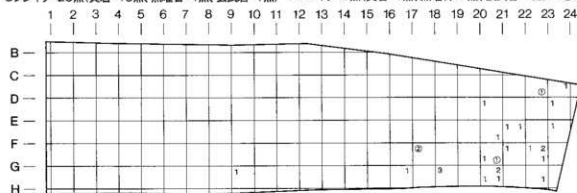
スクレイパー 83点 (頁岩 74点、黒曜石 9点)



両面調整石器 6点(頁岩)・礫器 1点

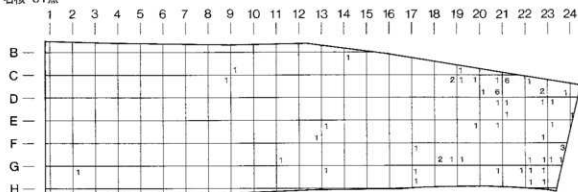


Uフレイク 23点(頁岩 18点、黒曜石 4点、玄武岩 1点) Rフレイク 5点(頁岩 1点、黒曜石 3点、玄武岩 1点) …○印

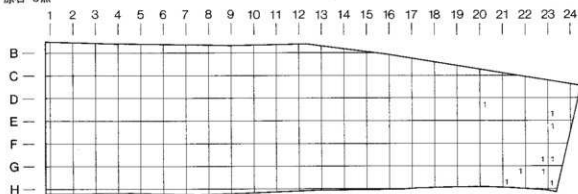


図V-12 包含層出土石器分布図(2)

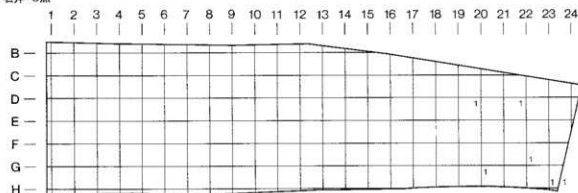
石核 61点



原石 9点



石斧 6点



たたき石 199点

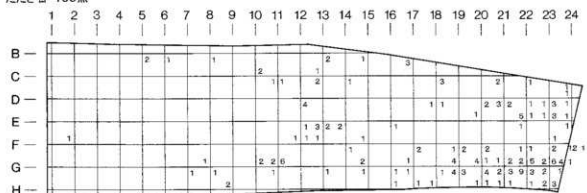
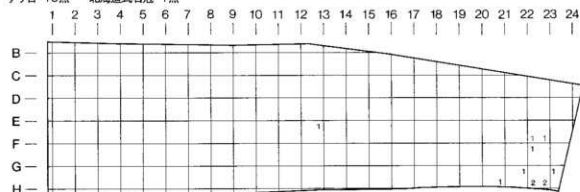
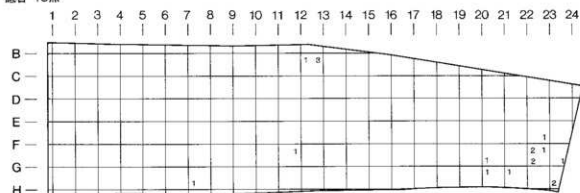


図 V-13 包含層出土石器分布図(3)

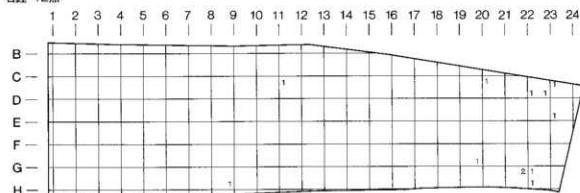
すり石 10点・北海道式石冠 1点



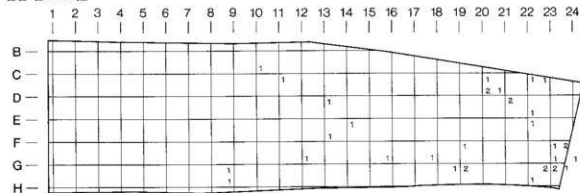
砥石 18点



石鏝 12点

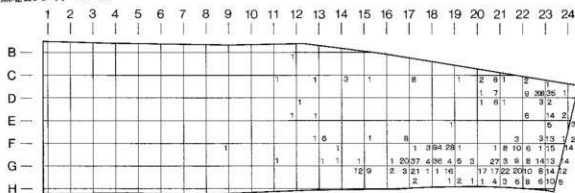


台石・石皿 35点

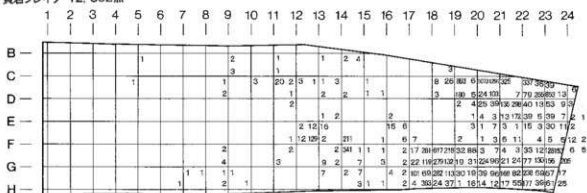


図V-14 包含層出土石器分布図(4)

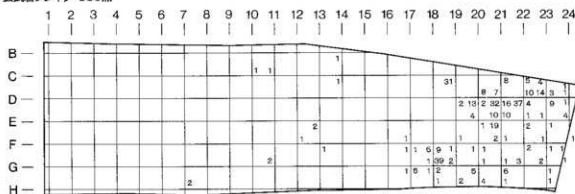
黒曜石フレイク 999点



頁岩フレイク 12,802点



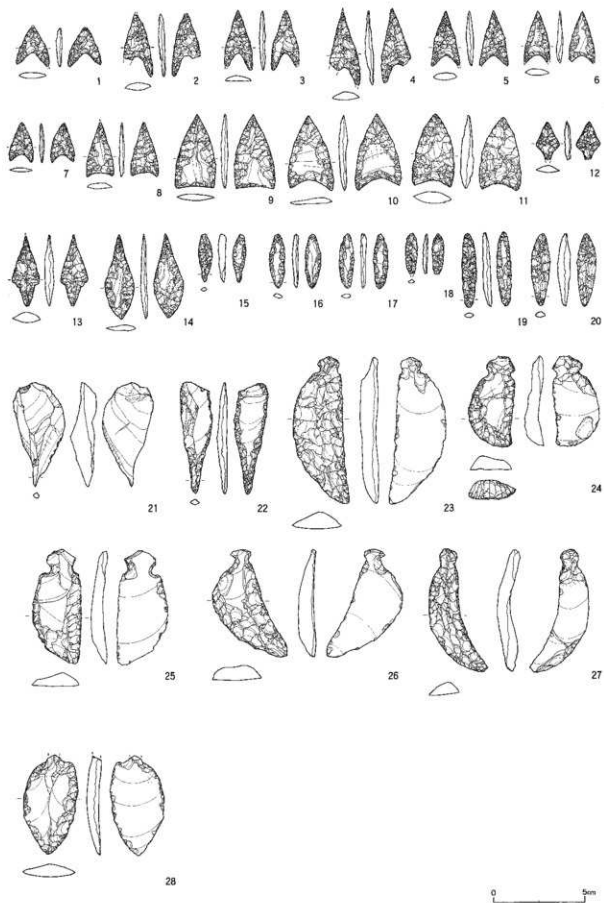
玄武岩フレイク 380点



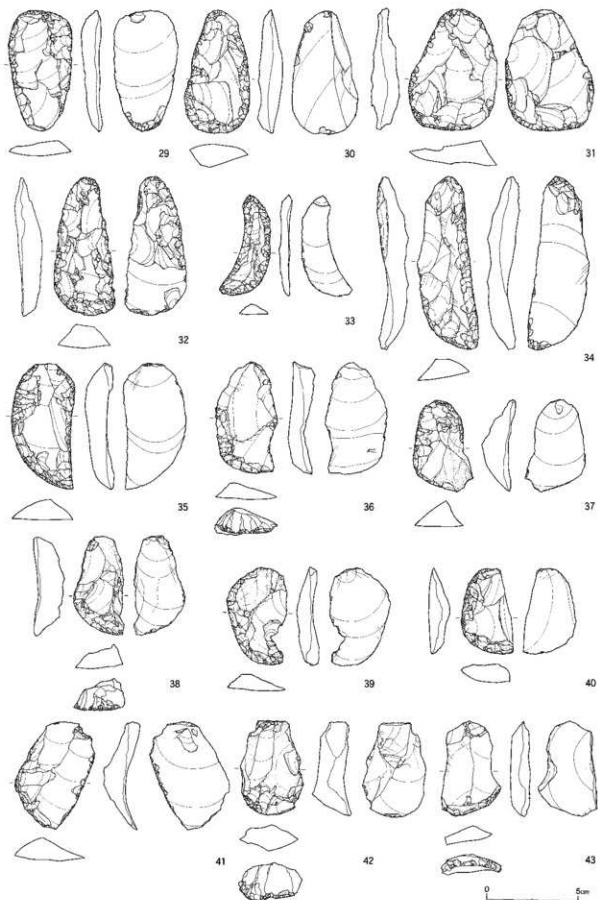
礫・礫片 加工痕のある礫 866点(頁岩 16点、黒曜石 2点、玄武岩 763点)



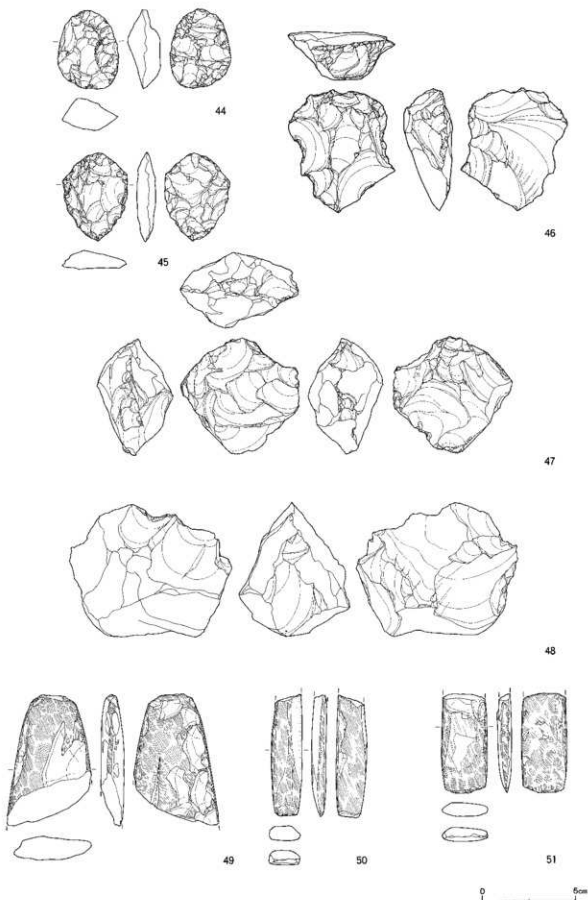
図V-15 包含層出土石器分布図(5)



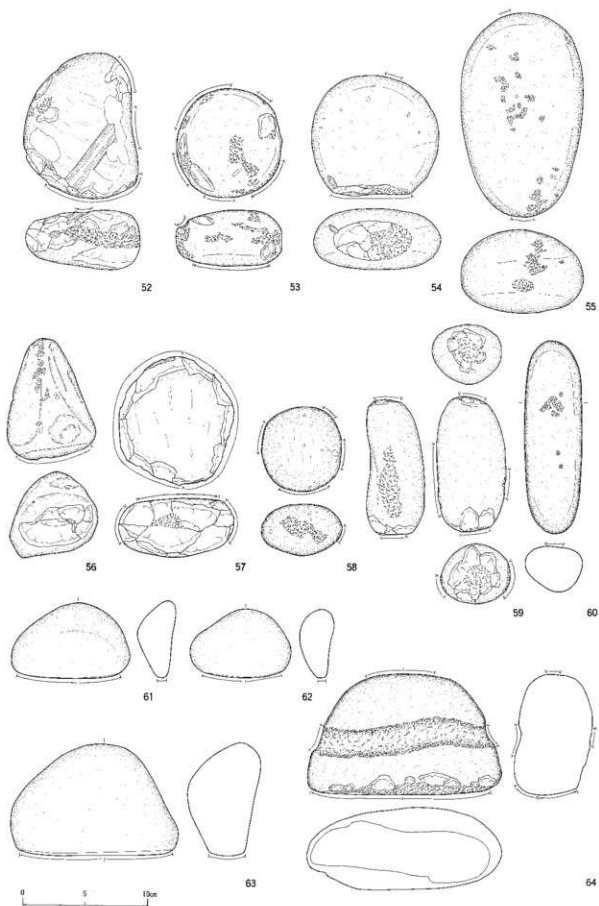
図V-16 包含層出土の石器(1)



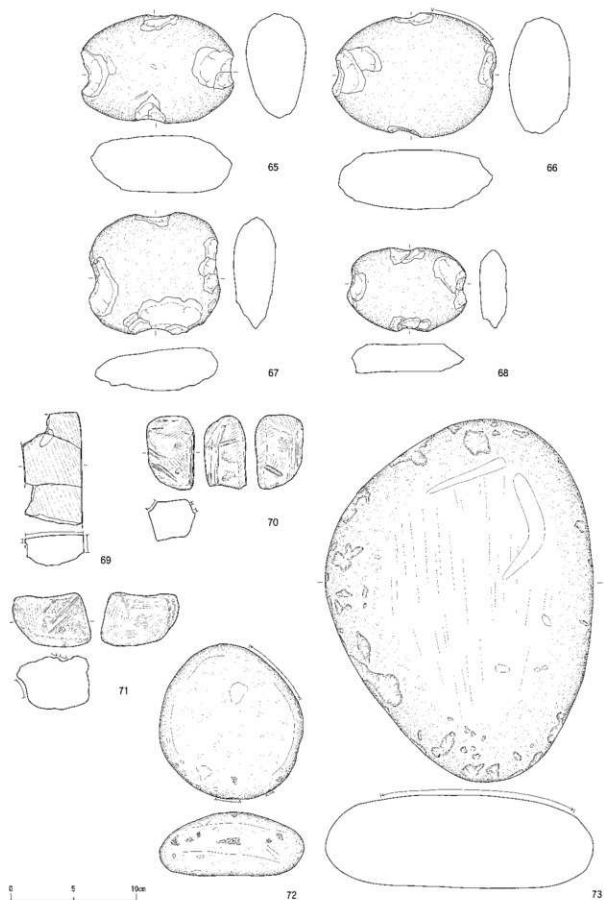
図V-17 包含層出土の石器(2)



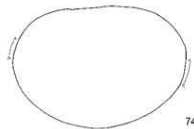
図V-18 包含層出土の石器(3)



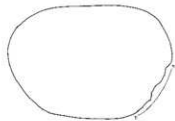
図V-19 包含層出土の石器(4)



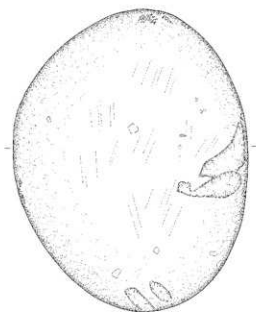
図V-20 包含層出土の石器(5)



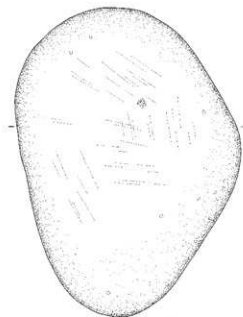
74



75



76



77



図V-21 包含層出土の石器(6)

VI 自然科学的手法による分析結果

1. 放射性炭素年代測定

㈱バレオ・ラボAMS年代測定グループ*

1. はじめに

リヤムナイ3遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（バレオ・ラボ、コンパクトAMS；NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表VI-2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代を、図VI-1～4に暦年代校正結果をそれぞれ示す。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年代校正の詳細は以下の通りである。

暦年代校正

暦年代校正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年）を校正することである。

¹⁴C年代の暦年代校正にはOxCal3.9を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代校正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代校正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

* バレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtadize・Ineza Jorjoliani

参考文献

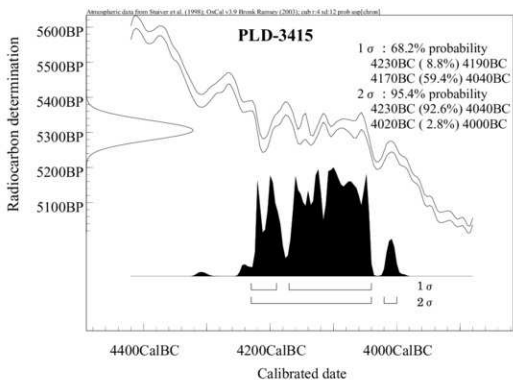
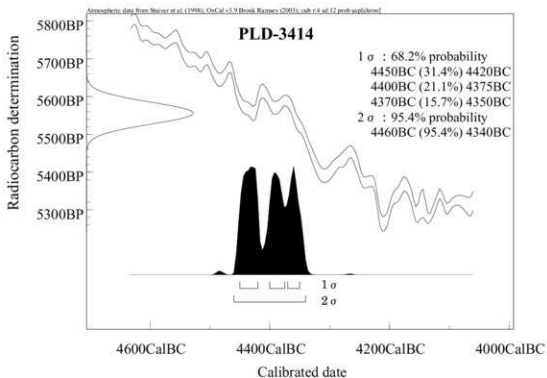
- ・中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代, p.3-20
- ・Stuiver M., P.J. Reimer, E. Bard, J.W. Beck, G.S. Burr, K.A. Hughen, B. Kromer, G. McCormac, J. van der Plicht and M. Spurk 1998 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24000-0 cal BP *Radiocarbon* 40 (3) 1041-1083
- ・Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program *Radiocarbon* 37 (2) 425-430
- ・Bronk Ramsey C., 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

表VI-1 測定試料及び処理

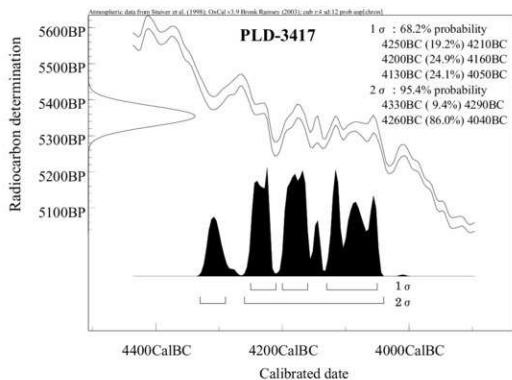
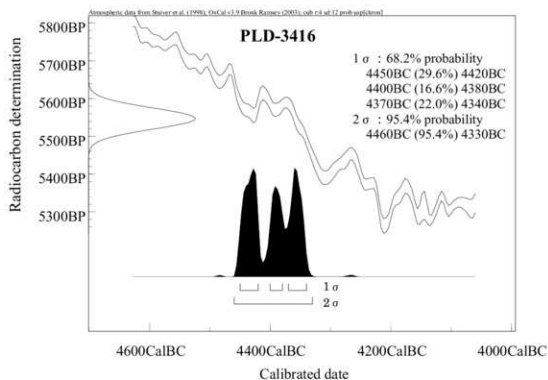
試料番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
№1	PLD-3414	地点: F22d 層位: IV層3 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: 最外以外年輪 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№2	PLD-3415	地点: F23d 層位: III層4 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№3	PLD-3416	地点: F22d 層位: IV層3 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№4	PLD-3417	地点: F22d 層位: IV層3 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№5	PLD-3418	地点: F22d 層位: IV層3 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.2N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№6	PLD-3419	地点: G22d 層位: III層2 回目	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№7	PLD-3420	地点: G22d 層位: IV層	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH
№8	PLD-3421	地点: G22d 層位: IV層	試料の種類: 炭化物・材 試料の性状: クルミ 状態: dry カビ: 無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo: NEC製コンパクトAMS・1.5SDH

表VI-2 放射性炭素年代測定及び暦年代校正の結果

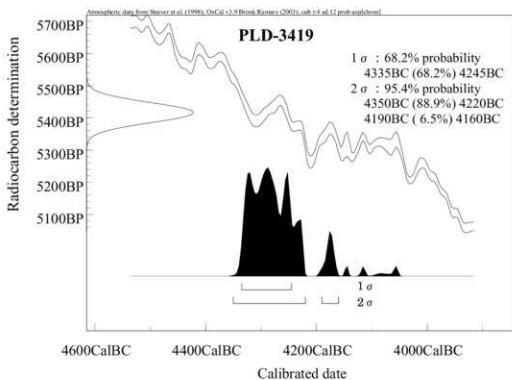
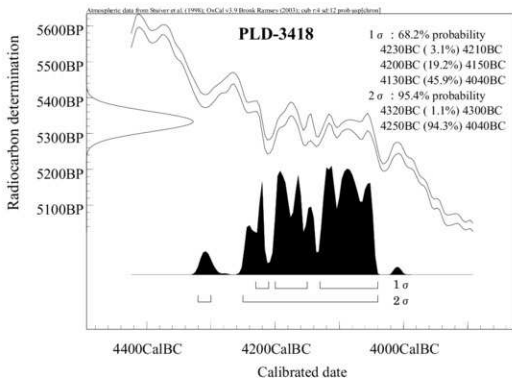
試料 番号	測定番号	年代値 (yrBP \pm 1 σ ; 同位体補正無)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP \pm 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
Na 1	PLD-3414	5540 \pm 30	-23.9	5555 \pm 30	4450BC(31.4%)4220BC, 4400BC(21.1%)4375BC, 4370BC(15.7%)4350BC	4460BC(95.4%)4340BC
Na 2	PLD-3415	5330 \pm 30	-26.4	5305 \pm 30	4230BC(8.8%)4190BC, 4170BC(59.4%)4040BC	4230BC(92.6%)4040BC, 4020BC(2.8%)4000BC
Na 3	PLD-3416	5505 \pm 30	-22.4	5545 \pm 30	4450BC(29.6%)4220BC, 4400BC(16.6%)4380BC, 4370BC(22.0%)4340BC	4460BC(95.4%)4330BC
Na 4	PLD-3417	5370 \pm 30	-26.1	5355 \pm 30	4250BC(19.2%)4210BC, 4200BC(24.9%)4160BC, 4130BC(24.1%)4050BC	4330BC(9.4%)4290BC, 4260BC(86.0%)4040BC
Na 5	PLD-3418	5355 \pm 30	-26.3	5335 \pm 30	4230BC(3.1%)4210BC, 4200BC(19.2%)4150BC, 4130BC(45.9%)4040BC	4320BC(1.1%)4300BC, 4250BC(94.3%)4040BC
Na 6	PLD-3419	5465 \pm 30	-28.1	5415 \pm 30	4335BC(68.2%)4245BC	4350BC(88.9%)4220BC, 4190BC(6.5%)4160BC
Na 7	PLD-3420	5330 \pm 30	-24.1	5345 \pm 30	4250BC(11.2%)4210BC, 4200BC(22.9%)4150BC, 4130BC(34.1%)4050BC	4320BC(5.2%)4290BC, 4260BC(90.2%)4040BC
Na 8	PLD-3421	5365 \pm 30	-26.4	5340 \pm 30	4250BC(7.6%)4210BC, 4200BC(23.5%)4150BC, 4130BC(37.1%)4040BC	4320BC(4.6%)4290BC, 4260BC(90.8%)4040BC



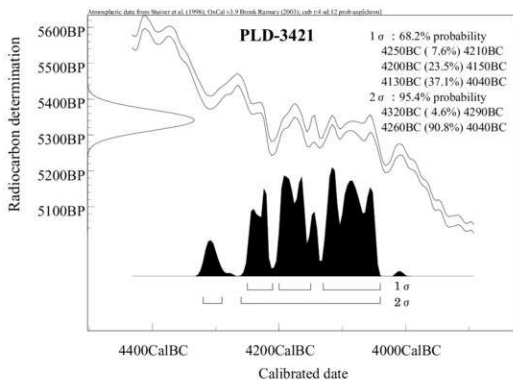
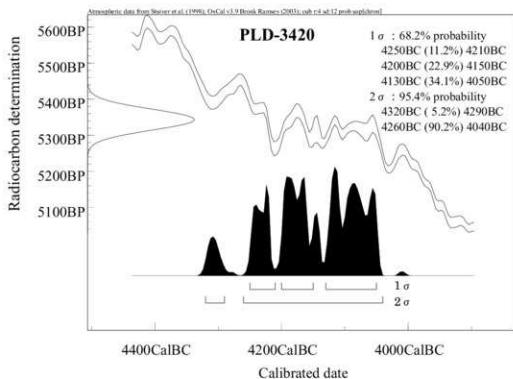
圖VI-1 曆年代較正結果(1)



図VI-2 暦年代較正結果(2)



圖VI-3 曆年代較正結果(3)



図VI-4 暦年代較正結果(4)

Ⅶ 小 括

本遺跡から検出された遺構は集石（S）6カ所、焼土（F）4カ所、剥片集中（フレイク・チップ集中：FC）8カ所である。検出した遺構の多くが調査区東側に位置している。集石（S）はS-1とS-5を除き、他はすべて20ラインより東側から出土している（IV章-1）。S-1は調査区南端の標高約6mで検出した石斧の集中で、スクレイパーも1点出土した。出土層位などから縄文時代前期前半頃と思われる。S-5は調査区中央付近のIV層1回目で検出したが、標高が他と比較して高いことや周辺の遺物から判断して縄文時代中期前半頃とした。他の集石はすべて縄文時代前期前半のものと考えられる。

焼土F-1・2・3は調査区中央より西側のⅢ層上面で検出され、層位や周辺から出土した遺物から判断して縄文時代中期頃の所産である。F-4は調査区東端のIV層下位で検出した。周辺には微細な骨片や炭化物が検出されている。このうち炭化物を放射線炭素による年代測定を行なった。その結果、5555±30年前という測定値が得られている（第VI章試料No.1）。

剥片集中（FC）はFC-5を除いてすべて14ラインより北東側で検出した。中でもFC-1・7は5m程の範囲から出土した頁岩主体の剥片集中である（IV章-3）。剥片集中の石材ごとの内訳は頁岩が最も多く10,164点、次いで黒曜石が3,447点、玄武岩688点である。これに包含層出土の剥片を合わせると、頁岩22,966点、黒曜石4,446点、玄武岩1,068点である。このうち黒曜石は肉眼観察の結果、ほぼ100%赤井川産と推測できる（V章-2）。頁岩と玄武岩の産地は特定できないが、遺跡の周辺にはこれらの石材を包含する地質が存在する。（II章-1周辺の地質、図Ⅱ-6・7）。隣接する泊村には茅沼累層があって主に頁岩と砂岩の互層からなり、玉川周辺で特に発達し路頭も見られた。（早川和夫1962・1970）。実際に玉川を踏査した結果、頁岩や玄武岩等の類似する石材を採取する事ができた。また、玄武岩は共和町国富を流れる辰五郎川上流にも分布域がある。

土器は2,427点出土し、主にⅢ層からⅣ層にわたって出土している。このうち、約9割を占める2,148点が縄文時代前期前半のⅡ群a類土器である。この他に前期後半のⅡ群b類土器が73点、中期前半のⅢ群a類土器が91点ある。中期後半のⅢ群b類土器もわずかに出土している。これらは時期ごとに分布域が異なっている。Ⅱ群a類土器の分布は18ラインよりほぼ東側に限られ、特にF・G-19～23区に集中する。

剥片集中（FC）や集石（S）等の分布域と重なる。Ⅱ群a類土器は文様構成などから3つに分類できる。1類は沈線文や押引文、刺突文が施されるもので8個体を確認できた。これらは尖底になる可能性がある。

G-22-d区から出土したⅡ群a類土器（図V-4-11）は倒立した状態で出土し、胴部下半が土圧でつぶされ底部はない。この土器の下部から炭化クルミを採取し、放射性炭素による年代測定を行なった。その結果、5415±30年前という測定値を得ている（第VI章試料No.6）。2類は羽状縄文が施されるものでC-22-b区からまとまって出土した。3類は縄文が施されるもので破片が多く、器形を知り得るものは少ない。形のわかるものは2類に類似し、底部からやや開きぎみに直線的に立ち上がるものである。口径部と比較して小さい底部で、平底と尖底がある。1類、2類は沈線文、押引文、刺突文、羽状縄文を特徴とした道南の春日町式に相当するものである。3類も口径部の作りだしや施文後の器面調整や内面調整、胎土等から春日町式に関連する土器群と考えられる（V章-1）。

土器は遺構、包含層合わせて30,036点出土した。剥片を除くとたつき石が最も多く236点である。次いでスクレイパーが85点、石鏃が61点である。スクレイパーは素材の形状を生かし、左側に外湾する急角度の刃部を持つものや、先端部に急角度の調整が加えられたものが特徴的である。石鏃は三角形で内湾する基部をもつものが多く、道南部の春日町式を主体にした遺跡と類似した傾向を示している（笠原）。

表-1 検出遺構一覧

遺構名	遺構種類	発掘区	検出層位	規模(m)	時期
F-1	焼土	D9c	Ⅲ層上位	0.45×0.41/0.17	縄文時代中期
F-2	焼土	C6a	Ⅲ層上位	0.55×0.23/0.10	縄文時代中期
F-3	焼土	C6d	Ⅲ層上位	0.28×0.24/0.11	縄文時代中期
F-4	焼土	F22d	Ⅳ層	0.24×0.17/0.07	縄文時代前期前半
FC-1	剥片集中	C21a~d、D21a~b	Ⅲ~Ⅳ層	4.85×3.25	縄文時代前期前半
FC-2	剥片集中	D21a~d	Ⅳ層上位	2.95×1.15	縄文時代前期前半
FC-3	剥片集中	D21c	Ⅳ層上位	1.00×0.25	縄文時代前期前半
FC-4	剥片集中	G14b	Ⅲ層風倒	1.75×0.70	縄文時代前期前半
FC-5	剥片集中	E12a~d	Ⅲ層2回目	2.30×1.20	縄文時代前期前半
FC-6	剥片集中	E23b	Ⅲ層4回目	1.03×0.25	縄文時代前期前半
FC-7	剥片集中	E17c、F17b~c、E18d、F18a~d	Ⅲ層2回目 Ⅳ層2回目	5.50×4.65	縄文時代前期前半
FC-8	剥片集中	E16a~d	Ⅳ層1回目	1.55×0.50	縄文時代前期前半
S-1	集石	H1b	V層上位?	0.36×0.12	縄文時代前期前半
S-2	集石	D20b	Ⅲ層2回目	1.20×0.85	縄文時代前期前半
S-3	集石	G21b~c	Ⅳ層1回目	2.00×0.85	縄文時代前期前半
S-4	集石	C20c、D20b	Ⅳ層1回目	3.20×0.90	縄文時代前期前半
S-5	集石	E10b	Ⅳ層1回目	0.48×0.30	縄文時代中期前半
S-6	集石	G23a	Ⅳ層3回目	0.32×0.15	縄文時代前期前半

表-2 遺構出土遺物一覧

遺構名	土器	石 器										計					
		石鏃	つまみ付きナイフ	石またはナイフ	スクレイパー	石錐	石核	石斧	たつき石	台石	フレイク			礫	礫片		
											黒曜石	頁岩	玄武岩				
S-1					1				5						6		
S-2								6							6		
S-3								5							5		
S-4								14							14		
S-5								5						1	6		
S-6								1						6	7		
F-4	1										1	3		2	7		
FC-1	2		1		2	3		2	1	3	2,046	455	1	9	2,525		
FC-2					1							7	71		83		
FC-3												462			462		
FC-4						1					3310	65		6	3,382		
FC-5		3		2					1			724	2		732		
FC-6									1			1,550			1,551		
FC-7	3		1		1	2		1	3		133	4,408	160	8	4,720		
FC-8									1			899			900		
計		6	3	1	3	2	4	5	6	37	3	3447	10,164	688	24	13	14,406

表-3 集石出土石器等一覧

遺構番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	備考
S-1	石斧	1	V層上位?	(9.0)	5.2	1.5	102.8	片岩		
	石斧	2	V層上位?	(9.6)	4.6	1.5	116.1	緑色泥岩		
	石斧	3	V層上位?	10.6	4.9	1.5	119.9	片岩		
	石斧	4	V層上位?	8.1	3.8	1.3	56.5	緑色泥岩		
	石斧	5	V層上位?	8.7	4.4	1.3	69.1	緑色泥岩		
	スクレイパー	6	V層上位?	8.0	4.2	1.4	33.9	頁岩		
S-2	たつき石	1	Ⅲ層2回目	12.1	10.3	5.0	870.0	安山岩		被熱
	たつき石	3	Ⅲ層2回目	14.8	9.5	4.2	910.0	安山岩	S-2,4と接合	
	たつき石	6	Ⅲ層2回目	12.4	9.0	3.7	596.1	安山岩		未掲載 被熱
	たつき石	5	Ⅲ層2回目	13.4	9.7	5.0	920.0	安山岩		
	たつき石	2	Ⅲ層2回目	12.7	10.5	5.3	1010.0	安山岩		
	礫片	D20b,10	Ⅲ層2回目	(6.3)	(2.2)	(2.9)	(43.4)	玄武岩		被熱
	たつき石	D20b,9	Ⅲ層2回目	6.2	4.4	3.5	133.1	安山岩		
たつき石	D20b,11	Ⅲ層2回目	11.8	6.3	4.3	497.4	安山岩			

遺物番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(m)	重さ(g)	石質	接合	備考
S-3	たたき石	2	IV層1回目	11.0	10.6	4.6	750.0	安山岩		
	たたき石	5	IV層1回目	8.4	9.9	4.1	535.0	安山岩		
	石 鏝	G21b, 37	IV層1回目	10.4	12.5	3.3	550.0	安山岩	G21b, 38 (IV・1)と接合	
	たたき石	1	IV層1回目	10.9	8.2	3.7	473.0	安山岩		未掲載
	たたき石	3	IV層1回目	11.1	9.3	3.3	562.7	安山岩		未掲載
たたき石	4	IV層1回目	10.8	7.5	3.8	482.1	安山岩		未掲載	
S-4	たたき石	3	IV層1回目	14.4	9.5	5.7	990.0	安山岩	D20 b, 18 (III・2)と接合	被熱
	たたき石	10	IV層1回目	8.9	11.2	4.6	660.0	安山岩		
	たたき石	14	IV層1回目	11.6	8.9	7.2	930.0	安山岩		
	たたき石	12	IV層1回目	12.4	10.5	4.5	940.0	安山岩		未掲載
	たたき石	13	IV層1回目	12.0	9.0	3.9	655.0	安山岩		未掲載
	たたき石	2	IV層1回目	(10.2)	10.6	5.6	735.0	安山岩		未掲載
	たたき石	4	IV層1回目	12.8	9.4	5.7	1050.0	安山岩		未掲載
	たたき石	5	IV層1回目	12.9	8.9	5.3	890.0	安山岩		未掲載
	たたき石	6	IV層1回目	12.7	8.8	5.3	(845.0)	安山岩		未掲載
	たたき石	7	IV層1回目	13.4	9.1	3.7	750.0	安山岩		未掲載
	たたき石	1	IV層1回目	13.9	9.1	4.6	880.0	安山岩		未掲載
たたき石	8	IV層1回目	12.6	(9.9)	4.3	720.0	安山岩		未掲載	
たたき石	9	IV層1回目	14.5	9.7	5.1	1100.0	安山岩		未掲載	
たたき石	11	IV層1回目	10.4	9.4	4.5	640.0	安山岩		未掲載	
S-5	たたき石	1	IV層1回目	8.4	8.9	3.2	365.0	安山岩		
	たたき石	4	IV層1回目	9.2	8.0	3.2	340.0	安山岩		
	鏝	2	IV層1回目	7.8	6.2	2.7	186.0	安山岩		未掲載
	たたき石	3	IV層1回目	10.2	9.2	3.7	501.9	安山岩		未掲載
	たたき石	5	IV層1回目	8.7	6.8	2.6	243.1	安山岩		未掲載
	たたき石	6	IV層1回目	8.2	7.4	4.5	401.6	安山岩		未掲載
S-6	たたき石	1	IV層3回目	7.2	4.0	3.7	129.9	安山岩		
	鏝	2	IV層3回目	7.3	4.4	1.9	82.7	安山岩		未掲載
	鏝	3	IV層3回目	7.8	4.1	2.4	126.6	安山岩		未掲載
	鏝	4	IV層3回目	6.3	4.7	2.6	110.0	安山岩		未掲載
	鏝	5	IV層3回目	6.6	4.5	2.2	91.5	安山岩		未掲載
	鏝	6	IV層3回目	6.6	4.4	2.8	122.3	安山岩		未掲載
	鏝	7	IV層3回目	7.0	4.7	2.5	106.0	安山岩		未掲載

表-4 層別出土土器一覧(包含層)

	II層	II-1層	II-2層	II-3層	II-4層	II層攪乱	III層	III-1層	III-2層	III-3層	III-4層
II群 a類	1	36	18	9	3	4	107	156	235	641	43
II群 b類	4	6	2	3				13	2	43	
III群 a類・III群	1	16	10	3	2		4	49	2	1	
III群 b類		1	1								
不明		8	5	5				26	8	8	1
計	6	67	36	20	5	4	111	244	247	693	44

	IV層	IV-1層	IV-2層	IV-3層	IV-4層	攪乱・剥	合計
II群 a類	103	87	476	168	33	28	2,148
II群 b類							73
III群 a類・III群						3	91
III群 b類							2
不明		2	3	25	10	6	107
計	103	89	479	193	43	37	2,421

表-5 層別出土石器等一覧(包含層)

	II 層	II-1層	II-2層	II-3層	II-4層	II層視乱	III 層	III-1層	III-2層	III-3層	III-4層	III-5層
石 鏃	1	10	4	2			1	3	5	6	1	1
つまみ付きナイフ		1	2	1				5	2	3	1	1
石槍またはナイフ		2	1					1	1	1		
スクレイパー	1	7	6	2		1	4	14	7	9	5	
石 錐		2	1				1		2	1		
両面調整石器							1		1			
石 核		6	2			7	5	5	12	7	1	
U・Rフレイク	1	7	2				1		1	2	1	
石斧・石のみ	1		1				1		1	1		
たたき石	2	17	7	4	1	16	4	17	22	21	7	
すり石									1	4	3	
北海道式石冠									1			
石 錘							1		1	3		
砥 石			2	2					1	2		
台 石		2	1	1		1		2	6	3		
原 石			1				1		2			
軽 石								1				
礫 器										1		
加工痕・割線のある礫								1		1		
フ レ イ ク	77	1,068	675	217	3	261	76	1,409	2,968	394	159	11
礫・礫片	9	97	45	31		57	9	73	130	89	35	
土 製 品										1		
焼成粘土塊			4									
計	92	1,219	754	260	4	343	105	1,531	3,164	549	213	13

	III層視乱	IV 層	IV-1層	IV-2層	IV-3層	IV-4層	IV-5層	視乱・採 表	B調査 試掘坑	近代土 坑覆土	合 計
石 鏃			10	3	5	4			2		58
つまみ付きナイフ			2	6	2	1					27
石槍またはナイフ			1	2							9
スクレイパー		1	9	6	5	5		1			83
石 錐			1	2	3						13
両面調整石器			1	1	1	1					6
石 核			4	3	6	1		2			61
U・Rフレイク			3	3	7						28
石斧・石のみ				1							6
たたき石	1	2	15	18	26	11	1	7			199
すり石			1		1						10
北海道式石冠											1
石 錘			3			1		3			12
砥 石			2	4	2	2	1				18
台 石		1	3	7	1	3		3	1		35
原 石	1	1	1	1	1						9
軽 石											1
礫 器											1
加工痕・割線のある礫											2
フ レ イ ク		149	1,535	2,610	1,666	681	64	99		63	14,185
礫・礫片		5	70	73	85	23	9	26			866
土 製 品							1				2
焼成粘土塊											4
計	2	159	1,661	2,740	1,811	733	76	143	1	63	15,636

表-6 遺構出土掲載石器一覧

S-1

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-2-1	石斧	1	V層上位?	(9.0)	5.2	1.5	102.8	片岩		図版10-1、15-1	
図IV-2-2	石斧	2	V層上位?	(9.6)	4.6	1.5	116.1	緑色泥岩		図版10-1、15-1	
図IV-2-3	石斧	3	V層上位?	10.6	4.9	1.5	119.9	片岩		図版10-1、15-1	
図IV-2-4	石斧	4	V層上位?	8.1	3.8	1.3	56.5	緑色泥岩		図版10-1、15-1	
図IV-2-5	石斧	5	V層上位?	8.7	4.4	1.3	69.1	緑色泥岩		図版10-1、15-1	
図IV-2-6	スクレイパー	6	V層上位?	8.0	4.2	1.4	33.9	頁岩		図版10-1、15-1	

S-2

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-3-1	たたく石	1	Ⅲ層2回目	12.1	10.3	5.0	870.0	安山岩		図版10-2、15-2	被熱
図IV-3-2	たたく石	3	Ⅲ層2回目	14.8	9.5	4.2	910.0	安山岩	S-2, 4(Ⅲ・IV)と接合	図版10-2、15-2	

S-3

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-3-1	たたく石	2	IV層1回目	11.0	10.6	4.6	750.0	安山岩		図版10-3、15-3	
図IV-3-2	たたく石	5	IV層1回目	8.4	9.9	4.1	535.0	安山岩		図版10-3、15-3	
図IV-3-3	石錘	G21b・37	IV層1回目	10.4	12.5	3.3	550.0	安山岩	G21b, 38(Ⅲ・IV)と接合	図版10-3、15-3	

S-4

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-4-1	たたく石	3	IV層1回目	14.4	9.5	5.7	990.0	安山岩	D20b, 18(Ⅲ・IV)と接合	図版10-4、15-4	被熱
図IV-4-2	たたく石	10	IV層1回目	8.9	11.2	4.6	660.0	安山岩		図版10-4、15-4	
図IV-4-3	たたく石	14	IV層1回目	11.6	8.9	7.2	930.0	安山岩		図版10-4、15-4	

S-5

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-5-1	たたく石	1	IV層1回目	8.4	8.9	3.2	365.0	安山岩		図版10-5、16-1	
図IV-5-2	たたく石	4	IV層1回目	9.2	8.0	3.2	340.0	安山岩		図版10-5、16-1	

S-6

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-5-1	たたく石	1	IV層3回目	7.2	4.0	3.7	129.9	安山岩		図版10-6、16-2	

FC-1

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-7-1	石錘	24	Ⅲ層	5.8	1.8	0.8	4.6	頁岩		図版12-1、16-4	
図IV-7-2	石核	11	Ⅲ層	(8.8)	5.2	3.3	118.8	頁岩		図版12-1、16-4	
図IV-7-3	たたく石	3	Ⅲ層	13.9	11.9	4.6	1120.0	安山岩		図版12-1、16-4	
図IV-7-4	たたく石	9	Ⅲ層	8.5	7.4	4.2	385.0	安山岩		図版12-1、16-4	
図IV-7-5	台石	4	Ⅲ層	15.0	9.5	4.6	970.0	安山岩		図版12-1、16-4	

FC-5

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-9-1	石錘	1	Ⅲ層2回目	2.5	1.3	0.3	0.6	頁岩		図版12-3、16-5	
図IV-9-2	石錘	2	Ⅲ層2回目	2.0	1.1	0.3	0.5	頁岩		図版12-3、16-5	
図IV-9-3	石錘	5	Ⅲ層2回目	(3.6)	1.3	0.4	(2.3)	頁岩		図版12-3、16-5	
図IV-9-4	台石	8	Ⅲ層2回目	23.3	13.5	7.4	3075.0	安山岩		図版12-3、16-5	

FC-6

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-9-1	台石	2	Ⅲ層4回目	22.4	19.7	6.0	4420.0	安山岩		図版12-4、16-7	

FC-7

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-10-1	たたく石	15	IV層2回目	14.4	8.3	6.0	1020.0	安山岩		図版12-5、16-6	
図IV-10-2	石錘	1	Ⅲ層2回目	9.3	10.6	3.2	450.0	安山岩		図版12-5、16-6	
図IV-10-3	石錘	9	Ⅲ層2回目	12.3	9.2	3.2	490.0	安山岩		図版12-5、16-6	

FC-8

図番号	器種名	遺物番号	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	接合	図版番号	備考
図IV-10-1	たたく石	1	IV層1回目	8.2	10.0	3.8	465.0	安山岩		図版12-6、16-3	

表-7 包含層出土揚載土器・土製品一覽

図番号	接合状況 遺物番号・層位×点数	同一個体破片 遺物番号・層位×点数	分類	図版番号	備考				
図V-2-1 a	D-21-c-10 IV③×1 F-20-c-8 IV③×2 F-21-d-2 IV①×1 F-22-a-7 IV②×2 F-22-a-9 IV②×20 F-22-d-8 III②×1 未注記×1 合計28点	F-20-a-9 IV②×3 F-20-c-8 IV③×7 F-20-d-11 IV②×2 F-22-a-7 IV②×16 F-22-a-9 IV②×17 F-22-a-11 IV②×1 F-22-a-12 IV②×6 F-22-a-15 III②×1 G-21-d-21 IV②×1 G-22-c-14 III③×1 G-22-d-27 III②×1 D-21-c-10 IV③×2 未注記×172	II a	図版17-1	出土状況 図版14-3				
	図V-2-1 b	F-22-a-9 IV②×3 未注記×2 合計5点				図版19			
	図V-2-1 c	F-22-a-9 IV②×6 未注記×7 合計13点				図版19			
	図V-2-2	G-21-b-17 III①×1			II a	図版19			
図V-2-3	F-22-d-37 IV③×1		II a	図版19					
図V-2-4	F-23-c-31 IV②×1		II a	図版19					
図V-2-5	F-20-a-1 IV⑤×1		II a	図版19					
図V-2-6	F-20-c-8 IV③×1		II a	図版19					
図V-2-7	G-21-b-10 III③×1		II a	図版19					
図V-2-8	F-20-b-14 IV④×1		II a	図版19					
図V-3-9	C-22-b-3 IV×10 C-22-b-4 IV×13 C-22-b-5 IV×40 C-22-b-6 IV×14 C-22-b-7 IV×2 C-22-c-8 IV×4 C-22-d-8 III①×1 未注記×3 合計87点	C-22-b-4 IV×1 C-22-b-5 IV×2 C-22-b-7 IV×3 C-22-c-8 III×5 未注記×40 合計51点	II a	図版17-2	出土状況 図版14-1・2				
	図V-3-10	D-22-d-4 III②×36 D-22-d-9 III×3 未注記×1 合計40点				D-22-d-4 III②×12 D-22-d-9 III×49 未注記×65 合計126点	II a	図版18-1	出土状況 図版13-8
	図V-4-11	G-22-d-23 III③×27 未注記×1 合計28点				G-22-d-23 III③×165 未注記×540 合計705点	II a	図版17-3	出土状況 図版13-5~7
	図V-4-12 a	G-22-b-17 III③×3				G-22-d-34 III③×36	II a	図版17-4	
	図V-4-12 b	G-22-d-34 III③×5				G-22-b-17 III③×22			
	図V-4-12 c	G-22-b-16 III③×3 G-22-b-30 III③×3 G-22-d-34 III③×11 未注記×1 合計18点				G-22-d-16 III③×2 G-23-a-12 IV②×55 合計115点		図版17-5	
		図V-5-13				C-22-a-3 II 覆乱×3			
	図V-5-14 a	G-22-b-17 III③×3				G-22-b-17 III③×22 G-22-d-16 III③×2 合計24点	II a	図版19	
図V-5-14 b	G-22-b-34 IV×5		II a	図版19					
図V-5-15 a	E-23-b-2 III③×1	E-23-b-2 III③×3							
図V-5-15 b	E-23-b-2 III③×1								

図番号	接合状況 遺物番号・順位×点数	同一個体破片 遺物番号・順位×点数	分類	図版番号	備考
図V-5-16	F-18-a-8 III①×1 F-18-a-13 IV①×1 F-18-a-18 IV③×1 合計3点	F-18-a-8 III①×3 F-18-a-18 IV③×1 合計4点	II a	図版19	
図V-5-17	E-22-c-11 IV②×1		II a	図版19	
図V-5-18	D-23-b-5 IV①×3 D-23-b-1 II①×3 合計6点		II a	図版19	
図V-5-19	G-21-c-3 II③×1		II a	図版19	
図V-5-20	C-22-b-7 IV×1 C-22-c-8 III①×1 C-22-c-12 III②×3 未注記×1 合計6点	C-22-c-12 III②×5	II a	図版19	
図V-5-21	G-22-a-16 III④×1		II a	図版19	
図V-5-22	G-22-c-9 III③×2		II a	図版19	
図V-5-23 a	G-19-c-6 IV②×17	G-19-a-10 IV③×1 G-19-c-6 IV②×50 G-19-c-8 IV③×7 未注記×190 合計248点	II a	図版19	
図V-5-23 b	G-19-c-6 IV②×4				
図V-5-23 c	G-19-c-6 IV②×3				
図V-6-24	F-18-c-13 II①×1	F-20-b-6 III×3	II a	図版19	
図V-6-25	F-20-b-6 III①×1		II a	図版19	
図V-6-26	F-11-d-9 III②×1		II a	図版19	
図V-6-27	F-22-b-17 IV②×1		II a	図版19	
図V-6-28	E-13-a-7 III③×1		II a	図版19	
図V-6-29	G-19-b-8 IV④×1		II a	図版20	
図V-6-30	G-19-c-6 IV②×3		II a	図版20	
図V-6-31	G-19-c-6 IV②×4		II a	図版20	
図V-6-32	F-23-a-24 IV②×1		II a	図版20	
図V-6-33	G-21-a-20 IV②×1		II a	図版20	
図V-6-34	F-11-d-16 III②×1		II a	図版20	
図V-6-35	F-22-d-30 IV③×2		II a	図版20	
図V-6-36	C-22-b-7 IV×1	G-21-c-3 II③×6	II a	図版20	
図V-6-37	G-21-b-10 II②×3		II a	図版20	
図V-6-38	F-18-a-18 IV×2	F-18-a-18 IV③×4	II a	図版20	
図V-6-39	G-22-b-17 III③×2	G-22-d-18 III③×5 合計60点	II a	図版20	
図V-6-40	G-20-a-5 III②×2 G-20-a-13 IV①×1 合計3点	G-20-a-5 III②×11 G-20-a-13 IV①×2 G-20-a-9 III③×1 G-20-e-4 III②×2 合計16点	II a	図版20	
図V-6-41	F-22-c-15 III②×1		II a	図版20	
図V-6-42	F-23-a-18 IV②×1		II a	図版20	
図V-6-43	F-23-a-15 IV③×1 G-23-b-15 III③×1 合計2点		II a	図版20	
図V-6-44	G-21-a-21 IV②×1		II a	図版20	
図V-6-45	F-22-d-14 III②×1		II a	図版20	

図番号	接合状況 遺物番号・部位×点数	同一個体破片 遺物番号・部位×点数	分類	図版番号	備考
図V-6-46	F-23-c-15 III③×1		II a	図版20	
図V-6-47	F-22-d-34 IV③×1		II a	図版20	図版21-3に粘土の写真
図V-6-48	F-22-c-23 IV②×2		II a	図版18-3	
図V-6-49	G-21-b-31 IV①×1		II a	図版18-4	
図V-6-50	G-23-a-12 III①×1		II a	図版20	
図V-6-51	F-22-a-1 III①×1		II a	図版20	
図V-6-52	F-20-d-6 IV①×1		II a	図版20	
図V-6-53	E-22-c-4 III②×2	E-22-b-5 III④×4	II a	図版20	
図V-6-54	F-23-c-6 III①×1		II a	図版20	
図V-6-55	D-23-c-10 IV①×1		II a	図版20	
図V-8-56 a	E-21-a-5 III×5 E-21-b-5 III×1 合計6点	D-21-d-5 III②×7 未注記×13 合計20点	II a	図版20	出土状況 図版13-4
図V-8-56 b	D-21-d-5 III②×2 E-21-a-5 III×3 合計5点				
図V-8-56 c	D-21-d-5 III②×1 E-21-a-5 III×1 合計2点				
図V-9-57	C-10-a-1 III①×2		II b	図版21-1	
図V-9-58	E-12-c-9 III③×1		II b	図版21-1	
図V-9-59	E-12-c-7 III③×2		II b	図版21-1	
図V-9-60 a	E-12-c-9 III③×3		II b	図版21-1	
	F-13-a-4 II③×1 合計4点				
図V-9-60 b	E-12-c-9 III③×3				
図V-9-61	E-13-a-8 III③×1	E-12-c-9 III③×19	II b	図版21-1	
図V-9-62	E-13-a-8 III③×1	E-12-a-1 III①×4	II b	図版21-1	
図V-9-63	B-12-b-4 II③×2		II b	図版21-1	
図V-9-64	E-12-a-1 III①×2		II b	図版21-1	
図V-9-65	E-12-b-7 III②×1		II b	図版21-1	
図V-9-66	B-10-a-1 II①×1		II b	図版21-1	
図V-9-67	F-23-b-1 II①×1		II b	図版21-1	
図V-9-68	E-13-a-1 III①×1		II b	図版21-1	
図V-9-69	B-10-d-3 III③×3		II b	図版21-1	
図V-10-70	G-6-b-2 III①×1		III a	図版18-2	出土状況 図版14-7
図V-10-71	G-7-b-3 III①×23		III a	図版18-5	出土状況 図版14-8
図V-10-72	B-10-b-4 III×2	B-10-b-4 III×1	III a	図版21-3	
	C-6-b-1 II①×1 C-8-c-1 II①×1 合計4点	未注記×3 合計4点			
図V-10-73	B-16-a-1 III①×1	B-16-a-1 III①×5	III a	図版21-3	
図V-10-74	B-7-d-1 II①×1		III a	図版21-3	
	C-7-a-1 II①×1 合計2点				
図V-10-75	G-13-a-1 III①×2	F-13-d-4 II①×2	III a	図版21-3	
図V-10-76	F-23-d-1 II①×1		III b	図版21-3	
図V-10-77	E-13-a-6 III③×1			図版18-7	円盤状土製品
図V-10-78	F-23-d-16 IV⑤×1			図版18-7	土器片鏝

表-8 包含層出土掲載石器一覧

図番号	器種名	発掘区	遺物番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	材質	接合	図版番号	備考
図V-16-1	石鏃	F22c	6	II層200目	2.1	1.8	0.4	0.6	黒曜石			22
図V-16-2	石鏃	F22d	2	II層100目	3.4	1.6	0.4	1.0	黒曜石			22
図V-16-3	石鏃	F22d	1	II層100目	3.2	1.6	0.4	0.8	黒曜石			22
図V-16-4	石鏃	G20a	10	III層300目	4.0	1.6	0.4	1.4	黒曜石			22
図V-16-5	石鏃	G22c	18	III層300目	3.0	1.6	0.4	1.0	真打			22
図V-16-6	石鏃	G22c	7	III層300目	2.8	1.4	0.4	1.0	真打			22
図V-16-7	石鏃	G21b	43	IV層200目	2.1	1.3	0.3	0.4	真打			22
図V-16-8	石鏃	G22a	1	II層100目	2.9	1.5	0.3	0.8	真打			22
図V-16-9	石鏃	F14a	8	II層	4.0	2.2	0.4	2.5	真打			22
図V-16-10	石鏃	G21b	12	III層300目	4.1	2.5	0.5	3.4	真打			22
図V-16-11	石鏃	G21b	32	IV層100目	3.9	2.3	0.7	4.7	真打			22
図V-16-12	石鏃	F17c	2	II層100目	2.1	1.3	0.3	0.6	黒曜石			22
図V-16-13	石鏃	F17b	9	IV層100目	3.8	1.5	0.5	1.7	黒曜石			22
図V-16-14	石鏃	E13b	1	II層100目	4.5	1.6	0.4	1.8	真打			22
図V-16-15	石鏃	F22c	25	IV層200目	2.6	0.8	0.4	0.7	真打			22
図V-16-16	石鏃	F22d	43	IV層300目	2.9	0.9	0.4	0.7	真打			22
図V-16-17	石鏃	F22d	44	IV層300目	3.0	0.8	0.3	0.7	真打			22
図V-16-18	石鏃	F22a	27	IV層100目	2.2	0.7	0.3	0.5	真打			22
図V-16-19	石鏃	G22b	5	III層200目	4.0	0.8	0.4	1.3	真打			22
図V-16-20	石鏃	F22b	32	IV層200目	3.9	1.0	0.8	2.3	真打			22
図V-16-21	石鏃	F24b	2	II層200目	5.6	2.8	1.4	11.1	真打			22
図V-16-22	石鏃	E23a	10	II層	6.0	1.8	0.6	4.0	真打			22
図V-16-23	つまみ付きナイフ	E14d	1	II層100目	7.9	3.0	0.9	18.5	真打			22
図V-16-24	つまみ付きナイフ	G21c	1	II層200目	4.8	2.5	1.0	9.3	真打			22
図V-16-25	つまみ付きナイフ	G22c	7	III層100目	6.1	2.6	0.9	10.0	真打			22
図V-16-26	つまみ付きナイフ	G22a	7	III層200目	5.8	4.1	0.9	14.3	真打			22
図V-16-27	つまみ付きナイフ	G22c	3	III層300目	7.5	3.5	0.8	15.5	真打			22
図V-16-28	つまみ付きナイフ	G21b	33	IV層100目	(5.1)	2.9	0.7	9.9	真打			22
図V-17-29	スタレイベール	F22a	4	II層100目	6.5	3.4	1.0	22.5	真打			22
図V-17-30	スタレイベール	G22c	1	III層300目	6.7	3.5	1.2	27.4	真打			22
図V-17-31	スタレイベール	F18a	12	III層100目	6.6	4.7	1.5	34.8	真打			22
図V-17-32	スタレイベール	F22b	6	III層100目	7.5	3.2	1.3	31.2	真打			22
図V-17-33	スタレイベール	G22b	11	IV層100目	5.4	2.8	0.6	5.8	真打			22
図V-17-34	スタレイベール	F21b	1	II層100目	9.3	3.4	1.4	34.7	真打			22
図V-17-35	スタレイベール	F18a	11	III層100目	6.8	3.4	1.2	29.6	真打			22
図V-17-36	スタレイベール	C5c	2	II層200目	6.0	3.4	1.1	22.1	真打			22
図V-17-37	スタレイベール	C11a	7	III層200目	5.0	3.0	1.4	16.9	真打			22
図V-17-38	スタレイベール	F22c	16	III層300目	3.4	2.7	1.3	19.8	真打			22
図V-17-39	スタレイベール	F22c	21	III層400目	5.3	3.2	0.9	15.6	真打			22
図V-17-40	スタレイベール	G22b	19	III層400目	4.7	2.7	1.1	15.2	真打			22
図V-17-41	スタレイベール	G21c	17	IV層100目	5.8	3.8	1.2	17.8	真打			22
図V-17-42	エンドスタレイベール	C11d	3	IV層100目	5.2	3.3	1.6	29.4	真打			22
図V-17-43	エンドスタレイベール	G10a	1	IV層100目	5.2	3.1	0.8	14.0	真打			22
図V-18-44	ラウンドスタレイベール	G20c	4	II層	4.1	3.2	1.7	19.1	真打			22
図V-18-45	ラウンドスタレイベール	G20c	5	III層200目	4.7	3.4	1.0	15.0	真打			22
図V-18-46	石核	F22d	38	IV層300目	6.5	5.6	2.6	69.7	真打			22
図V-18-47	石核	F22b	26	IV層300目	6.2	6.2	3.8	107.1	真打			22
図V-18-48	石核	G22d	11	III層300目	7.0	8.5	5.2	285.0	玄武岩			22
図V-18-49	石斧	G22a	23	II層	(6.9)	(4.1)	1.2	45.1	打石			22
図V-18-50	石のみ	G21b	4	II層	(6.4)	1.6	0.8	14.5	緑色安岩			22
図V-18-51	石斧	G22c	5	III層300目	(5.2)	2.4	0.8	(16.4)	緑色安岩			22
図V-19-62	たたき石	C11a	2	II層100目	11.7	9.2	4.8	740.0	安山岩			23
図V-19-63	たたき石	C12b	5	II層300目	8.8	8.5	4.5	505.0	安山岩			23
図V-19-64	たたき石	D21c	1	III層200目	10.3	9.6	5.0	780.0	安山岩			23
図V-19-65	たたき石	D21c	2	III層200目	16.4	9.9	6.8	1,720.0	安山岩			23
図V-19-66	たたき石	D21c	3	III層200目	9.7	7.1	6.9	485.0	安山岩			23
図V-19-67	たたき石	E22b	1	II層400目	10.4	9.3	4.8	625.0	安山岩			23
図V-19-68	たたき石	F22d	23	IV層300目	6.8	6.45	4.1	285.0	安山岩			23
図V-19-69	たたき石	G21a	9	III層100目	10.8	5.6	4.8	430.0	安山岩			23
図V-19-60	たたき石	G22d	12	III層400目	15.0	4.6	3.7	450.0	安山岩			23
図V-19-61	すり石	E22d	3	III層400目	9.6	6.2	2.9	340.0	安山岩			23
図V-19-62	すり石	G21b	24	III層300目	8.2	5.6	2.8	173.0	安山岩			23
図V-19-63	すり石	G22d	15	III層300目	13.5	9.1	6.0	960.0	安山岩			23
図V-19-64	北海道式石刃	F22a	6	III層200目	15.7	9.8	6.3	1,280.0	安山岩			23
図V-20-65	石鏢	C11a	10	III層300目	12.2	8.8	4.8	760.0	安山岩			23
図V-20-66	石鏢	C22d	14	風倒	13.2	10.0	4.9	960.0	安山岩			23
図V-20-67	石鏢	G21b	12	III層200目	10.5	9.8	3.5	340.0	安山岩			23
図V-20-68	石鏢	G22d	10	III層300目	9.6	6.7	2.4	245.0	安山岩			23
図V-20-69	砥石片	B12a	1	II層200目	9.1	4.8	2.4	142.0	安山岩			24
図V-20-70	砥石	G22d	29	IV層200目	5.9	3.9	3.4	10.7	スツリア			24
図V-20-71	砥石	G22d	28	IV層100目	4.5	6.3	4.3	37.7	スツリア			24
図V-20-72	台石	D21a	6	III層200目	12.4	11.6	5.1	1,670.0	安山岩			24
図V-20-73	台石	D21a	7	III層200目	29.0	21.5	7.5	7,290.0	安山岩			24
図V-21-74	台石	D22d	3	III層200目	13.9	12.3	9.6	2,960.0	安山岩			24
図V-21-75	台石	F19a	12	IV層100目	13.1	13.0	9.0	2,310.0	安山岩			24
図V-21-76	台石	G22b	18	III層300目	23.9	18.6	8.0	5,540.0	安山岩			24
図V-21-77	台石	G22d	25	III層300目	24.5	17.9	6.8	4,350.0	安山岩			24

写 真 图 版



1 岩内線西前田駅プラットホーム跡



2 岩内線路盤土層断面



3 茅沼炭鉱鉄道路盤土層断面

図版 2



1 Cライン杭跡検出(南から)



2 SP-73~64杭跡完掘(北から)



3 SP-11土層断面(南東から)



4 岩内線側溝R完掘(東から)



5 岩内線側溝L完掘(南西から)



6 茅沼線側溝R土層断面(北東から)



7 茅沼線側溝R完掘(北東から)



8 茅沼線側溝L土層断面(北東から)



9 茅沼線側溝L完掘(北東から)



1 調査前風景（南から）



2 調査風景（南から）

図版 4



1 調査風景（北から）



2 遺物出土状況（南から）



1 調査風景（北から）



2 調査区完掘（北東から）

図版 6



1 G1・H1南壁土層断面（北東から）



2 A1～E1トレンチ完掘（南東から）



3 E1トレンチ南壁土層断面図（北東から）



1 C1・D1トレンチ南壁土層断面（北東から）



2 B1トレンチ南壁土層断面（北東から）



3 G5トレンチ南壁土層断面（北東から）



1 G5トレンチ完掘 (南東から)



2 G9トレンチ完掘 (南東から)



3 G9トレンチ南壁土層断面 (北東から)



4 C5・D5トレンチ完掘 (南東から)



5 C5・D5トレンチ完掘 (東から)



1 D 5 トレンチ南壁土層断面 (北東から)



2 C 5 トレンチ南壁土層断面 (北東から)



3 C 5 トレンチ南壁土層断面 (北東から)



1 S-1 検出 (西から)



2 S-2 検出 (南西から)



3 S-3 検出 (東から)



4 S-4 検出 (東から)



5 S-5 検出 (北から)



6 S-6 検出 (東から)



1 F-1 検出 (西から)



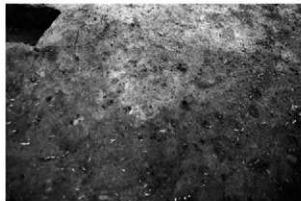
2 F-1 土層断面 (南東から)



3 F-2 検出 (南西から)



4 F-2 土層断面 (西から)



5 F-3 検出 (西から)



6 F-3 土層断面 (南東から)



7 F-4 検出 (南から)



8 F-4 周辺の遺物 (西から)



1 FC-1 検出 (西から)



2 FC-4 検出 (南から)



3 FC-5 完掘 (北から)



4 FC-6 検出 (西から)



5 FC-7 検出 (西から)



6 FC-8 検出 (北から)



1 D21~23遺物出土状況（南西から）



2 D20遺物出土状況（東から）



3 D21遺物出土状況（西から）



4 II群a類土器出土状況（西から）



5 II群a類土器出土状況（東から）



6 II群a類土器出土状況（北西から）



7 クルミ堅果類出土状況（北西から）



8 II群a類土器出土状況（北東から）



1 II群 a類土器出土状況 (東から)



2 II群 a類土器出土状況 (東から)



3 II群 a類土器出土状況 (北から)



4 II群 a類土器出土状況 (北から)



5 II群 a類土器出土状況 (東から)



6 II群 b類土器出土状況 (南から)



7 III群 a類土器出土状況 (南から)



8 III群 a類土器出土状況 (南東から)



1 S-1 出土の石器

2 S-2 出土の石器



3 S-3 出土の石器



4 S-4 出土の石器



1 S-5出土の石器

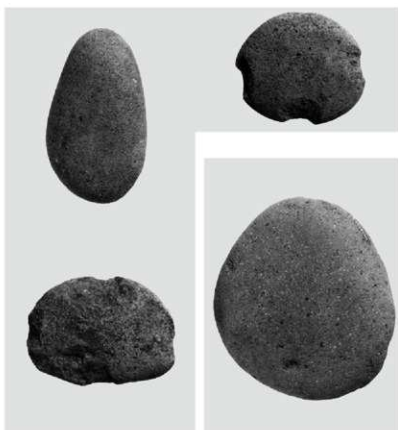
2 S-6出土の石器 3 FC-8出土の石器



4 FC-1出土の石器



5 FC-5出土の石器



6 FC-7出土の石器

7 FC-6出土の石器



1 包含層出土の土器 (図V-2-1 a)



3 包含層出土の土器 (図V-4-11)



4 包含層出土の土器 (図V-4-12 a・12 b)



2 包含層出土の土器 (図V-3-9)



5 包含層出土の土器 (図V-4-12 c)



1 包含層出土の土器 (図V-3-10)



2 包含層出土の土器 (図V-10-70)



3 包含層出土の土器 (図V-6-48)



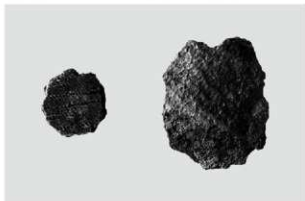
4 包含層出土の土器 (図V-6-49)



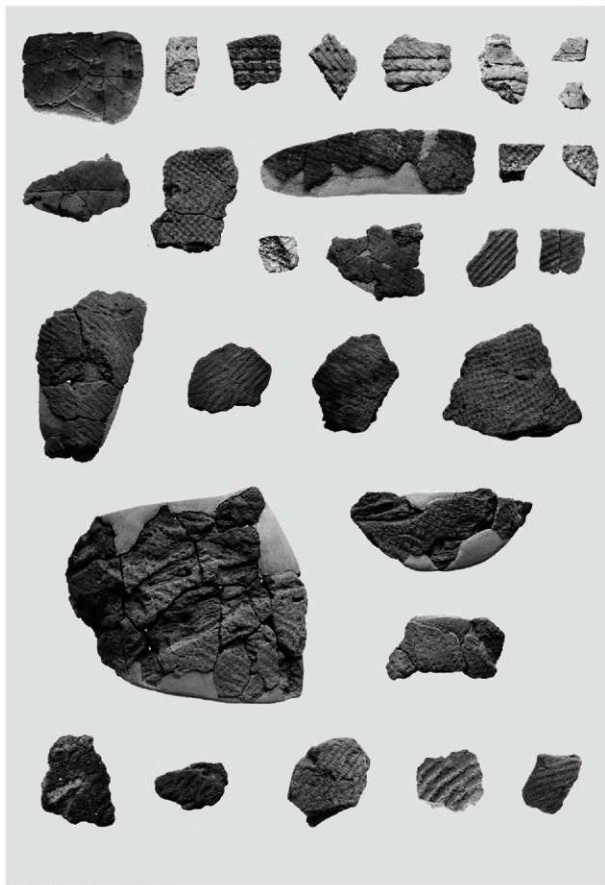
5 包含層出土の土器 (図V-10-71)



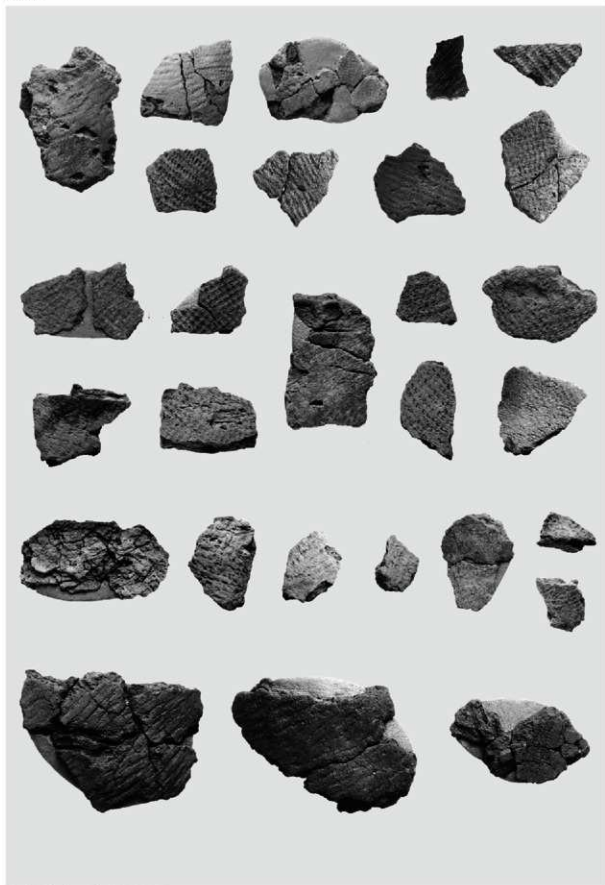
6 包含層出土の土器 (図V-5-18)



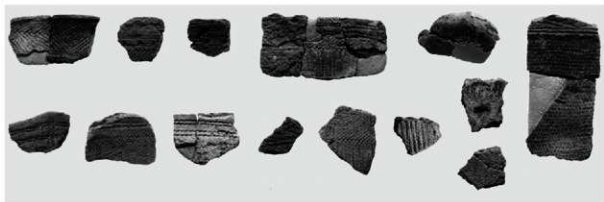
7 包含層出土の土製品



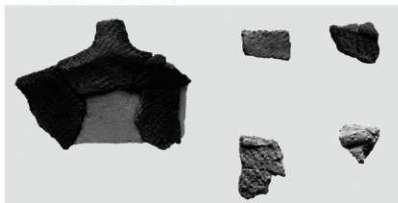
包含層出土Ⅱ群 a 類土器(1)



包含層出土Ⅱ群 a類土器(2)



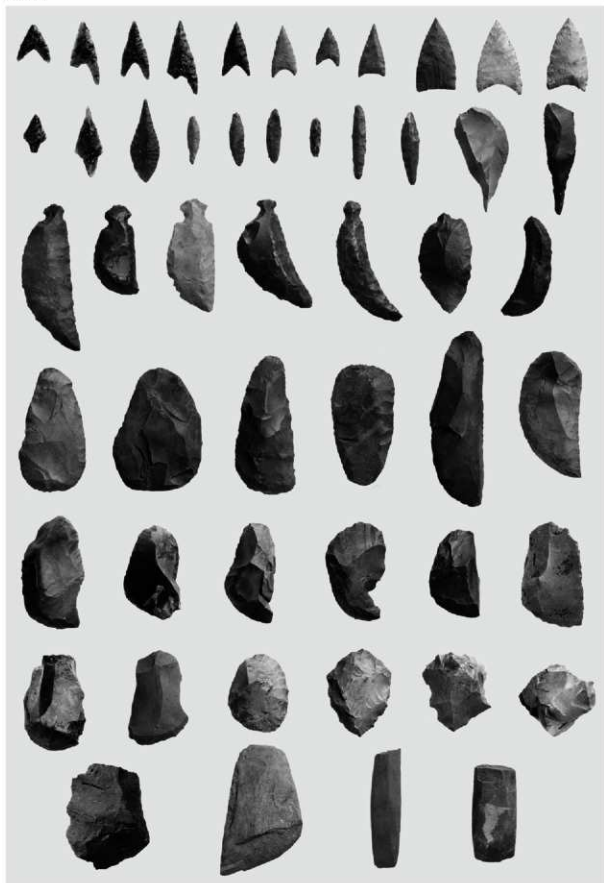
1 包含層出土Ⅱ群b類土器



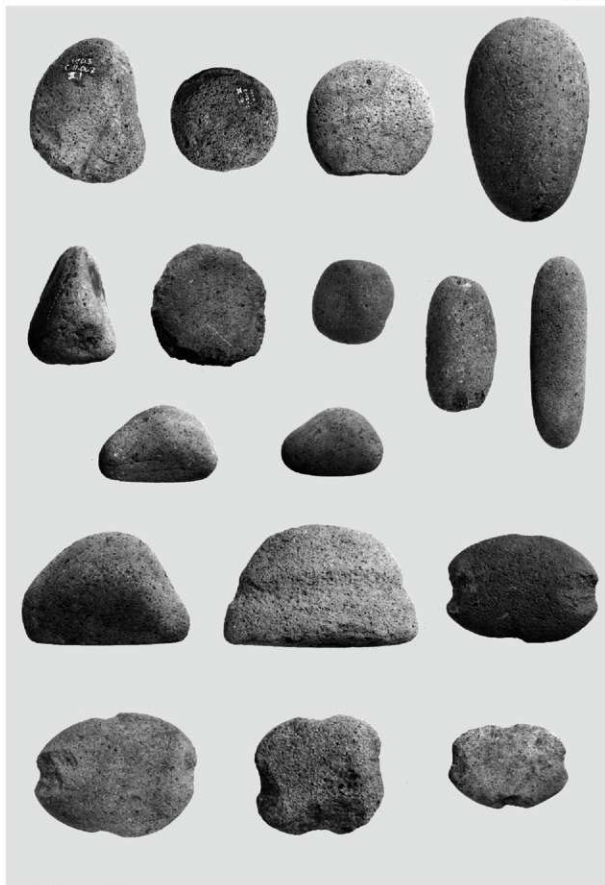
2 包含層出土Ⅲ群a類・b類土器



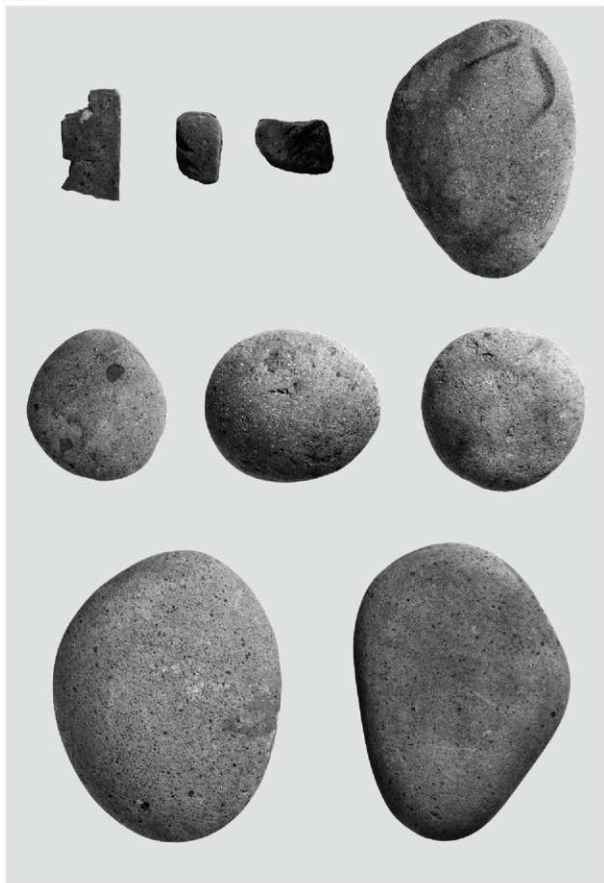
3 胎土に混入している捻り紐 (図V-5-47)



包含層出土の石器(1)



包含層出土の石器(2)



包含層出土の石器(3)

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1980『永野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 赤石慎三 2002『苫小牧東部工業地帯の遺跡群Ⅷ—苫小牧市静川遺跡・柏原17遺跡発掘調査報告書—』苫小牧市教育委員会
苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 浅賀輝夫 2002『聞き書きによる 岩内大火の記録 昭和29年9月26日』私家版
- 阿部千春・福田裕二 1993『八木A遺跡・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 石川直章 2004『動物意匠をもつ土器』『小樽市博物館紀要』17
- 池上啓介 1937『北海道後志國岩内郡岩内町利野無納遺跡の遺物（其一）』『史前學雜誌』第9巻第4編
- 井上真理子 1983『Ⅲ遺構外の出土土器 第1章 白坂第1地点の調査』『白坂』松前町教育委員会
- 岩内町 1944『岩内町史』
- 内山貞澄 1985『チャランケ・チャシ発掘調査報告書』島牧村教育委員会
- 大場利夫・梶井力蔵 1958『岩内遺跡』岩内町・岩内教育委員会
- 大沼忠春 1981『道央部の前期縄文土器群の編年について』『北海道考古学』第17編
- 大沼忠春 1984『道南の縄文前期土器群の編年について』『北海道考古学』第20編
- 大沼忠春 1986『道南の前期土器群の編年について（Ⅱ）』『北海道考古学』第22編
- 大山 柏 1941『北海道岩内町リヤムナイの遺物（第二回）』『史前學雜誌』第13巻第5編
- 大山 柏 1942『北海道岩内町リヤムナイの遺物（第三回）』『史前學雜誌』第14巻第2・3編
- 茅沼炭化礦業株式会社茅沼礦業所 1956『開礦百年史』
- 共和町史編さん委員会 1972『共和町史 共和町』
- 久保 泰ほか 1983『白坂』松前町教育委員会
- 久保 泰 1986『日ノ浜砂丘1遺跡』恵山町教育委員会
- 児玉作左衛門・大場利夫 1954『函館市春日町出土遺物について』『北方文化研究報告』第9編
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1980『フレベツ遺跡群』
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1982『江別市吉井の沢1遺跡』北埋調報5
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1983『編株1・2遺跡—編株地区埋蔵文化財調査概報』
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1991『伊達市牛舎川右岸遺跡 南極府川遺跡 谷藤川右岸遺跡』北埋調報68
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1993『函館市中野A遺跡（Ⅱ）』北埋調報84
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1996『函館市石倉貝塚』北埋調報108
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 1998『上磯町茂別遺跡』北埋調報121
- ㈱北海道埋蔵文化財センター 2005『森町森川4遺跡』北埋調報218
- 斉藤 傑 1974『松前町大津遺跡発掘調査報告書』フィールドの会
- 坂本 衛 2004『鉄道施設がわかる本』山海堂
- 榊原正文 2000『私のアイヌ語地名調査』自費出版
- 横丹町史編さん委員会 1985『横丹町史』横丹町
- 杉 行夫 1992『茅沼炭化工業専用鉄道の思い出』『鉄道ファン』vol.32-9
- 鈴木正語ほか 1991『釜谷4遺跡』木古内町教育委員会
- 竹田輝雄 1963『免足岩陰遺跡』小樽市博物館紀要No.2
- 竹田輝雄・早川和夫ほか 1962・1970（復刻1979）『茶津洞窟遺跡群』小樽市博物館紀要No.1・No.3
- 田部 淳 1999『汐見橋遺跡』泊村教育委員会
- 田部 淳ほか 2004『編株1遺跡』泊村教育委員会

- 田部 淳・土肥達佳 2002『ヘロカルス遺跡A地点』泊村教育委員会
- 田部 淳・土肥達佳 2003『滝ノ淵遺跡』泊村教育委員会
- 田部 淳・村上章久 2005『堀株1遺跡(2)』泊村教育委員会
- 田部 淳・吉田玄一ほか 1997『ヘロカルス遺跡E～G地点』泊村教育委員会
- 田原良信 1987『豊原1遺跡』函館市教育委員会
- 名取武光・峰山 巖 1954「伊達町北黄金遺跡発掘報告」伊達町教育委員会
- 名取武光・峰山 巖 1957「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』第12輯
- 名取武光・峰山 巖 1963「茶舌場遺跡」『北方文化研究報告』第18輯
- 西野保行 1994『鉄道線路のはなし』成山堂書店
- 野辺地初雄・野辺地章太・高橋 昇 2004『東山1遺跡』岩内町教育委員会
- 浜本哲栄 『泊村ふるさと再発見事業中間報告』
- 福田裕二 1995『八木A遺跡Ⅱ・ハマナス野遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 福田裕二 1997『八木A遺跡Ⅲ・八木C遺跡』南茅部町埋蔵文化財調査団
- 古屋敷則夫 1989『蝦子川2遺跡』戸井町教育委員会
- 古屋敷則夫・鈴木正語・山田 央 2001『高屋敷川1遺跡』戸井町教育委員会
- 細田時友・岩宇郷土史研究会「水が燃えた」編集委員会編 2004『水が燃えた 9・26焦土 そして復興』岩宇郷土史研究会
- 北海道開拓記念館 1978『北海道における炭鉱の発展と労働者』北海道開拓記念館研究報告第4号
- 北海道開拓記念館 1992『積丹半島の自然と歴史—自然篇—』北海道開拓記念館研究報告第12号
- ㈱アイヌ文化振興・研究推進機構(増刷) 2001『アイヌ語地名リスト』北海道環地生活部
- 北海道教育委員会 1983『泊発電所建設に係る埋蔵文化財包蔵地確認調査報告書』
- 松谷純一・大場靖友・川内 基 1984『泊村ヘロカルス・茶津遺跡—発掘調査概報—』北海道文化財研究所
- 村越 深 1974『門岡土器文化』雄山閣考古学選書10
- 森岡健治・長田佳宏 1996『平取町旧平取小学校植物園遺跡』平取町教育委員会
- 山田秀三 1984『北海道の地名』北海道新聞社
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1985a『共和町宮丘1遺跡—発掘調査概報—』北海道文化財研究所
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1985b『泊村茶津遺跡—発掘調査概報—』北海道文化財研究所
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1986『宮丘1遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第1集
- 吉田玄一・川内 基・吉田周子 1987『ヘロカルス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集
- 吉田茂樹・田才雅彦ほか 2000『リヤムナイ2遺跡』共和町教育委員会
- 渡辺貞吾 1980『北海道で廃線の危機に立つ3路線』『鉄道ビクトリアル』No.384 vol.30-12
- 渡辺貞吾 2001『岩内馬車鉄道』『鉄道ビクトリアル』No.696 vol.151-1

報告書抄録

ふりがな		きょうわちょう りやむないさんいせまいち						
書名		共和町 リヤムナイ3遺跡(1)						
副書名		一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次		第220集						
シリーズ名		北海道埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号								
編著者名		遠藤香澄・笠原 興						
編集機関		北海道埋蔵文化財センター						
所在地		〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL 011-386-3231						
発行年月日		西暦2005年6月24日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
リヤムナイ3遺跡	岩内郡共和町字梨野舞納19-2ほか	01401	D-12-29	42度 59分 50秒	140度 32分 40秒	20040708 ～ 20041029	3500㎡	道路建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
リヤムナイ3遺跡	遺物包含地	縄文時代 前期 中期	フレイク・チップ集中 集石 焼土	8 6 4	縄文土器 (春日町式、円筒下層c式、サイベ沢Ⅶ式) 石器等 土器片 錘1点、円盤状土製品1点			

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第220集

共和町 リヤムナイ 3 遺跡(1)

—一般国道276号岩内共和道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 平成17年 6月24日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
TEL (011) 386-3231 FAX (011) 386-3238
[E-mail] mail@domaibun.or.jp
[URL] <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 中西印刷 株式会社
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL (011) 781-7501